

特集 阪神大震災
戦後50年記念連載

シベリアの青春
私と英語



ABBE

CCDED

読んで、書いて

ネットワーキング





有斐閣 読刊案内
(定価は税込み)
東京・神田・神保町2 街:03-3265-8811

●図書目録送呈●

好評販売

離婚の法律紛争 ●市民相談室シリウス
妻の自立や借金逃れのための禁断など多様な事例につき、法的に平易に解説
久保 定価一五四五円

離婚の裁判例
●生活紛争 裁判例シリウス
日5判並製カバ付
定価二五七五円
阿部 徹・野雅和・杉本孝子・高木喜子・鎌谷秀男・森 有子・山川一穂編著 市民の日常トラブル解決のための好評書《市民相談室シリウス》の判例版。離婚問題についての裁判所の考え方を明快に示す。

わかりやすい改正年金法
厚生省年金局
年金課編著
A5判並製カバ付
定価八七六円
生活に直結する改正年金法をわかりやすく解説する最新の書！支給年齢の繰り下げ、給付水準の見直し、保険料の値上げなど、老後に大きな影響を与えるその内容を立法担当者が具体的に明らかにする。

わかりやすい育児休業法新版
労働省婦人局
婦人福祉課編著
A5判並製カバ付
定価九二七円
育児休業を取得しやすいように休業期間中に手当の一部支給されることになるなど、条件整備がすすんだ。この改正点を簡潔に解説するとともに、巻末に育児休業申出書等の書式例を収録して便を図った。

男女同一賃金
中島通子
山田省三 著
山下裕子
定価一八五四円
●賃金差別をなくすためには……均等法が施行されて一〇年になろうとしているのに、女性の賃金が非常に低いのはなぜか。諸外国で実現されつつある「同一価値労働同一賃金」は日本でも可能だろうか。その実際と行方を検証する。

ひがしやま
東山書房
615104
東京都中央区新川2-2-1 708
東京都右京区山ノ内大町5-3 708
03(3265)8335
03(3265)8335
03(3265)8335
03(3265)8335

性かわらだるころ
悩みはバイ!
毎日中学生新聞連載
村瀬幸浩・堀口雅子著

悩むことはいいこと。人の苦しみ・悩みのわかることは大切。でも時には、1人で考え過ぎず、「助けてー」と声を出すことも大事。みんなの悩み・性編、からだ男の子編、からだ女の子編、ころころ編に2人が明快に答えます。(中学生に勧める本、主な思春期外来リスト付き)
四六判/定価1500円(税込)

“人間と性”を考える話題の総合情報誌
Human Sexuality
[ヒューマン・セクシュアリティ]
●編集長 ●村瀬幸浩●
●企画編集 ●“人間と性”教育研究協議会
●季刊 日5判・128頁●定価1600円(税込)

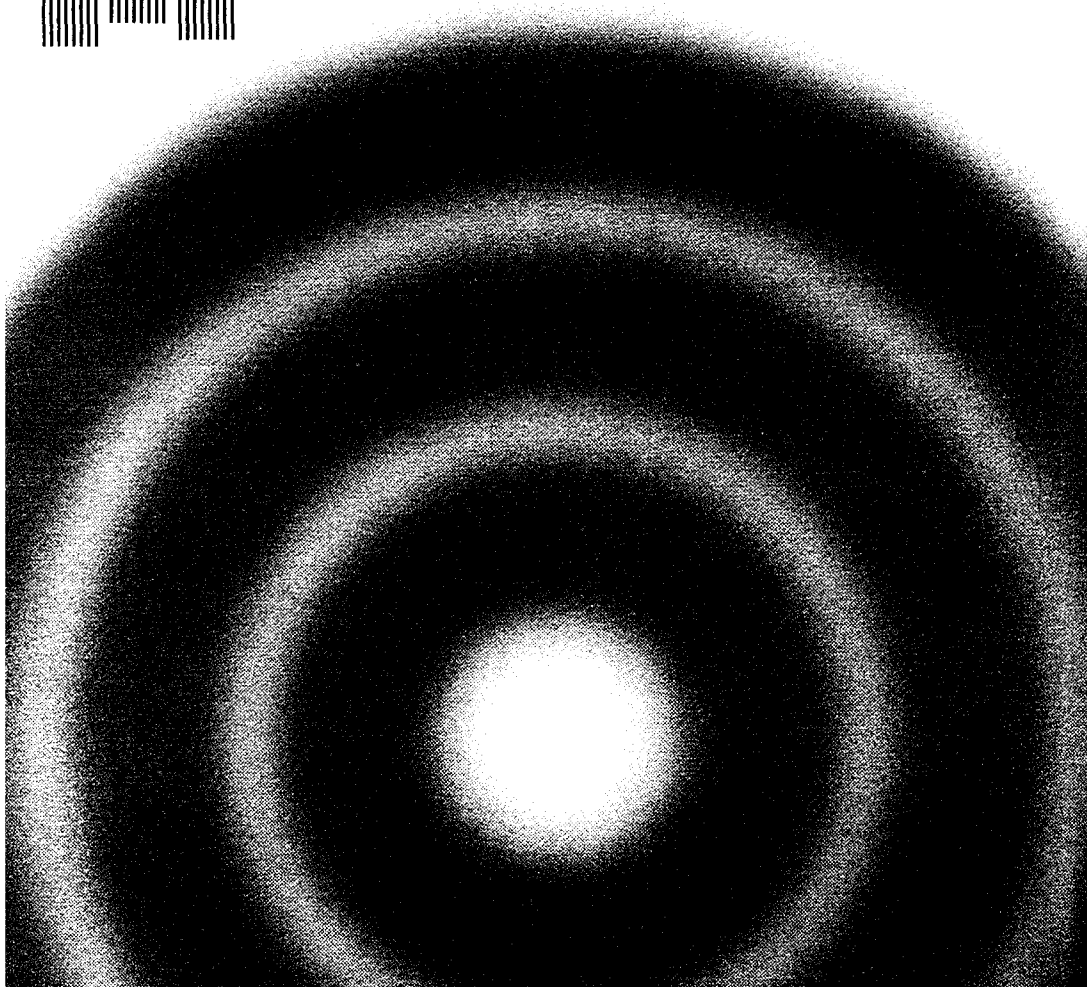
18号《新刊》《特集》育つものとしての「田性」そして「父性」
【特集原稿】いま、「田性」「父性」をとらえ直す
〈ゲスト〉船橋恵子・吉田謙二 〈司会〉原田瑞美子
【特集論文】「田性」と「父性」の構造変遷をいー大橋由香子
【特集ルポ】「田性」「父性」を問う
インタビュー・広岡智子・棚沢順子・山根寿一・汐見 露幸・伊藤公雄・佐藤弘道・古城十忍
取材・三井直美代・草野いつみ・清水久美・木谷愛子
●サブ特集=「引き裂かれた生と性」一戦後50年の現在①
【論文】従軍慰安婦問題と今日の課題……………川田文子

17号 家族—その将来の明暗を問う
16号 エイズ—共生・共存の展望をひらく
15号 女性の性的欲求と性行動
14号 10代の性と「純潔教育」を考える
13号 いま、あらためて人工妊娠中絶を問う

●郵送定期購読価格の中心●郵送 全国4,100円/年
(年寄4,400円) 日本郵便で送料別 送料500円



●—— 読んで、書いて ネットワーキング



読んで、書いてネットワークキング わいふ二五三号

目次

4 ヴァラエティ・ライフ①

「おやじの腕まくり」の仕掛け人
村上信夫さん
写真提供／文・村上信夫さん

特集 阪神大震災

- 10 阪神大震災を体験して 中松ミナ子
- 15 私にとつての阪神大震災 橋本あゆみ
- 22 地震反省記 FROM神戸 重住多津子
- 25 被災地にて 伊東容子
- 27 とりあえず震災当日のこと 藤岡智子
- 30 大震災とノストラダムス 西尾ありか
- 32 二十代最後の日 大目木智実

34 エッセイスト・クラブ

呉文子・高松恭子・森川須美子

40 おさない子を育てる

香山なおみ

42 戦後50年記念連載 シベリアの青春 ① 福井秀雄

54 マイジヨブ・マイホビー

十文字圭子・米山眞梨子・潮田京生子

60 船員の妻哀歌 松本とみよ

71 平成おったまげーション①⑨ 西田淑子

72 異界に祭り囃子が聞こえた 佐藤ゆかり

80 スパリー言

宮崎貴子・さいたまゆみ

83 おすすめの一冊

深田加奈・水落時子・小林智枝

86 戦後50年記念連載① 私と英語 酒井智恵子

93 サープレシープ

由美あき子・柳澤幾美・横山昭子
宮崎貴子・大塚広子・望月千枝
河野道子・鈴木美奈・太田知子
岡崎時子・伊東容子・稲垣信代
匿名・ホーヴィング幸子・西尾ありか

106 家族と私 福田幸子

109 老人ホーム情報センター発

110 わいわいがやがや

稲垣信代・福田由利子・鈴木洋子

112 ブック情報

114 母の特別養護老人ホーム入所 田中慶子

123 ピンポイントニュース

和田まゆみ・時尾松子

124 時事放談⑬「いじめ」

菊池裕子・木村澄子
早乙女光子・友納けい子

134 情報コーナー

136 コミック●痛快ノ一般人②⑥ 栗田笑

140 ファム・ポリテイク編集室より 田中喜美子

142 フリースペース

杉山千佳・高梨陽子・本庄たよ子

148 事務の窓口から

次号投稿募集 149
編集だより 152
投稿規定 150

わいふ原稿整理方針 41
文章講座のおすめ 70
バックナンバー 33

自費出版はわいふへどこぞ 123
添削希望の方へ 149

■表紙／レイアウト・工房はやし
■AD・林 佳恵

イラスト・梅村苺・奥島千恵子・小沢恵子
カステラネンコ・小林正子・小宅昌枝
佐藤端江子・田沼千恵・田村幹代・鳥居禎子
山田京子



地域で活動するイキイキ男たちのグループ
「おやじの腕まくり」の仕掛け人

村上信夫さん

(NHK アナウンサー)





節分会 今日は鬼を務めます！



家族そろってクッキング！



イベントの後にカンパイ！
これがあるからやめられない



地元を知ろう 歴史散歩

会社と自宅の往復だけでいいのか。地域に知り合いもない、地域行事に顔を出すこともない、そんなことでもいいのか。そんな思いでおやじたちに結集を呼びかけたグループが「おやじの腕まくり」です。合言葉は「おやじが変わる、家族が輝く、地域がよみがえる」。現在、会員は二十八人。平均年齢は四八・五歳。ふだんネクタイ締めてどういう仕事をしているのか、詳しいことはわかりません。しかしみんなユニークな趣味や特技を持った個性豊かなおやじたちばかりだということはわかっています。

活動の中心は、横浜市青葉区にある藤が丘地区センター。趣味や特技を生かして、おやじ人材バンクに登録されたおやじたちが、地域イベントの企画運営をします。

今年二月には「おやじの節分会」を開催、子どもたちはおやじたちとお面づくりをしたあと、おやじ鬼にあめあられと豆をぶつけて総攻撃。大変な盛り上がりでした。月一回の例会も含めて、その時その時、主役も変わります。あえて代表も置いていません。



介護ホームでのボランティア実習



さあ皆さんがんばっていきましょう！

「おやじの腕まくり」では、特別養護老人ホームでにわかボランティアをしたことがあります。車椅子を押してあげる、話し相手になつてあげる、どこか義務感にかられてのボランティア活動でした。そんな我々の目を見開かせる出来事がありました。ほとんど寝たきりのおばあさんが、習いはじめのエレフトーンを聞かせてくれたのです。演奏を聞いているうちに、逆にボランティアを受けているんだと実感しました。ボランティアとは自分の出来ることを交換しあうことだということが、少しわかった気がします。

自分たちの出来ることで、無理なく背伸びせずに、地域社会と関わっていきたいと考えています。いつべんに腕をまくりあげるのではなく、少しずつ腕まくりしながら、地域に「おやじ」の存在をアピールしていくつもりです。

「わいふ」の愛読者の女性の皆さん！「濡れ落葉 いまは乾いて 燃え上がり」ですぞ。



講師の“わいふ”編集長に激励されて



講座も無事終了 ごくろうさま！



講師と激論？



ノリのいいおやじになろう
マジックならまかせとけ！

「おやじの腕まくり」連絡先

横浜市青葉区藤が丘1-4-95
藤が丘地区センター
☎045-972-7021



牟田悌三講師を迎えて第1回講座

子どもから…

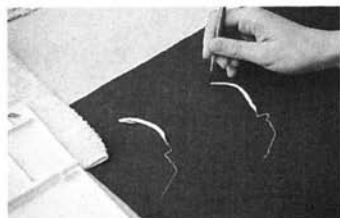
…お年寄りまで

誰でも楽しく絵が描ける! 彫刻もできる!

キミ子方式

●「キミ子方式」とは

三原色と白だけで色を作り、下描きをせず直接筆を使って、一点からとなりとなりと描いていきます。絵が大きくなつてはみ出したら紙を足し、余ったら紙を切って完成するという方法です。そうすることによって誰でも絵が描けるのです。あなたも「キミ子方式」で絵を描いてみませんか?



遠くの方にも正しく伝えたい…

通信講座

「キミ子方式通信講座」は、“その人が目の前にいるように指導する”ことを念頭に、松本キミ子が手紙で添削指導します。



- ▶ 確実に「キミ子方式」をマスターできます。
- ▶ 入門から順をおって正しい画材の配列で学べます。
- ▶ 人数を限定し、松本キミ子が責任をもって指導します。
- 授業の悩みや運営法についても、お答えいたします。



◀ あなたに届く教材

●どんなご相談でもお気軽に /

講座・講演は どこへでもでかけます!

「1回くらい、直接習ってみたい」キミ子方式の本を読んだら、お話を聞いてみたくなった。最近、こんな方が増えています。「近くまで来てくれないから、こちらで呼んでしまおう!」という人のいる所、全国どこへでも出かけます。費用と日程をご相談いたします。お気軽に /



▶他にも—

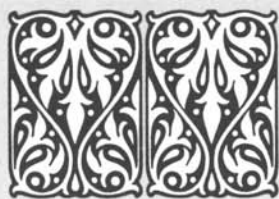
- キミコ・プラン・ドウでは
- 定期講座 (日時や期間もいろいろあります)
- 短期集中講座 (冬や夏休みなど)
- アートスクール (15歳から入れる美術学校)
- 受講生の展覧会など
- 出張教室
- 定期的に関東・大阪・京都などで開室中 /
- 「キミ子方式」に関するお問合せなど

●お申し込み、お問い合わせは

詳しい案内書をお送り致します

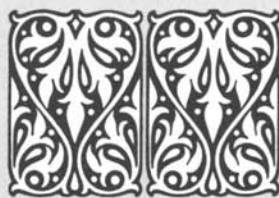
キミコ・プラン・ドウ ☎03-3467-3657

〒153 東京都目黒区駒場4-7-8 リバティハウス2F



特集

阪神大震災



特集

阪神大震災

阪神大震災を 体験して

和歌山県日高郡●中松ミナ子

帰ってきた大阪で罹災

息子が継いでくれた家業のすし店を手伝うため、大阪の住居に年末から暮らしていた夫と私は、あの地震の前夜には和歌山へ帰る予定でいた。しかし新年会の予約などが続きあと数日延期することに決めて床に入った。そしてそれがあの恐怖の大震災を体験する羽目になるなど夢にも思っていなかった。

た。

一月十七日午前五時四十六分——ドドドッガラガラ！ ガシャーン！ ありとあらゆる音が入り交じり頭上を飛び交い、体に当たりながら落下する得体の知れないモノ。

私は最初の突き上げられる動きでハッと目を覚まし、次の瞬間無我夢中で夫の布団に飛び移るや彼の胸にしがみついて「恐い！ 家が潰れるッ！ 死ぬう！」と大声で喚いていた記憶がある。それはわずか三十秒間であったというが、夫は赤ん坊をあやすかのようにな私の背中をずっと撫でてくれた。

オカルト映画のクライマックスが終

わったようにようやく奇妙な静けさが戻った中で夫が電気を付けた。

「キャッ！ なにイこれ！」私はぶるぶる震え出す。今の今まで私が横たわっていた布団、とくに枕の上にはタンスの上から落ちたガラスケースの飾り棚が粉々に成り、長年かけて集めた土鈴や壺、皿がただの断片物となり果てて散乱していたのである。

暗やみの中で私に当って落ちた電気傘が、棚から落ちた重い置き時計とくっつくように転がっている——。隣室をのぞくと本棚がタンスが斜めに傾いて机で止まっている。投げ散らかしたようにおびただしい本が部屋をうずめていた。

夫についてソロリソロリと階下に降り先ずスリッパを履いた。

玄関の下駄箱が定位置を異常に移動しており地震の大きさを実感する。

比較的家具の無い座敷は床間の花びんが倒れて水びたしになっている程度だが、台所に入ったとたん私は腰が抜けそうになった。

食器棚の両面ハッチが禍して思う存分に両側へ放り出されたグラスや、大切にしていた食器類が表現できない有様で木っ端微塵に碎けていた。

おまけに戴きもののウイスキーのびんも割れたらしくプンプンと匂う。



危険な所も多いので教師が引率して通学する子供達 神戸市立西灘小学校提供

テレビが地震ニュースを伝えてはいるが、ジッと見ているより隣家の息子たちが案じられてダイヤルを回している、あわただしい足音と共に「どうや？怪我ないか？」とパジャマ姿の息子が飛び込んできた。

私たちが気懸りだった玄関の熱帯魚の水槽が落ちて一面水びたし、一足の履物も足が入れられなかったと言う。

幸い小二の孫もベッドの枠が倒れかかるタンスを支え無事、嫁の上にタンスが直撃寸前、息子が満身の力でくい止め大事に至らなかったと告げた。

みんな無事だった

やがて夫は五百メートル離れた商店街の店が気懸りだと飛び出して行った。

娘の住む尼崎市の武庫之荘が心配で電話を掛けるが出てくれない……。いらいらしていると「大丈夫？ 私たちは無事よ、私ねハーちゃん（孫の名）にすんでのところで助けてもらったのよ」と電話が。あの最初のグラッで本能的にベビーベッドに覆いかぶさった直後、娘の枕に重い置物やスタンドが次々に落下したそうで、子を守ろうとして結果的には娘自身が救われたのだった。

さて朝日が昇ると十七日は終日穏やかであった。それに反してテレビが伝える悲惨なニュースに私の不安はいやが上にもつもの。独身時代の洋裁の先生は八十一歳の高齢で東灘区の高速道路が横転したすぐ近くに住まれている。

かつては生家があった西宮市の夙川には今も父方の親戚が数軒住む、しかし連絡もとれないまま長い長い一日が暮れていった。

何はともあれ店を開けよう、と家族揃って店へ……開店と同時に巻きずしや大阪人の好きなパツテラ、いなりずしが飛ぶように売れる。西宮、伊丹、宝塚、芦屋へ見舞いに駆けつける人々が持参する食料なのだ。その人たちの表情は身内や友人を案じて打ちひしがれている。

この辺りのスーパーや酒屋でさえ、ペットボトルの水やパン類が売り切れ商品ケースはガラガラという。

人の情が温かく

さてそんななかで我が家にもお見舞い電話が鳴る。最初はシアトルから数年前ひょんなことから我が家で居候をしながら日本語学校へ通ったアメリカ青年のグラントであった。

「オトサン、オカサン、ヤスヒコ、皆サン大丈夫？ ニュースペーパー神戸

の地震伝えています。気を付けて下さい」

続いて夫のもとで板前修業をし、今ではオーストラリアで日本料理店のチーフとして店を任されている吉田君からも電話で「皆さん怪我ありませんか？ こちらでは第一面で阪神方面のこと伝えていきます。豊中はどんな具合ですか？」と案じてくれた。

その他にも各地で店を構えている我が家の卒業（？）生からも気遣いの温かな電話があり、実に心強くうれしいものだった。

ところでテレビはほとんど地震に関わる報道番組を流していたが、震災による犠牲者の名が時を追うごとに増えていく……その中に（アッ！）と思わず叫んだのは新聞の投稿欄でよくお見かけする女性のお名前。まさか！ 信じられない。いや信じたくない。

場面が変わるとそこには情容赦なく燃え上がる炎が右へ左へと広がり、ほとんど焼け野原と化した神戸の街……。見慣れた阪急三宮駅ビルの崩れた



炊き出し風景 神戸市立西灘小学校提供

壁が思わず涙を誘う。

神戸っ子だった母は買物も映画を観るのも神戸へ出かけた。したがって物心ついたら私も神戸が大好きになり、夙川駅から三宮までの阪急神戸線の風景を心に刻んでいたほど……。

最近ようやく戦後の廃虚であった光景を忘れかけていたのに……またしても当時とそっくり同じになるなんて……。

ようやく親戚と連絡がとれた。ガスも水道も止まったままで不自由な生活ながら、家族は怪我もなく元気とのこと。このところ疎遠になっていた人と何年振りかで交わす会話に、懐かしく温かな情が通うのを実感した。

地震以来、唯一ほっとした一瞬であり、早速心ばかりのお見舞い品を宅急便に託したのである。一年に一、二度しか逢うことのない親友は、被害の大きかった尼崎市の立花町に住むので何度もダイヤルを回し続けていたら、やっと繋がりが互いの無事を喜び合った。しかし彼女は三年前にご主人をガ

ンで亡くし、残された恩給とわずかな収入でつましく暮らしている。「もう傷んだ家の修理代のこと考えると眠れないくらいよ」と嘆く。精一杯の気持ちを含めて「頑張っテネ、私で役に立つことあれば遠慮なく言ッテ。気が滅入ッたら遊びに来てよね」とごく一般的な言葉しか出ないもどかしさ。

なにしろ私には被災地に駆けつけてボランティアをする体力もなく人並みの募金がせいぜいなのだ。なんとこの微力さであろう。なんとこの心の貧しさであろう。次第に自己嫌悪に陥って地震後私は初めて不眠という経験もした。その半分はひんぱんに感じる余震の恐怖からでもあるのだが。

それでも商売

さて崩れ落ちた我が家と息子の住いの屋根瓦を逸早く見つけた業者が訪れた。遅かれ早かれ修理を必要とする状態ならば雨が降るまでに補修を施さねばならない。夫はいつもの早わざで

アツと言う間に耐震力のある軽量瓦に吹き替える契約を交わした。

(ヤレヤレ老後の優雅(?))な暮らしはこうして不安を伴いささか苦しくなっていく……)と私はひそかに計算してはため息まじりで嘆く。

だが家を失い職場を失い、最愛の家族さえ失った人々が今日も避難所で寒風に耐えていると思うと、心苦しいほど幸せな私であるのにとキュッと身をちぢめるのだった。

それらの気の毒な人さまの不幸をヨソにといいわけではないが、我が家の商売は地震の翌日から連日忙しい。近所の家に避難されてきた家族の夕食であつたり、宝塚や伊丹からお風呂屋さんにやって来た人々が、小さなすし屋でほんとと人心地を取り戻されるからだった。

こうして少しずつ平静な生活に戻ったが、果たして今年の節分の「丸かぶり巻きずし」は売れるのだろうか? 予想も立たないうちに当日を迎えた。どうやら人々は縁起をかつぐのか「幸

運の巻きずし」はどんどん売れた。きつと悲しみや辛いことを忘れようとなさやかな願いを込めた「丸かぶり」だったのかも知れない。

それにしても今回の地震で人間の優しさや強さを知った。一見頼りなげに見えた若者たちの勇気と献身には大いに感動した。

きつとこの活動を通して若い人たちは次なる目標を確かな目で見つけることだろう。

二月十四日付読売新聞のコラムの中の数行が忘れられない。

「……今はまだ余裕はないにせよ、阪神大震災の「震災前」「震災後」が長



神戸市中央区 伊東優里さん撮影

く語られることになるに違いない。もとより「失われたもの」はだれしもが惜しむ、が震災前に比べ多くの人々がより切実に思うようになったのは助け合いのありがたさ、ボランティア活動の貴さだったのではないか。それが震災後の実感だ。……」と。

確かに地震による痛ましい犠牲者は五千三百二十九名を数える。だがこの苦しみの中から人は人によって救われ生きる勇気を与えられるのかも知れない。

私の好きな神戸の街は新しく復興を果たしてくれるに違いない。それも案外早い日に――。

私にとっての 阪神大震災

大阪府東大阪市●橋本あゆみ

私の故郷、神戸、そして震災

私は神戸っ子である。結婚して東大阪市に来るまでの二十四年間に神戸で過ごした。実家は、長田区の山手であり、窓をあけると広々と広がる海、そして、船、長田区の南部に密集している工場群が一望できた。幼いころからこの景色をながめるのが好きだった。休日には家族で六甲山をドライブして、帰り道にはゴチャゴチャした以前の中華街で、かた焼そばとかに玉を食べ、近くの古い喫茶店でコーヒーを飲むのが楽しみだった。

高校時代、神戸の西部、垂水区の高校へ通った。垂水区は山と海が自然のままに残っていて、のんびりと思春期

を楽しんだ。大学生になって、今度はあこがれの阪急神戸線を通うようになる。静かな住宅街。点在しているほんとうにおしゃれなブティック、レストラン、喫茶店。なにかも楽しくて恋愛ばかりしてすごす。そしてなくてはならない三宮、元町。阪急、阪神、JRのすべての駅が一つの所に集まりビジネス、そして歓楽街としてもその中心をなす。安い飲み屋からおしゃれなバーまで、そして高級ブティックから阪急高架下商店街まで、値段の高い安いにかかわらず、それなりの個性のある店が多かった。そして神戸名物異人館と外国人居留地の異国情緒あふれるたたずまい。

夫と私は大学のサークル仲間である。夫は生まれも育ちも河内（東大阪市）なのだが神戸を大好きになった。私達が結婚したころ、ちょうど阪神高速神戸線と環状線、東大阪線がつながって、五十分ほどで行き来できるようになった。それ以来、東大阪に住むようになってからも週に一度は神戸で買い物

をしたりドライブするようになった。私にとって、私達夫婦にとって神戸はまさに生活圏の一部となっていた。

平成七年一月十七日、午前五時四十六分。神戸は、自然の大きな力でメチャメチャに壊されてしまった。阪急三宮駅の駅舎は一瞬にしてガレキの山となり、多くのビルが横倒しになって道路をふさぎ、そしてどうにか倒れなかったビルも、まん中の階がつぶれ傾いた。そここの線路の上に脱線した電車が横たわる。

長田区の実家は倒壊はまぬがれたものの、家の中のすべてのものはぶっ飛んで部屋中に散乱した。食器はすべて粉々に割れ、冷蔵庫、食器棚が倒れ、二十九インチのテレビは母をめがけて飛んできた。そしてタンスは引き出しだけがぬけて二、三メートル飛んだそう。命からがら服に着がえて、貴重品だけをかかえて、家の建っている山から見たものは、一つまた一つと暗闇の中に火の手が上がり、すさまじい速さで炎の舌が町をなめつくしている様



神戸市長田区の倒壊現場 橋本あゆみさん提供

だった。

私の二人の妹の家族も、東灘区と垂水区で被災した。二人ともまだ新しいマンションに住んでいたのが倒壊はしなかったが、家の中は実家同様、足の踏み場もない状態。停電した中、垂水の妹はただ子供を抱いてふるえていたという。東灘区の阪急六甲の妹は不安でたまらず、夫婦で近所の人達と近くの小学校に行ったが、何の情報も得られなかったそうだ。

私はそのころ、震度四のゆれにおどろいて、どこよりも大阪にすごい地震がきたと信じこんでいた。マンションの六階の我が家は、震

度四でも充分こわかった。タンスの上のものは降ってくる。天井からぶらさがっている電燈は大きくゆれて天井にあたった。そのうちゆれはおさまり、テレビをつけて三十分ほどするうちに、おととい通ったばかりの阪神高速神戸線の東灘区の部分が見事に横倒しになっている様子に愕然とする。そこから先は、ショックングな映像の連続となる。あわてて神戸の実家や妹たちに電話をするが、すでに通じず、私は事の重大さにやっと気づいて書き留めた。

それから長い一日だった。三軒の家族の安否は全くわからない。六甲の妹夫婦は神戸市職員だ。昼ごろ、災害対策本部にいる義弟から妹夫婦の無事を知らされ、ホッと一安心するが、年老いた両親と幼子をかかえた垂水の妹とは連絡がとれない。夕方五時ごろ、やっと垂水の妹から、両親と家、そして妹達の家族の無事を知った。その途端、私の目からせきを切ったように涙があふれた。家族の無事を知り安心した一方、今まであたり前のように思っ

ていた神戸の町が私にとっていかに大切で、身体の一部のようになっていたか、ということを感じしひと感じさせられ、ただもう悲しく、私は泣き続けた。

震災当日から 人々を襲ったパニック

一月十七日地震の直後、私の両親の家では電気、水道、ガスはあつという間に止まったようだ。しかし、電気だけは朝のうちに回復した。これは長田区の中では非常にめぐまれたことだった。おかげでテレビの情報が得られ、ホットカーペットで暖をとり、電気ポットで温かいお茶が飲めた。

おまけに正月前から買いだめしてあつた肉、野菜、米、餅などの食料品もティッシュペーパーなどの日用品もたっぷりあつた。

ただ、ほんとうに困つたのが「水」であつた。十七日当日は、ポットのの中にお湯があり、ウーロン茶などもあつたようだが、そんなものはたちまちな

くなる。電気炊飯器も使えるし米もあるのだが、水がなければご飯はたけない。

母はそれから二月二十二日の今日にいたるまでポリタンクをさげて水をもらいに近くの小学校へ毎日通っている。特に十七日、十八日、十九日の三日間は、五、六時間並んで一・五リットルの水をもらえるかどうかという状態だったようだ。給水車が小学校の前に来るというので行ってみたら待てどくらせど来ず、結局来ずじまいだった。り、来ても二トンほどの水で、長蛇の列のほんの何十人かの人にあたるだけで他の百人以上の人は、結局もらえなかったということもしょっちゅうだったようだ。またそんな時にかぎってデマが流れる。「須磨の山奥に湧き水が出る。それをくみに行こう」などともことしやかにささやかれたりしたが、実際にその湧き水をくんできた人は誰もいなかった。

そのころ、垂水の妹一家は、マンションのタンクに水がある間にふるお

けいっばいに水をためていたが、飲料水を求めてさまよっていた。幸運なことに、スーパーの開店にちょうどめぐりあい、ウーロン茶などの飲みものと食料は買いこんだものの、かんじんの「水」とすぐ食べられる非常食、カップラーメンやパンはなかったそうだ。やはり、電気が来ていた妹宅も、「水」さえあればなんとかなる状態だったのだが、コンビニにもスーパーにも、ことごとく水はなかった。

あきらめかけて、酒屋の前の自動販売機で缶コーヒーを買っていると、酒屋の店の中になんと水割り用のケース入りミネラルウォーターが置いてあるではないか。

妹の夫は思わず、「これ、売ってもらえませんか……」「いや、ええよ」「じゃ、二ケースだけでもわけてもらえますか?」「もっとええで」「えー。じゃ、トランクにつめるだけつんで下さい!」

妹の夫はミネラルウォーター三十本入り五ケースをトランクにつみ、その

うち二ケースを長田の実家へと持って
いってくれた。

ちょうど母は水をもつうための行列
に並んでいるところだったが、義弟に
水を持ってきたと耳うちされ、すぐ妹
に、「あんた、すぐご飯たいて！」○
○さんのおばちゃん、きのうからなん
にも食べてないねんて！」と叫んだら
しい。

こういうのを地獄に仏というのだろ
うが、義弟と酒屋さんのおかげで両親
は、とりあえず水を確保した。しかし、
当然それで充分足りるはずもなく、ト
イレなどの生活用水はずっと不足し、
衛生状態も悪くなっているようだ。

二十リットル入りのポリタンクに水
をいっぱい入れた重さをご存知だろう
か。まして、両手にさげてなど坂の多
い神戸の街ではとても前に進めない。

「水」、こんなに「水」でパニックに陥
るとは……。神戸市もせめて、住民一
人にペットボトル一本くらいは区役所
に行けばもらえるぐらいの態勢をとっ
ていてくれたらと思う。



これもボランティアの方々の仕事です 神戸市立西灘小学校提供

妹と母が水を求めて走り回っている
間に長田区では、ひそかに焼け残った
事務所や少し離れた被害の少ない垂水
区、西区の事務所や倉庫が競争でおさ
えられていた。そして、みるみるうち
にその借賃は上がっていった。

私の父は、長田区の地場産業である
靴の問屋である。事務所と倉庫は長田
区南部の靴業界専門のビルにあった。
しかし今回の地震でこのビルの一階は

見るも無残にくずれおち、二階が一階
になった。父の事務所は三階だったの
で、とりあえず中の在庫商品や備品は
残ったが事務所としては使えなくなっ
た。父もいっしょに仕事をしている垂
水の義弟も思いもよらなかっただろう
が、十七日、十八日のうちに不動産は
高騰し、父が新しい事務所を探し始め
た時には物件は皆無に近く、あっても
法外な借賃をふっかけられた。しか
し、なんとか明石に小さな事務所をみ
つけて、くずれかけたビルから荷物を
運び出し、会社再開にこぎつけること
ができた。

不動産というのは、あこぎなものだ
なあとと思う。こんなときにさえ、値段
が上がる。大手企業はほんとうに早く
よい場所をお金を投じてでも押さえられ
る。しかし、事務所も倉庫も工場も焼
きつくされ、自宅まで燃えてしまった
経営者達にどうして手をうつことがで
きるだろう。

私の父の場合など、ほんとうに申し
わけないが幸運なほうだったと思う。

長田区の靴業界は、たくさんの中小企業、いや、下請けと称する内職でさええられていた。ご存じの通り、そのほとんどは焼けて、なかなか立ち直れそうにない。神戸市は三年後ぐらいをめぐにとりあえず仮設の工場を建てようとしているようだが、その三年間を何とか持ちこたえられるように資金的にも早く援助してほしいと思う。

救援者も被災民

六甲に住んでいる妹夫婦は神戸市職員である。地震当日十七日、家の中は足の踏み場もない状態だったが、二人はとりあえず、夜明けと共に神戸市役所に車でかけつけた。その行く道、道路は陥没し、ビルはかたむき、道はあらゆるところでふさがれ、信号機が壊れて無法状態になっていた。とにかく二人は市役所につき、義弟はそれから四日間、災害対策本部に入ったきり、帰って来なかった。

妹夫婦のマンションは倒壊はまぬが

れたものの被害をうけたのにかわりはない。先に帰った妹はふるに水をいっぱいいためた。しかし食糧、飲料水がないのは他の人と同じだ。しかし一人では恐ろしくて買い物にも行けなかったという。妹夫婦にとって幸運だったのは六甲トンネルが被害をうけなかったことだ。おかげで義弟の実家の両親が、氷上郡から水と食糧をもってかけつけてくれた。もしこれがなかったら



運動場の温水シャワー設備 神戸市立西灘小学校提供

妹は、電話も通じず、誰とも連絡がとれない状態であった一人で途方にくれただろうと思う。

義弟は港灣局につとめているのだが、最初の三日間はまだ何の統制もとれていない状況での避難所への救援物資の搬送にほとんど不眠不休であっていたという。他の職員も義弟よりもっと悲惨な状況の家族や家をおいて疲労困ぱいしながらの救援活動だったろう。何人もの人から役所へ行こうとする職員に「ほんとうに私をほっといて行くの?」と家族の者に聞かれてつらかったという話を聞いた。

公務員は公僕だ。税金で彼らの給料はまかなわれている。でも被災民であることも今度の震災の場合、認めてあげないといけないと思う。一人の消防署員が過労死した。震災で生き残ることができたのに、過労死しなければならぬというのはつらい。やはり自衛隊はもっと早く被災地に入って活動してほしい。

精神的にも肉体的にも極限の状態に



毎朝ひらかれるリーダー会議 神戸市立西灘小学校提供

ボランティアは むずかしそうだ

今回の震災で私の家族は避難所に行くことはなかった。しかし長田区の実家のそばの小学校はすべて避難所となり、ボランティアが活躍していた。だが、いろいろとむずかしい問題があったようだ。

まず、神戸市は避難所にうまくボランティアの人達を配分できなかった。それにボランティアの人達も奉仕である以上、あくまでも自分の生活優先だ。土日は参加できても平日は来れないという人が多かったと聞く。従って同じ人ばかりに負担がかかり疲労していく。

そのうちに避難所の人達から、お互いに協力してよりよい生活をめざすのではなくて、やってもらってあたり前の感覚が生まれてきた。これがボランティアの人を肉体的にも精神的にもますます追いつめていく。ある避難所では「たとえは悪いかも知れないが、いつまでもひな鳥が親鳥にえさをもらう

かのように一方的に頼るのはよくない。みんな参加しなければ」とボランティアが人々に訴えたという。ボランティアと自立。この意識をはっきりと認識しないと、ただでさえストレスの多い状態にあるのだから衝突が起っても仕方がないと思う。

私はボランティアはまだまだ長期的に、いろいろな面で必要だと思う。だんだん時間がたつにつれて参加する人もへってくるだろう。奉仕奉仕では長く続けていくには限界がある。ボランティアを援助するという意味において私は有償にしてみたいのではないかとと思う。しかし、自己満足のためのボランティアでは困る。

私の母は、水をくみに坂を下って近くの小学校へ行った。水をポリタンクいっぱい入れ、ショッピングカートにつんでひっぱって帰ろうとした時、若い大学生の男性が、「おばちゃん、どこまで行くねん。おれもっていったら」といつてくれたという。毎日毎日の水くみで腕をいためかけていた母

ある被災民を助けるということはいへんな労力がある。同じように被災した人にそれをさせるにはあまりにも荷が重いと思う。被災した市民は区役所、市役所で行政の対応の遅さ、不手際を責める場面も多かったようだが、おのずとその限界はあるように思う。

被災地域以外の人の援助。これが少しでもたくさん、早く入ってこられるように前もって行政も準備をしてほしいと思う。

に、その男性は神様にみえたという。しかしその一方、「私はボランティアに来て、水くみの仕事しかなかった」という言葉も聞いた。細々した生活の中でほんの小さな地味なことでも、ほんとうに人を助けることはできるところ。ボランティアってそういうところから始まるのではないだろうか。

これからの危機管理

「関西に地震はこない」私達関西人はそう信じこんで生きてきた。地震は遠い所で起ってテレビで見えるものだと。その感覚は私達一般市民だけでなく、市や県の当局者もそうだった。もっと一人一人が災害の危機について考えて、備えをしていたらと思うが今さらいうてもせんないことだ。今回の地震の後、さすがに防災ブームが日本全国を駆けめぐり、人々は、リュックに非常用の水や食料、そして懐中電燈、ラジオなどを準備し、タンスの転倒を防ぐ金具が売り切れになっている。しかし

日本人のことだ、いざれ忘れていくのではないだろうか。それだけはぜったいに避けなければならない。

スイスでは国が一軒一軒の家庭に危機管理マニュアルを配っているという。それは、最悪の事態を設定してあり、それぞれの家庭で日常の備えとして、一人あたり米二キロ、めん類二キロ、食用油一リットルなど一定量の非常用食料、燃料を備蓄していることを義務づけている。また、緊急時用のカバンも用意し、雨具、下着、懐中電燈、ラジオなどと二日分の食料、身分証明書、健康保険証、現金などを入れて、



神戸市長田区の倒壊現場

橋本あゆみさん提供

常に手元におくように指示されているという。

個人も行政も、「たぶんだいじょうぶだろう」という考え方はすて、最悪の事態を考えた危機管理を充分にやっておくべきだろう。これは新しい町神戸を作っていく上でとても大切なことだと思う。

最後に一日も早く神戸が立ち直ることを願って

私の大切な故郷の神戸は悲しいことに大きな自然の力に壊されてしまった。しかし、ガレキの中に店を建てて、以前より安く物を売っている人々にもどってきた笑顔やファイトが神戸の未来を明るく感じさせてくれる。でもまだ、絶望のどん底にいる人もたくさんいると思う。身寄りのないお年寄などほんとうに心細くさみしい思いをされていると思う。私の家族は幸運にも無事であったが、もっとひどい被害をうけた方や、亡くなられた方の遺族の方々には、かけることばもない。た

だ心からのお見舞と、ご冥福をお祈りするだけである。

人々が思いもよらなかった災害。それほど大きな災害を今神戸は人々が協力してのりこえようとしている。これをのりこえたとき、神戸という町は、町も人もすばらしい都市になっていると信じたい。自然と近代化と防災がしっかり共生した、また新たな神戸になることを願っていつまでも応援しつづけたい。



近所の散髪屋さんが出張無料サービス 神戸市立西灘小学校提供

地震反省記

FROM神戸

神戸市西区●重住多津子（37歳）

生死を分ける条件

自然は厳しいどころか、非情でさえあった。その日、午前五時四十六分に眠っていた場所によって、ほとんど生死が決定されたのだから……。

被害の少なかった西区では、「嵐の中で船に乗っているような感じ」だったのだが、百八十人に一人が死んだといわれている東灘区に住んでいた友人によると、「絶叫コースターに乗っているような二十秒間だった」そうである。

もしこの時刻がもう一、二時間遅れていたなら、また逆に、半日早い三連休の夕方だったらと考えるだけでもぞつとす。

たいていの家族は、家に揃っていた。今回被災者が、比較的冷静であった原因はこのあたりにもあると思う。家族がばらばらで安否が確認できないような状況だったら、だれが冷静でいられるだろう。

電話は全くつながらないし、交通機関も全滅。長田区に一人で住んでいた義母の安否を、夫は自転車で三時間かけて確かめに行った。本当に頼りになるのは自分の足だけ。車を二台持つよりも、車にバイク、自転車、と多様に用意しておくべきである。ベビーカーでさえ、高齢者の水運びに役立っていた。

何もかも、ガスや電気にたよっている「快適な生活」の何とひ弱なこと。

超高層マンションの住人達は、水運びさえ限界を感じ（何しろ二十〜三十階の階段を、ポリタンク抱えて上らなくてはいけないのだ）、家に被害はなくても早々に脱出せざるをえなかった。ガス暖房のビルなどとてもない。一、二カ月前まで（もうそのころには、

春になっているが、底冷えの中で、座布団とカイロ持参で仕事しなくてはならなくなった。

こんな時、舞子坂にある昔ながらの古い家に嫁として住んでいる友人は正解だった。なぜならその家は、ガスはプロパン、風呂は石油だったのだ。「これであと、庭に井戸を掘れば完璧だね」と笑い合った。冗談ではない。本当に井戸は必要である。公園や病院には井戸を掘っておくべきだと思った。普段は散水や手洗い用に使えばよい。

水も二、三週間出ないと、それが当たり前に感じてくるらしい。人間の適応力とはたくましいものだ。食器洗いも、洗濯もしなくてよい（したくても、できないのだから）。主婦は圧倒的にヒマになった。食事の支度も簡単に出来るものばかりで済ませられる。つい買い置きしすぎる癖がついて（何しろ、地震の次の日、スーパーのレジは二時間待ちだった。在庫の商品がなくなったらそれでもう入荷してこない

のではないかと不安にかられていた。実際は、日を追うごとに入荷されてきたのだが、食べすぎで震災太りを心配したぐらいであった。

子供達は、持て余すほどの遊び時間を取り戻した。塾やおけいこ事は一カ月以上中止になったし、学校も給食が出来ないので午前中のみ。中学校では部活も消えた。もともとどうでもいい事はかりさせすぎていたのだ。生活はシンプルでいい。ファミコンはつぶれたけれど、昔ながらの遊びが復活した。我が家でも、実家が半壊状態なので、母は妹の家、父は私の家に泊まっている。娘達はおじいちゃんに、将棋やあやとりや百人一首を教えてもらって得意そうである。

避難所でのあれこれ

さて、普段何気なく目にしていた「緊急避難所」の札であったが、今回はいやというほどそこがクローズアップされた。

夫の勤務先は、被害の大きかった灘区の小学校である。そこはNHKで報道されたこともあって、一時は二千名をこえる人々が避難してきていた。ボランティアも多く来てくださったっているが、やはり事情のわかっているその学校の教師が主力になるので、震災以降、二泊三日の泊り込み勤務、そして一日休む、というローテーションになっている。

水が出るまでの二週間、もっとも困ったのは二千人大便の処理であったという。小はプールの水をバケツに汲んで流せるが、大はあまりに大量のため別のビニール袋に除けておくことにしたらしい。使用後のペーパーは燃えるゴミとして出せるが、問題は大便を貯めたビニール袋であった。そこで運動場の隅に大きな穴を掘り、環境局のバキュームカーが集めて来てくれるまでそこに置いておくことにしたそうである。この話だけでも、「避難所」という所がいかに異様な環境であるかわかり頂けると思う。

地震当夜、続々と人々が小学校に集まってきたのだが、なかには非常識な人もいたらしい。最も呆れたのは、鍵がかかっていたはずの保健室に、入り込んで占領してしまった一家だった。

若い父親はチンピラ風、母親は三歳ぐらいの子供を叱りとばしながら、一日中ベッドに寝転んでテレビを見ていたという。退屈すると勝手に理科室などに入り込み「あっ、ここビデオあるやん」などと言い出したので、夫達はあわてて貴重品をすべて職員室に運びこんだそうだ。

二十人余りの被災者を二十数名の教師とボランティアだけで世話するのは不可能と判断し、一週間後、被災者をグループ分けしてリーダーを決め、自主管理してもらうことになった。半数以上の人は元気で動けるのだから、食事運びや清掃など、当番制にし、だいぶん楽になったと言っていた。

ちなみに、避難所でもっとも欲しかったのは、「人」だったそうである。何も専門的な技術などなくても、物資

の見張り番、電話番号や荷物運びなど、いくらでも仕事はある。神戸大の学生が、自分のパソコンを持ち込んで二日ばかりで被災者のデータを作ってくれたのは本当に助かったと言っていた。あと欲しかった物は、おかずの缶詰（おにぎりばかりでは飽きるし日持ちがしない）と高齢者用の下着（普通のパンティではなく、長めのズロースと呼ばれるもの）だったとか。

この小学校のように、救援物資が豊富な避難所に住んでいると、ほとんどお金を使わないで暮らせる。食料、新品の衣料、生活用品から、お風呂まですべて無料である。ところが、集団生活がいやで、半壊状態の自宅でがんばっている人、公園などでテント暮らしをしている人、自分の車の中で寝泊りをしている人などには、この恩恵が行き渡っていないことが多い。

長田区には、今回、ボランティアがこういう人達のところを自転車で回って、必要な物を必要な人の所へ、届けようとしていたらしい。

無料の救援物資を並べる青空市で子供達も店番の仕事 神戸市立西灘小学校提供



創価学会員だった義母は、このたびの震災で、完全に共産党のファンになってしまった。奇跡的に焼け残った義母達の地域を、実に小マメに回ってくれていたのだ。普段はうるさいだけの右翼の宣伝カーも、避難所に真っ先に駆け付けて、おにぎりとお水を届けてくれたそうだし、「さきがけ」はマイクロバスで毎日「おふるツアー」と称して、避難所とゴルフ場を往復している。

夫は、担任していた五年生の女の子が、三週間後に病院で亡くなり、ひどく落ち込んでいる。校区内のほとんどの木造家屋は、つぶれて道も通れない状態のままだし、避難所になってしまった学校では、ボランティア同士がもめたり、おばさんと若い女の子が下着の干し場所のことでけんかしている……。いつになったら教室で授業できるやら全くメドもたないし、と、彼はあの日以来、職場に行くたびに悪夢の世界へワープしているような気がすると言う。おそらく被災者の多くの人

もそう感じているに違いない。

あるインタビューで、家と店を失った人が「元どおりの生活を取り戻せるようになることが、今の夢です」と語っていた。昨日と同じ生活が今日も続けられる、そんな当たり前だと思っていたことが「夢」になってしまった。家や仕事は、努力すれば何とか取り戻せるかもしれない。だが亡くなった妻や夫、親、兄弟、子供、友人は失われたまま、時は流れてゆく。



生活用品やおもちゃも 神戸市立西灘小学校提供

被災地にて

兵庫県明石市●伊東容子

阪神大震災によって被災地に認定された我が街からの郵便料金は、二月二十一日まで無料となった。以下は、私がこのサービスを自分のものとするまでの記録である。

社会活動を始めて丸四年になる私は、毎月随分の郵便代を使っている。だのに被災後に郵便局でこの情報を伝えられた事はなかった。

神戸の姉の事務所に「㊦」と赤く手書きした、切手の貼っていない封書が届き、その封書に驚いている姉に事務の人が「なんか、ゆうべラジオで郵送料が無料になるといってましたよ」と教えてくれた。翌日、私は明石市の○郵便局へはがき数枚、持っていった。「無料の郵便があるそうですね……」

「あー被災郵便ね」
局員は、私ののがきの内容に目を通



神戸市中央区 伊東優里さん撮影



神戸市中央区の湊川神社 伊東進さん撮影

す。いや目を通すふりをしたただけなのかもしれない。

「お出ししますよ」

女性職員は、内容が地震の事ならよいといわんばかりに受け取っていた。

「八十円九十円もいいのですか？」

「八十円九十円よろしいです」と答える。

やっと局の窓口のつい立てにあまりにも小さな貼り紙を見つけた。A4の大きさに薄い字が並んでいる。人々に気付かれたくないかのように目につきにくい所に貼ってある。他の被災認定地区から郵便物が我が家に毎日届くけれど「③」で来たものは一つもない。きつとどこの郵便局も積極的にアナウンスしていないのだ。

姉が神戸のいつも利用している局に聞くと「業務用はダメ」といわれ、翌日「何か制限はありませんか？」と神戸中央郵便局に問い合わせると「文面はなんでもよい。業務用も可。個数はいくらでも可」とまちまちの答え。とにかく中央郵便局の返事を確かな情報

として二月六日、大袋につめ込んだたくさんの郵便物を持っていった。

「中央郵便局に問い合わせました。よろしく願います」「はいはい」との返事。

私のそばには長い行列ができ、局員はお年寄の差し出した封筒を計っている。「〇〇円です」腰が二つ折れの人がお金を数える。

十円二十円と財布からお金を出す姿が痛々しい。

その向こうには、白々しい文字「詳しくは窓口でおたずね下さい」の文句が映っている。いつもは郵便代を節約していても、ご自分の無事を伝えるために手紙を書いた人なのかもしれない。老人を見ながら思う。

帰宅してから、局長が電話をかけてきた。

「業務用の封書が使ってありますね。裏に個人名を書きに来てくれませんか？ 個人でないと出せないのです」「姉のも混じっているのですが。なんだったら神戸のほうで出しましょう



か?」

「いや、裏にお姉さんの名を書いてくれたらいいんです」

封書の表には差出人として姉と共同経営者の名が並んでおり、チェックでわかるようになっていた。また、局まで出かける。

局ではまた、別の職員が念を押す。

「個人に出すのはええんやけれど、会社に出したらあかんで」なんのこっちゃあ!!

内容は何でもいいという中央局の返事なのに余計な一言を添えるのを忘れない。局内ではこの制度を一般市民に教えてはいけないと口止めをし、局長は自分の局で④郵便物を多く扱うと「不名誉」になると思っているのだろうか? 憤慨した私はポスト横で利用者に教え始めた。帰宅後は知人に電話

をかけたが稀に知っている人もいた。

「お役所仕事め」とあきれてしまう。

これが日本政府や役所のする「人への手助け」なのだ。果たして心が通っているといえるのか?

情報を的確に伝え、人を導くべき窓口業務で、「教えない、利用させない」

ために各郵便局員は、「嫌味」を言い、市民に気づまりを感じさせ、気を使わせた上で「恩恵」を与える。

日本の福祉は全てこのパターンとも聞いている。局の人達も皆、心がなさすぎると思う。

まじめに働き乏しい年金暮らしが待っている人々が同じような立場の人を助けていない。

同じ事が起った時、カナダなら、まず第一番に郵便局の人が一人一人に「ただですよ」と教えてくれるだろう。カナダで七年暮らした私は自信を持って断言できる。

表面的で浮ついた国、日本。人間らしい配慮に欠ける社会文化に触れる不愉快な日々が続いている。

とりあえず

震災当日のこと

神戸市北区●藤岡智子

「もう起きる時間だろうか」

そう思いながらも、うつらうつらしていた私の夢をいきなりの衝撃が打ち破った。

平成七年一月十七日、早朝。

床が激しく左右に、そして上下へと揺れる。キッチンではガラスの割れる音が。私は、両脇で眠っていた四歳と一歳の子供を抱えこみ、ひたすら揺れが終わるのを待った。

「大丈夫か」二階で出勤前の身仕度をしていた夫が、数十秒かの震動がおさまるのを待って降りてきた。揺れている間、部屋の入り口にかけていた大きな額が落ちそうで室外に出られなかったという。

「どうしよう、揺り戻しがあるかもしれない」



神戸市兵庫区の実家 藤岡智子さん提供

とりあえず今は無事。だがこんな大きな地震は初めてだ。家の中と外、どちらが安全かわからない。

外の近所の人たちの声につられて、出てみることにした。

「余震がありそうだ」

「怖いね」みなパジャマに上着をはおっただけの姿で、興奮しながら口々

に言い合った。

だが、これが震災と名のつくほどのものであると、神戸でも北にあり市内でも被害の少ない地区に住む私には、この時点ではわからなかった。たった一撃で大好きな神戸の町が、限りなく大きな損害をこうむっていたとは……。

寒くなってきたので、やはり家に

入った。いつもまめに連絡をとりあっている私の実家に電話してみる。実家は市内中心部に近く、私の家から電車と徒歩で三十分のところにある。

「大きな地震だったけれど、こっちは大丈夫」と言う母の明るい声が答えてくれるものとは思いこんでいたのに、呼出音だけで誰も出ない。これはどういうことか。外に逃げているままなのか。

「下のほうは、ずいぶんひどいみたいだよ」

ラジオをつけた夫が言う。神戸市は東西に細長く、北に山、南に海という地形である。市内どこにいても方向がわかりやすく、北方向を「上」、南を「下」と呼んでいる。

「まさか一家そろって、どうにかなったんではないやろね」

不安を口に出してみる。電話が通じているのだから家は無事だろう。そろそろ夜が明け始めた。

一方、そのころ私の想像を裏切って、実家は全壊していた。実家の妹は、



神戸市兵庫区の実家 藤岡智子さん提供

「無事ですか？」と外からの近所の人
の声に答えるために窓を開けた。だが
二階にいるはずなのに、道路に立って
いる人々と目線が同じという不思議な
現象。「おはようございます。……こ
こって、一階になっているんですね」
と思わず言ってしまったという。のん
きな言葉と裏腹に（心理学を学び、認
定心理士の資格をもつせいか妹はいつ
も冷静である）家の中はひどい有様

だった。

二階の寝室にいた妹は揺れを感じて
布団をかぶった、と同時に両脇のたん
すの下敷になった。足をはさまれ、身
動きできなかつたが何とかはい出すこ
とができた。左右のたんすが倒れなが
ら支え合つたので、かろうじて小さな
三角の空間が作られていたのだった。
とりあえず隣室の母といっしょに階
下に降りようとしたが、ドアを開けて

驚く。

「階段がない!?」正確にいうと、傾斜
のない状態の階段が横たわっていた。
妹は階段の下りのほうが地震のために
持ち上がってしまったので、平らにな
ったと思ったという。まだ二階の床
が抜け、一階がつぶれているとは認識
できなかった。

実家の家族の無事を確認できたのは、
地震後六時間たってからだった。一階
の八十二歳の祖母は、激しい震動と天
井が崩れてくるのを目撃したが、幸い
開いたたんすがすっぽり体にかぶさ
り、落下物の直撃を防いでくれた。そ
して五時間後、ようやくがれきの中か
ら脱出できた。

神戸では、地震が皆無といってい
いほどなかった。どこかで大きな地震が
あっても、「……でも神戸は大丈夫」
とおごりに似た気持ちを抱きつつ、呪
文のように言い続けてきた。今思うと
何の根拠もない安心感を大事にしてい
たのだろうか。

大震災と

ノストラダムス

大阪市平野区●西尾ありか

大阪市内でも、天井が落ちてくるのではないだろうかと思うほどの強烈な揺れだった。すぐにテレビをつけ、大阪の北部に住む実家の両親に電話をしたが、通じなかった。

次々としてくる神戸の映像に、揺れた時以上の恐怖が襲ってくる。

まさか、あこがれ続けたあの街が、こんな姿になろうとは……。二十歳前後のころは、神戸の人と結婚して神戸っ子になろうとずっと思っていた。もし、その思いを遂げていれば……と思うとゾッとする。

あの地震のあと、本棚からノストラダムスの本を出してきたのは、私だけではなかったらう。私は割合に熱心なノストラダムス信者である。一九九九年七月……人類は滅亡するというあ



西宮市の墓地



西尾寛実さん撮影

の有名な予言を、私は信じているのである。それはある日突然やってくるというものではなく、徐々に各地で戦争や災害が起き、滅びゆくというものである。

九〇年代に入ってから、湾岸戦争などあちこちで紛争が起きているし、今回も神戸でこんな大地震があったかと思うと、ヨーロッパでは大洪水に見舞われ、コロンビアでも地震があった。いったい地球はどうなっているのだろうか……。

この地震の起こる三〇四カ月前、私は実は奇妙な話を一つ、耳にしていた。

それは、今回、比較的被害の少なかった地区ではあるが、兵庫県の川西市や伊丹市で一〜二カ月の間に、体に感じるか感じないか程度の小さな地震が七〜八回あったというのである。

ちょうど同じころ、大阪の堺市に住む私の友人も何度も地震を感じると訴えていた。他の人に話しても誰も相手にしてくれないと嘆いていたが、「いつか関西にも大きな地震が来るか

もね」

などと話していたのである。

関西にはこれまで、同じ時期に何度も地震が来るなんてことはありえなかった。敏感なごく一握りの人にしか感じなかったものらしいが、これが今回の地震の前兆だったと言えなくもないのである。

この話を同時に、地震前に耳にしていたからだろうか。実際、生まれて初めて体験した大きな地震に、

「ヤバイ。これはただごとじゃないゾ。やっぱり本物が来た」

と恐怖を抱くとともに、

「これはノストラダムスのいう『人類

の滅亡』への第一歩だ」と、真面目に思った。

そして、あとから気づいたのだが、三〇四カ月前といえば、ちょうど関西新空港ができたころだ。

それ以前にも神戸にはいくつもの人工島がある。山をけずり、海を埋め立て、海流すら変わったという。地質や地層に影響がなかったと言えるだろうか。

この大地震はひょっとして、人間が神を怒らせ、自ら招いた震災だったのではあるまいか。もしそうならば、人間の愚かさに許しを乞うしかないのだろうか……。

わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 頃↓ころ 丈↓だけ 方↓ほう 様↓よう 御↓ご 迄↓まで 良↓よい 沢山↓たくさん 中々↓なかなか 害↓はず 更に↓さらに 但し↓ただし 何故↓なぜ etc.

◆送りがなについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変る↓変わる 浮ぶ↓浮かぶ 話合う↓話し合う 気持↓気持ち 行う↓行なう 表す↓表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。



西宮市の墓地 西尾寛実さん撮影

二十代最後の日

兵庫県川西市●大目木智実（30歳）

一月十七日。わたしにとっては二十代最後のその日、阪神地方を大地震が襲った。

ものすごい揺れで布団の上に飛び起きた。とっさに同じ布団に添い寝していた下の子どもを抱き上げる。真っ暗闇の中でまるで波の上のっているかのように揺れる。子どもを抱いたままわたしは「パパたすけてー。パパたすけてー」と叫んでいた。その時夫は息子の上に馬乗りになりかばっていたらしいが、揺れと暗やみでなんにもわからなかった。

最初の大きな揺れがおさまったあと、たんすの落ちてこないところに子どもをつれて移った。わたしたちは二階で寝ていたのだが、下から食器の割れる音、ガラスの割れる音が聞こえてくる。小さな揺れのために斜めになった

食器棚からガシャーンガシャーンと食器が落ちる音が恐怖心を増大させる。子どもたちは何が起こったのかわからないのか「どうしておふとんからでるの」ときく。

その時、電話が鳴った。夫がとなり



神戸市中央区の湊川神社 伊東進さん撮影

の部屋に手探りではいっていくが、「おい、電話どこだ。電話ないぞ」と言う。「そこにあるよ。本棚のところに」とわたしが答える（後で気づいたことだが、このときとなりの部屋は本棚が倒れ、天井の電気は落ちぐちゃぐちゃだった）。夫はやつとのことで受話器を探し電話に出た。電話は母からだった。神戸が震度六だという。夫が電話に出ている間もまた揺れが来る。それから雨戸を開け、明るくなるのを待って下におりた。一階も台所は食器棚が倒れ、電球も落ち、冷蔵庫のドアも流しの下の扉もあき、中が飛び出していた。一番びっくりしたのはかぎのかかっていた玄関が開いていたことだった。

電気と水道は一時的に止まっただけで、その日のお昼前には復旧した。テレビをつけたわたしは自分の目を疑った。

地震の二日前の一月十五日、わたしは友人の結婚式で神戸のポートアイランドに行ったばかりだった。その時の

神戸とはまるで違った姿をテレビは映しだしていた。大学時代、OL時代を神戸・西宮で過ごしたわたしには信じられない光景だった。

その後電話が復旧するにつれ友人、知人はみな無事であることがわかった。が、中にはマンションやお家が壊れ、幼い子どもを連れて実家に身を寄せている人も何人かいる。

わたしたちはたまたま住んでる家も大きな被害も受けなかったし、寝ている部屋のたんすもひっくり返らなかった。たまたま家のある所の地盤が強かっただけのことで、近所も家は崩れ、道はびびだらけでいたるところでガスが漏れていた。

たったの何十秒かで人間の生死をわけてしまった自然の怖さや、普段当たり前のように暮らしていることのありがたさを身にしみて感じた。地震のあった日の夜は一時間ごとに余震が来て生きた心地がしなかった。毎朝目が覚める度に「ああ、今日も無事に朝を迎えられた」と生きていることに感謝

していた。大げさかもしれないけどそんな気持ちだった。

もうあれから一カ月たち、止まっていたガスも使えるようになりお風呂にも困らなくなった。夫も以前のように車で西宮まで通勤できるようになった。閉まっていた児童館も活動を再開した。だんだん元の生活に戻りつつある。我が家の周りでも壊れた建物を撤去したり、工事をしたりと復旧が進んでいる。時間がたつにつれてあの時の怖さや余震への不安も薄らいできている。でもわたしはこの一カ月の間、朝が来る度にほっとしていたあの気持ちや、家で暮らせるというごく当たり前のことのありがたさを忘れずにいたいと思う。

青春時代を過ごした思い出の西宮や神戸の街が活気の溢れた、そしてもっといい街に生まれかわることを願っている。そしてまた子どもたちをつれて王子動物園や須磨の水族館に行ける日が来ることを。

写真を提供していただきました。

ありがとうございました(編集部)

特集 阪神大震災

★わいふバックナンバー

- 241号 こうして夫を変えました
- 242号 私のマスコミ体験
- 243号 特集ナシ
- 245号 病気とのつきあい
- 247号 三十五歳はトシなのか
- 248号 ウまい話にだまされた
- 249号 夫の職業と妻の生活
- 250号 女の友情
- 251号 集合住宅での子育て
- 252号 うちの子のおばあさん・おじいさん

老人ホーム／お金と介護

一〇〇〇円

核家族のための

子育てガイドブック 三〇〇円

変わる主婦・

変わらない主婦

一五〇〇円

お申し込みは電話でどうぞ。
☎〇三ー三二六〇ー四七七ー

母の文字

東京都調布市

呉文子（58歳）
オムシヤ

女に文字は無用とした儒教の国に育った母が初めて文字を書いたのは、韓国にいる兄に五十数年ぶりに会いに行くため、パスポートにサインした時だった。十年ほど前のことである。それ以来、三文字の名前だけは書けるようになっていた。つぎは住所を、と再三母に勧めている。喜寿を過ぎた母は、

「いまさら勉強したって……」

「目が弱ってしまっ……」

一大事でも決心するように、気弱な理由を並べ立ててはとり合おうとしない。しかし、今日はなかなか様子が違う。ワープロを打っている私を羨ましそうに覗きながら、

「小学校だけでも出ていたらなあ……」

ため息のような呟きをもらした。

「お母さん、住所書いてみない？」

すかさず、ワープロ用紙に大きくゴチック書きにした住所のお手本を母の前に置いた。はにかんだ様子でしばらくみつめていた母が、おまじないでもするように大きく深呼吸をして、渾身の力をふりしぼるように声を上げた。

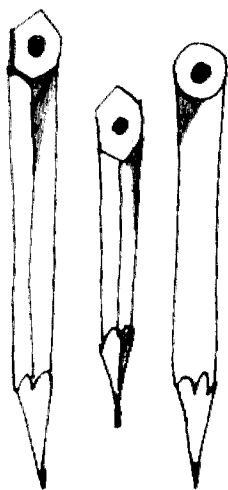
「キタキユウシユウシ……」

一年坊主が母親の脇で宿題でもするように、一文一字一文字声をあげて、エンピツの芯をゆっくりとなめてチラシの裏に書きはじめた。

しばらく経って覗いてみると、吹きだしたくなるような個性的な文字が小ささまざまな形で行列していた。特に幡の字がむずかしいらしく、棒線や点のおさまりが悪い。おまけに巾の部分は省略したまま他の文字よりはるかに大きく二文字分も占領している。特別扱いなのか相性がわるいのか。

「幡の字だけ手抜きしたのね」

見かねた私は、手をとって何度も字づらをなぞると、母は膝を整えながら深呼吸をし、エンピツの芯をなめて再び挑戦する。やはりうまくいかないらしく、唾液でとろけそうに黒々と光るエンピツの芯を見つめては、ため息まじりの深呼吸で肩を何度も何度も上下させている。あまりの腑甲斐なさには嫌気がさすのか、少々投げやりになりながらも、まっ赤な顔で夢中である。そんな様子を見ながら、私は気丈



多い文字と格闘したのである。その日の練習用紙の一枚が私の手元に残り、母からのうれしいお年玉となった。

忘れ物

奈良県生駒郡

高松恭子

夫で負けず嫌いだっただ若いころの母の姿を思い出していた。

エンピツの芯がすっかりすりへるころには、三枚のチラシに「北九州市八幡西区……」と不揃いの文字が真っ黒に並んだ。相性の悪い幡の字も、いびつな形ではあるが何とか合格点をあげられそうだ。

「お母さん、よく書けたわね」

老眼鏡から覗く母の目は、一瞬照れくさそうだったが、すぐにうれしそうな表情に変わった。

「北九州市八幡西区……」と書かれた不揃いなその文字に、私は母の人生を重ねていた。

長い人生の中で、文字をもたなかったことが母の尊厳をどれほど傷つけたことだろう。夫からも、子どもからも解放されて、エンピツをなめなめ、恨み

私の通っているスポーツクラブではよく忘れ物がある。多いのは何といっても衣類で、水着、レオタードなどはいたい柄があるので持ち主に返るが下着類はさすがに取りに行きにくいのか、それが一年で大きなポリ袋いっぱいになるという。

次に多いのは髪飾りなどの装飾品で、以前何十万円かの指輪を無くしたと言ってきた人があったらしいが、これは出てこなかった。

ところで先日、珍しい忘れ物があった。更衣室で着替えていると、

「ちょっと、こんなん忘れてはる!」と、いう声がシャワールームから聞こえた。気にもとめずにいる

と、

「百万円以上はするよ」と言っただけでその人が出てきたものだから、「ええ！ 何？」と、着替えの途中の人までみんなかけよった。

洗面台の上に鎮座していたのは何と総入れ歯だった。入れ歯というのは口の中に収まってこそ恰好のつくものだと思つた。

忘れられた入れ歯は大勢の目に見つめられ恥ずかしそうでもあり情けなさそうでもあった。じつと見つめていると、歯を剝いて怒っているようにも見えた。もっとも口が先に帰ってしまったのだから、いやでも剝き出しにならざるをえないのだが……。

私はふと昔、友人とかわした会話を思い出した。あれは泳げるようになって試合に出たころだった。

「水泳やってよかったわ」

「ほんと、私は死ぬまで続けるわ」

「私も！ ねえ、八十を過ぎても試合に出ようね」

「うん、飛び込んだ拍子に入れ歯が飛んだりして……」

あのころは八十を過ぎて泳いでいる自分の姿など想像もできなかったし、そんな年齢の人まわりにはいなかった。

あれから十数年、クラブにも確実に高齢化の波が押し寄せている。七十代の人は、私が知っているだ

けでも数人いるし八十代の人一人いる。どの人もシャンと背筋を伸ばし、しっかり泳ぎ生き生きしている。あんなふうに年を重ねることができたらと思う。

しかしそれでも老化は確実にやってくる。現に泳ぎ方を忘れることはなくても入れ歯を置き忘れた人がいるのだ。私は厳しい現実を見せつけられたような気がした。飛び込んだ拍子に入れ歯が……と、いう状況を想像できる年になったのだ。

発見者によるとこの入れ歯は、奥歯まですべて保険が効かない高価な材質でできているらしく、その人は、



「持ち主は特定できる、金持ちや」と、言った。そう言われると、今度は入れ歯が少しばかり威張っているようにも見えた。

「人さまの口に入っていたものだから取る人はいないだろうけど、高価なものだから受付で預かるように言っというてよ」

「OK!」



ちょうど帰るところだった私は受付で言った。

「時価百万円以上の忘れ物が洗面所にあるから預かっていて」

受付の女の子の目が一瞬輝いた。入れ歯を見た彼女は何と言うだろう。ああ、年はとりたくないなあと思う。

だが、こうも思った。

入れ歯くらい忘れたっていいではないか。人生を振り返って大きな忘れ物さえしていなければ。あれもこれもやり残した……と悔いることがなければそれでいいのだ。
せめて今ある歯を無くさないようしっかり磨こう
と思いながら外へ出た。

死に上手

岐阜県

森川須美子

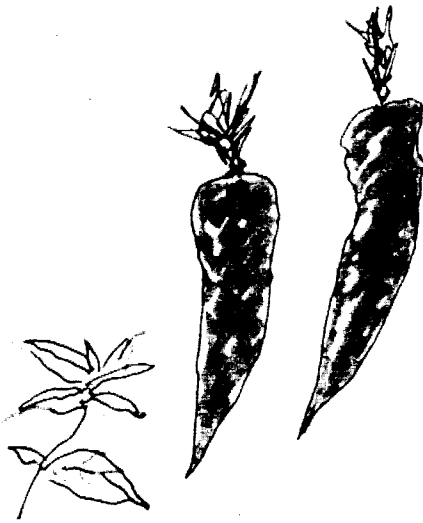
「おふくろが、入院しましたで……、あと三月の命ですわ」と、電話など滅多に掛けて来た事のない義妹の夫から、見舞いの催促を受けたのは一月も半ばの寒い日のことであった。

辟臓ガンだという。

このおふくろさんには三人の息子があるが、長男は脱サラに失敗して北陸の町で二人子持のホステスと半同棲をしており、次男が義妹の夫なのだが、この次男も勤めが長続きしないブラブラ男で、義妹と

は喧嘩ばかりしている仲。とてもあの義妹が、ぐうたら亭主の母親の面倒をみるわけがないし、三男は、むっとり無口の変わり者で、三十五、六歳の現在も嫁さんの来てがないのか、金が掛かるから嫁さんは貰わぬのか、とに角、一人者なのだ。

以前から、あの家は、年老いた親の面倒は誰がみるのだらう。長男は遠くに離れて住み、近場にいる息子二人も頼りになりそうもない。唯一の女手である義妹は、気が強いばかりで、旦那の親とも犬猿の



仲、全くアテに出来ない存在だった。

数年前に親父さんが病に倒れた時は、おふくろさんがまだ元気で、数カ月の間病生活を看取り、子供達はほとんど看病に手を貸さなくても済んだ。

しかし、今度は、つれあいもないおふくろさんだ、たとえ、三月の命といっても長引く事もあり、長期の入院に堪え得るほどの蓄えもない家では、大事だと、他人事ながら心配になった。

兄弟孝行な私の夫はすぐさま見舞いに行ったが、おふくろさんは元気でよくしゃべり、後三月の命にはとても見えなかったという。

「病院は完全看護だから付き添いもいりませんわ」と喜んでいたという。

しかし、今は付き添いはいらなくとも、そのうちにいるようになるだらう。私は姑が脑梗塞で入院生活半年の経験とひき比べて、短期間ながらその大変さを思いやった。

義妹は、姑の面倒をみるような人ではない。まだ老人医療の受けられぬ年齢だから、三割負担といっても医療費もかなり掛かるのではないか。

付き添いも男手だけでやれるものか、付き添い婦を雇えるほどの資力もないとなると……私は、そのおふくろさんの不幸、非力な子や夫を持った不幸せ、を気の毒に思った。



彼女は六十代半ばを過ぎた人ながら、色白の美人で、若いころはさぞやと思われた。

北陸の田舎町のかかなり大きな下駄屋に嫁ぎ、初めのころは生活も楽だったらしい。

しかし戦争後は急激に下駄が履かれなくなって商売は落ち目となり、子供達が就職したA県に店じまいをしてやって来たのだった。

手離した郷里の店も田舎の事とてたいしたお金とはならず、引越しと、生活費に消えてしまったらしい。

夫が見舞いに行った三日後、おふくろさんの容態

が急変し、その週の土曜日にはあっけなく亡くなってしまったという。

なんと見事な引け際ではないか。

神は非力な人にはそれなりの「おあたえ」を下さるものとみえる。

私達夫婦は、ボケ老人となった舅を二年半看取ったが、神が私達にはそれだけの力がある、と認めておられたからなのか。

舅が生存中には気が張っていたからだろうか、私は自分の体の不調を感じないで来た。

しかし舅を見送った途端、あまりの体調不良に驚いて、ドックで調べたら、肝臓の数値が悪くなっており、胃潰瘍や、皮膚科の病気にも悩まされた。

現在は健康を取り戻したが、健康体に戻るまで一年間を要している。

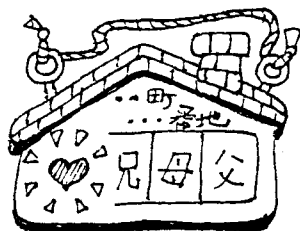
さんさん私達夫婦に世話を掛けさせた舅だったが、それでも私の体ではあれが限度と心得ていたものらしい。

世の中、それほど先き行きを心配することはない。神が人間に堪えられぬほどの苦勞をお与えになることは滅多にないのだから。

それにしてもあのおふくろさんは見事な死に方で、子供達の苦勞をなくしたもののよ、と感心している。

(え・田沼千恵)

おさない子を育てる



二人目が欲しい

北海道旭川市
香山なおみ (33歳)

子どもが欲しい。二人目の子ども。これが、いま最大の関心事。

独身のころから、四歳ぐらい離れた二人のきょうだいを育てたいと思っていた。長男が三歳の誕生日を迎えるあたりで避妊をやめ、半年経過。第二子ができるめどは全く立っていない。

周期が短いため、この半年間で七回の生理が来た。そのたびに味わう焦り、落胆、挫折感。

書きながら、お吐りの声が聞こえてくる。どんなに子どもを望んでも一生授からないご夫婦や、不妊治療中の方が、これを目にしてどう感じになるか。既に第一子を授かった上、たかが七回の空振り。悩みと呼ぶのもおこがましいとは思う。それでも、それでも辛い。悲しい。

必死になるより、気軽に、自然に。誰もがそう言う。でもそれは私にとつて「子育てはいつも笑顔で冷静に」と言われるのと同じようなもの。わかっているんだけどねえ、と、ため息が出る。こればかりはねえ。きつとそ

の内できるよ。お定まりの慰めも虚しい。本当に？ 本当にできるの？

外を歩けば、あ、あのひと妊婦。あのひと子ども二人連れてる。どうして？ どうしてあなたにできて私にできないの？ 学校のお勉強なら、努力すればできる、さばればできない、納得のいく結果があったのに。

第一子のときは「妊娠待ち時間」約四カ月だった。今回それを越えたあたりから、辛さが増してきた。ちょうどそのころ、想像妊娠を体験した。つわりのような症状もあった。そのつわりをあざ笑うかのように、基礎体温は低温が続く。一週間遅れて生理が始まった夜、一人泣いた。

今、励みになるものが二つある。一つは、敬虔なクリスチャンである祖母の「全てのことは、神様がよい時を与えてくださる」という言葉。まだその「時」が来ないのだと、自分に言い聞かせている。もう一つは、突飛なようだが、皇太子妃雅子さんの存在。私ですらこんな思いで過ごしている。承知

の上での結婚とはいえ、将来の天皇を産むことの重圧は、どれほどのものか。彼女も頑張っているのだから、と、勝手に引き合いに出させて頂いている。

実は、夫とのセックスは嫌ではない。この気持ちは「わいふ」二三七号特集「セックスレス夫婦」で、何人かの方が代弁してくださった。夫が嫌いなわけではない。ただ夫とのセックスが嫌なのだ。

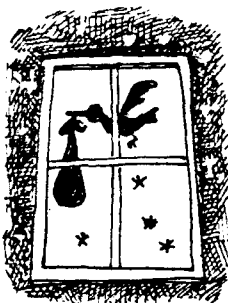
今は子どもが欲しいのだから、排卵日前後は当然積極的に受け入れる。それでも夫に対してはともそんな気になれず、昔好きだった男性を睨に浮かべて。

妊娠可能期を過ぎれば、私にとってセックスの意味はない。ただ、露骨に拒否して「俺は種馬じゃない」とへそを曲げられても困るので、ほどほどに応じる。今回がだめだったときに備える意味で、胸で念仏のように「次回への保険……」と唱えながら。

先月、特大級の夫婦喧嘩をした。怒りにゆがむ夫の顔を眺めながら祈っていた。「どうかおとこの排卵日で妊娠していますように」第二子さえできれば、もっと拒めるのに。

こんな心境だから妊娠できないのかも、と反省することもある。でもレイプでも妊娠するんだし、などと屁理屈で逃がっている。

こんな罰当たりなことを言いながらも、やっぱり第二子が欲しい。忙しくて疲れて大変だろうけど、きつといいこともたくさん運んで来てくれる。二人目の赤ちゃん、こんな不屈きな母だけれど、どうか早く来てください。あなたのお兄ちゃんと一緒に待っています。あ、お父さんとも一緒にね。



(え・小宅昌枝)

自然食通信63

隔月刊／定価五七〇円
二二四〇円

特集 わたし、手づくり弁当派

ホカ弁、持ち帰り寿司などファースト・フード全盛時代、どれもアミノ酸味でウンザリ。一日の食事づくりの段どりにうまく組みこんだ通勤通学の弁当や、色んな仕事、働き方のなかで無理なく工夫の弁当づくりなど、腕によりをかけおいしさ自信アリのお弁当づくしをお届けします。野菜さんだん玄米、雑穀、天然酵母パン大活躍編。

一月中旬発売

いちじくやい

新鮮安全旨いもの屋全国版

定価二〇六〇円

旬の素材を生かしたメニューが自慢のレストランや喫茶店、お宿に飲み屋、安心して食べられてしかも美味しい野菜や加工品。充実の店：バラエティー豊かに全国三〇〇軒。地区・索引付。

アテルイ

愚安亭遊佐著
十又重勝彦

国策に翻弄される北の地の漁民たちの哀感を独り身で演じ続けた役者の思いは、まつわぬ民のみなもとへと。輝やける縄紋の彼方より甦る狩猟の民たち。今、文明と我らが行く手を、照らし出す。

定価一八五四円

自然食通信社

東京都文京区本郷 2-20-8 ☎03-3816-3857 振替・東京5-78026

戦
後
50
年
記
念
連
載

シベリアの青春 1

大阪市住吉区

福井 秀雄

自序

平成元年（一九八九年）三月五日、
石川県片山津温泉郷、一旅館の大宴会
場では、数十名の男たちが集まり宴た



昭和17年 平陽訓練所入所当時
(14歳)

けなわであった。その広間の正面に
は、「満蒙開拓青少年義勇軍、元竹本
中隊拓友会五十周年大会」と大書した
大幕が掲げられていた。

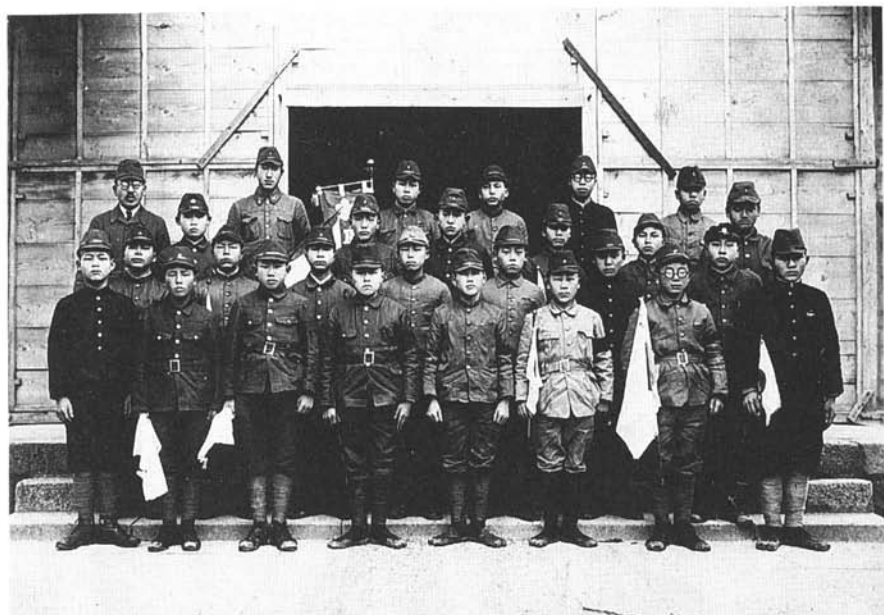
この日ここに集い合ったこれらの
人々は、かつて太平洋戦争たけなわと
なりつつあった、昭和十七年（一九四
二年）から終戦の同二十年まで、「満
州開拓」という「国策」のもとに、旧
満州（現中国東北部）の地で、共に青
春の日々を過ごした人たちである。そ
して私もその中の一人だった。

当時、十四、五歳だった少年もすで
に六十歳代となつて、当然のことなが

らその人数は年々少なくなっている。
この大会に参加した私は、やがてこの
人たちとの思い出も消え去るのでは、
と思うと何か寂しい気持ちになった。
そこで私はこの五十周年を機に青春記
を書き残そうと決意したのである。

決意したなどとは少々大げさではあ
るが、これから私が書くこうとするの
は、彼等と共に義勇軍の一員として過
した旧満州での思い出と、戦後シベリ
アで抑留生活を送ることになってし
まった私自身の体験記である。

現在では満州などといっても、歴史
の教科書に僅かに登場するくらいで、



昭和17年3月 石川県七尾市公民館前にて前列より3列目右から4人目が筆者

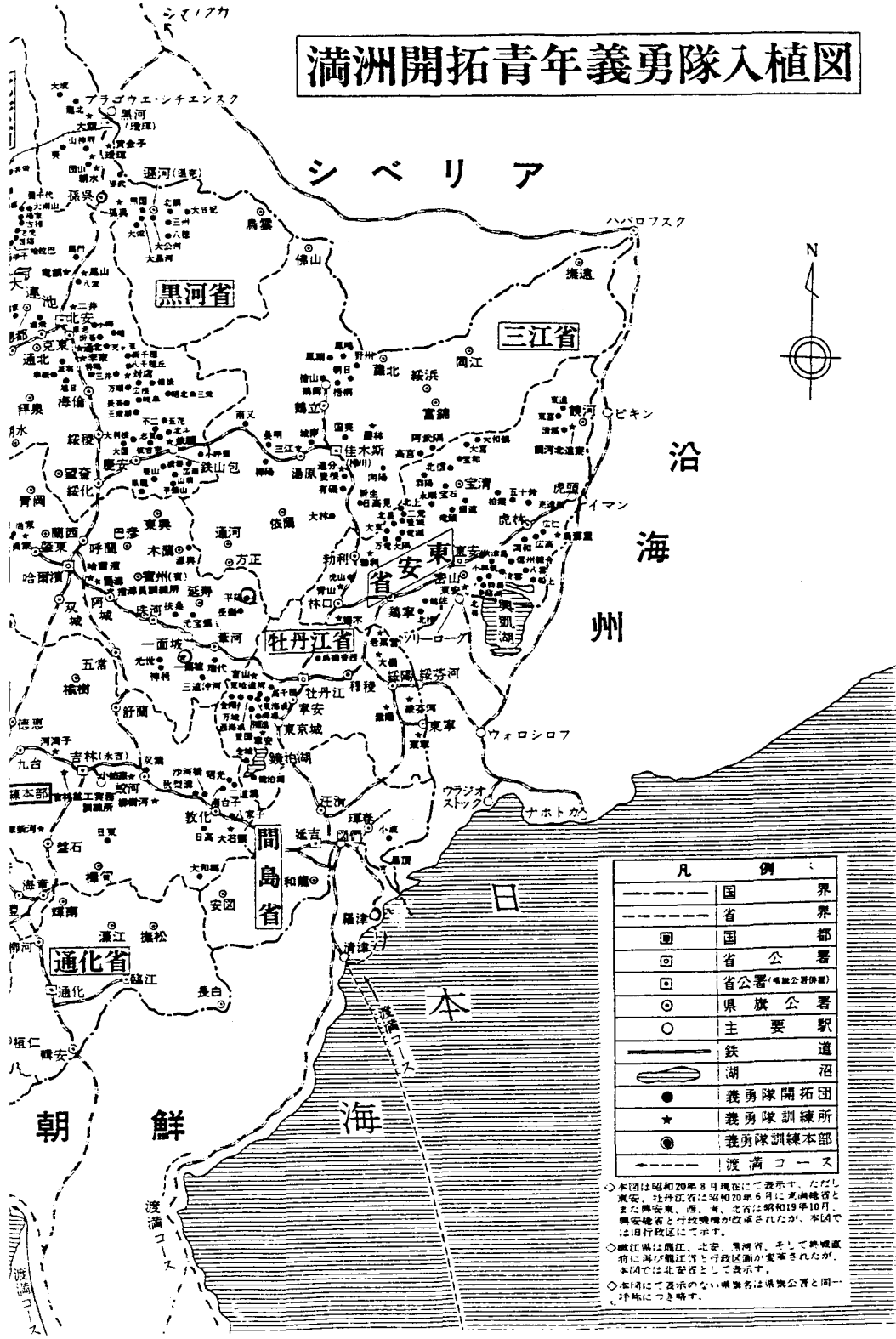
特に若い人々にとってはどこの地域であつたかわからないかも知れない。けれどもかつてそこは、日本人のあこがれと希望が込められた新天地であつた。もっともそれは、日本人の全く手前勝手な思いであつたのだろう。

だが、その満州国も今は歴史のかなたに消え去り、文字通り「幻の国」となつてしまつたのである。私たちの世代でさえ、満州についてはっきり記憶している人は少ないかもしれない。

ましてや満蒙開拓青少年義勇軍などと言っても、当時の関係者以外その名を知る人すら少ないのではないだろうか。

しかし、昭和十三年から同十九年ごろまで、五族協和と王道楽土の建設という、当時の私たちにとっては夢のように思える国策のもと、延べ九万人余りの少年が、この仕事を聖業と信じ、夢と希望に燃えて、未知の大陸、満州へと出かけていったのである。私もそのうちの一人であつた。

満洲開拓青年義勇隊入植図



凡 例		
—	国	界
—	省	界
●	国	都
◎	省	公 署
□	省公署(特設公署併置)	
○	県	公 署
○	主	要 駅
—	鉄	道
—	湖	沼
●	義勇隊開拓団	
★	義勇隊訓練所	
◎	義勇隊訓練本部	
—	渡満コース	

◇本図は昭和20年8月現在にて表示す。ただし
 東安、牡丹江省は昭和20年6月に東滿龍省と
 また興安東、西、南、北省は昭和19年10月、
 興安龍省と行政機構が改められたが、本図で
 は旧行政区にて表示す。
 ◇嫩江県は龍江、北安、洮河省、そして興龍直
 轄に海が龍江省と行政区画が変更されたが、
 本図では北安省として表示す。
 ◇本図にて表示のない県名は県公署と同一
 地域につき略す。

シベリア

興安東省

奈勒圖
(東鎮)
興安

滿洲里

達賴湖

阿爾坦額爾勒
(新巴爾虎右翼)

阿爾坦額爾勒
(新巴爾虎左翼)

具湖

(海拉爾)
巴彥庫仁

海拉爾

千克石

南屯
(索倫)

興安北省

烏珠穆沁

額爾古納
(巴彥)

布西
(莫力達瓦)

阿榮

札蘭屯
(市神地)

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

甘肅

外蒙古

內蒙古

興安南省

龍江省

興安西省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

四平省

錦州省

熱河省

奉天省

安東省

中華民國

渤海

遼東灣

遼東灣

遼東灣

遼東灣

遼東灣

シベリアの青春

しかしながら、私が描いていたほど開拓の道は生易しいものではなかった。楽しかるべき青春であるはずが、辛く厳しいものとなった。

そして数年後に、思ってもみななかった敗戦という憂き目に合い、混乱した満州でなすすべもなく、多くの友が荒野の土となってしまったのである。

そのころ私は、今一つのおこがれであった関東軍に入隊していた。その結果、想像だにしたこともない捕虜となつて、厳寒のシベリアで抑留生活を送る羽目となつてしまふ。日本に帰ることができたのは戦後数年たつてからである。

戦後、このような満州開拓の結末に

ついて、侵略行為だったとか、原住民への加害者であつたなどということが、様々に批判された。しかし、今となつては反省すべきことも多々あるものの、当時の私たちにはただ国のためという一途な思いだけはなく、やましい心など毛頭なかった。どだいそんな野心など持つ年齢ではなかったのである。

開拓民よりもこの事業を画策した当時の権力者こそ批判されるべきだと思ふのだが、戦後これらの者たちは、このことについては誰も語ろうとしない。また開拓民を弁護しようとしな

かったのである。

だからといって私は、大陸の荒野で奪い去られた青春期の代償を誰かに求めようというのではない。

今にして思えば、異國の生活は辛いことの連続ではあつたものの、あれは私に与えられた試験だったのだとさえ思っている。

しかしながら、悲惨だった戦争の末路を思うと、再びあのような歴史を繰り返してほしくないという切なる思いが募る。純真な気持ちのまま、志半ばで荒野の土となつた友の冥福を祈りつつ、青春の思い出を綴つてみたい。

十四歳の福井少年は、希望に燃えて満洲に赴きました。

しかし待っていたものは荒野での過酷な労働、食糧の欠乏、娯楽や文化的設備は何一つない訓練所生活でした。

こんなはずではなかつたと思いつつも、国を思う至情は止み難く、十六歳で関東軍に志願。昭和二十年、ソ連軍の満洲進攻で捕虜となり、シベリアに連行されます。

貴重な記録の全篇は八月十五日を期して自費出版されますが、長篇のため本誌では、一年の予定でシベリア篇の一部を連載いたします。



ソ連軍進攻 恐怖のときを越えて

夜明けと共に現われた敵機は、すでに無人となっているはずの兵営に向かって爆撃を始めた。敵にはわが陣地はいまだ目に入らぬのか?と思ったが、やがて陣地上空にも現われて、機銃掃射が浴びせられるようになった。

その中で、われわれの後方に布陣する砲兵隊が執拗な攻撃を受けているのが望見された。敵機への攻撃を禁じられている私たちは、ただ壕の中でじつと敵機の去るのを待った。

こんな状況の中で、わがほうには迎え撃つ飛行機は一機もなく、対空砲火らしきものもなかった。遙かな後方山上に、ただ一門だけ高射砲とも長距離砲ともつかぬ砲身の長い大砲が据えられていた。これが時たま思い出したように敵機に向かって砲声を上げる。

「一体あれは何なのだ?」と私たちは半ばあきれ顔で眺めていた。

わが陣地と町の間はかなり広い湿地

帯があることは先にも書いたが、この中を巨大な敵戦車は通れない。来るとしたら、かつてわが砲兵隊が登って来た部隊へ通じる道しか考えられない。この道の中間あたりに小さな橋がある。その橋の下にわが特攻隊が待構えている。その場所は陣地左前方に見えているが人影は見えない。

敵機の爆音と機銃掃射の喧噪の中で、突如、わが砲兵隊の砲撃が始まった。あたりを揺がす砲声と共に、大気を切り裂いて飛ぶ砲弾が、耳を圧する凄まじい音を立てながら上空を通過し町に着弾、火柱を上げるのが見える。

肉眼では確認できないが、いよいよ敵が動き出したようである。後方中隊指揮所から伝令が飛んだ。

「前方に敵戦車、戦闘配置につけえー!!」

一瞬にして陣地内は騒然となった。分隊壕に待機していた兵たちが、銃を手に一斉に飛び出して狭い連絡壕を走り、それぞれのタコツボ（連絡壕から枝別れして各自が入る穴が作られてい

る。これをタコツボと呼んだ）に向かった。

さしたる訓練も経ずしての実戦である。無我夢中で壕に駆け込む時、中隊指揮所前で仁王立ちして指揮をとる中隊長の姿がちらっと目に入った。分隊長や古兵の大声の指示が矢継ぎ早にとび交うが、何がなんだかさっぱり理解できない。

私は柄にもなく九九式軽機関銃（九五式とは皇紀二五九九年に因んで銘名された）の二番手だった。通常軽機関銃には射手一、弾薬手二と計三名がつくことになっていた。射手は石田古兵殿で初年兵の私は、まったく予備という存在であったのだ。かなり広いタコツボの中で射手の横にびったりついていて前方を睨んでいた。

軽機にしがみついて、恐いほどの形相になった石田古兵殿が大声でどなった。

「どえりゃー戦車がやって来る。奴らが一番に狙ってくるのは軽機だで、俺たちが殺られたら福井おめやあーがや

るんだ。しっかりしろ!」と名古屋弁まじりで喝を入れた。『ハイッ!』と言ったと思ったが、極度の緊張のため顔面が引きつって声にならなかった。一瞬、「俺はここで死ぬ」そう思うと、体毛が逆立つよううで、ガクガクと震えながら壕壁の土を握りしめていた。

陣地前方には戦車壕が築かれている。ここでたじろぐ戦車を右翼に陣取るわが対戦車砲が狙っている。だが巨大な戦車はここを難無く突破するに違いない。戦車と共に随伴歩兵が攻め登ってくる。これを迎えて陣地内は修羅場と化し、彼我入り乱れての白兵戦となるだろう。

敵はまだ遠い。かろうじて平静を保とうとはしているのだが、敵が目前に現われればどうなるかわからない。もしかしたら狂ってしまうかも知れない。所詮戦争は人間同士の殺し合いだ。まともな精神状態で戦えるものではない。食うか食われるかなれば私だってやるだろう。

「敵は来るか！」前方を睨みながら、居たたまれない緊張の時間が過ぎていった。その中で「来るな！」と祈る気持ちも心の片隅にあった。

そしてそんな祈りが通じたか？ 今にも来るかに見えていた敵は、なぜか来なかったのである。

「くそスケめ！」負け惜しみの声を上げたもののすっかり緊張の尾が切れて、私は壕の底にへたり込んだ。

それにしても圧倒的に優位であるはずのソ連軍が、なぜ来ないのか。満を持して一気に攻略の作戦なのか？、私は様々思い巡らしていた。

敵は現われなかったが、臨戦態勢の解けない不気味な陣地内で、湧き水でぬかるんだ壕の中を走り廻るため豚皮の靴はブヨブヨにふやけ、銃は泥まみれとなって真赤にサビが出てしまった。兵営だったらビンタものだが、古兵たちは何も言わなかった。

誰もが敵の攻撃はこれで済むはずはない、と思っていた。しかしながら、敵機の攻撃は途絶えてしまったのであ



る。八月十五日だった。

敗戦の報

その日、「ブルン、ブルン」と陣地上空にのんびりした爆音が聞こえて、変な飛行機が一機飛来した。それは第一次大戦時に飛んでいたのでは、と思わせるような復葉機だった。「何だあれは？」と一斉に仰ぎ見る私たちを、さもあざ笑うかに、ゆっくり上空を旋回していたが、やがて帰って行った。一体あれは何だったのだろう。

そのころは今まで起こっていたことがうそのように、静寂があたりを支配していた。私たちは塹壕の上に這い上って、

「ロスケはもう来ないんじゃないか？」
「われわれの陣地を無視して先へ行ってしまったんだ」など、二、三日前とは打って変わって、互いに勝手なことを言い合っていた。

今考えると不思議な気もするのだが、そんな会話のなかで、
「戦争は終わったのじゃないか」など

と口にする者は一人も居なかった。

私自身も、本格的な戦闘ともなれば、ここで死ぬだろうと覚悟を決めていた。したがって、降伏、敗戦という文字は浮かんではこなかったのである。

翌八月十六日、何処からともなく、「戦争は終わった」という衝撃的な情報が流れた。

「日本が負けた」
「いや、そんなはずはない。停戦になっただけだ」

私たち初年兵の間では様々な声が上がった。だが古兵たちの中には、この情報を、敵側の流した偽情報であり謀略である、と一蹴に付する者もいた。

しかし、間もなく中隊指揮所から、「八月十五日、玉音放送（天皇の声）があり戦争は終わった」ということが、いとも簡単に告げられたのである。

敵と華々しく渡り合っただけの敗戦ならばともかく、何とあつけない終末だろう。私はただ呆然とするのみであった。そして、まだ戦争終結を信じられな

い状態の中で、早くもソ連軍による日本軍の武装解除が始まった。銃を突きつけられて行なわれたわけではない。ソ連兵の姿も見ずして総べての武器を放棄したのである。

決して負けることはない、と確信していただけに、日本敗れたり、という未曾有の事態ともなれば、悔し泣きする者、敗戦をよしとせず血気に逸る者など、当然陣地内はパニック状態となつて然るべきだった。しかしながら、大方の兵士たちは無然とした表情で冷やかに対応していた。突然の敗戦を即座に実感として受け止められなかったのであらう。

だが、このような陣地内の雰囲気には、反発するかのようには、敗戦の報と共に、かの砲兵隊長が砲と共に自爆したと聞いた。これには私たちも少なからぬ衝撃を受けたのであるが、これとは対照的に、入隊して日の浅い老兵たちの間では、早くも、

「これで国へ帰れる」など安堵の声もささやかれていたのである。

あと数日戦争が続けば、自ら掘った壕の中で全員玉碎するだろうことは、誰もが思っていた。人と人が殺し合うという戦場では、「助かった」という気持ちは言葉にできない。しかしそれが本音だったのではなからうか。こうして私たちは一戦も交じえることなく終戦を迎えてしまった。

さて、ここで私たちは一旦兵営に引き揚げることになった。その道すがらあらためて陣地周辺を見渡した。あちこちに放置された兵器と共に箱詰めされた戦時食品などが一面に散乱して、敗戦の姿を如実に表わしていた。

暫くして隊列の前から、「おい、ロスケが居るぞ」と声が上った。

奴等はまだ陣地内には入っていないと思っていたのだが、道路脇に一個分隊あまりのソ連兵がたむろして居るのに出くわしたのである。

うす汚い軍服の赤ら顔がわれわれを見て、それぞれに何かわめいている。私たちも「これがロスケか」と互いに

初対面同士物珍しげに観察し合った。ソ連兵たちの輪の中では大鍋が湯氣を上げている。見るともなしに見えたその中身は、明らかに日本軍の食糧である干しウドンだった。

「奴等食うものも無いのか」と揶揄したい気持ちであった。そして私たちに、そんな彼等に対する敗北感はまったくなかった。そうかといって、日露戦争の歌として歌われていた「昨日の敵は今日の友」などという悠長な感情も湧いてこなかった。

兵営に到着して驚いた。無人だったはずのそこはあたかも激戦の跡を思わせるようだったのである。爆撃による大穴があちこちに口を開けており、建物には機銃掃射の跡が生々しく残っている。

大隊本部前の広場には陣地を下りた将兵で埋まっていた。その数千数百名か？ やがて各中隊の隊列が整ったところへ、

「ただ今より、大隊長殿の訓示がある。静粛に」と号令があり、大隊長が壇上

に立った。静まった隊列を見回しながらゆっくりとした口調で述べられた言葉は、

「諸君、ご苦勞であった。陛下のご決断によって戦争は終結した。諸君の耐えがたい気持ちはよくわかるが、早まった行動は謹んでほしい。共に体を大切に祖国の復興に尽くしてもらいたい」という趣旨のものだった。私たち兵士の今後については具体的に示されなかった。

大隊長に対する敬礼が終わり壇上から下りるや、兵士たちの中でざわめきが起こり始めた。私たちにあっては、物たりないほどの訓示であったが、これによって、敗戦をより一層確実なものとして受け止めたのである。同時に周囲から様々なことが聞えてきた。

「天皇が敗戦を決断されたのは、広島、長崎に強力な新兵器爆弾が投下されたためで、これが落ちた地域では三十年間は草木も生えず人も近寄れない恐いものである」

「日本は上陸した連合軍によって蹂躪

され、女たちは手ごめにされているかも知れない。鬼畜米英だから何をやるかわかったものじゃない」

「われわれは日本になど帰れない。シベリアへ捕虜として連行される」など物騒な話ばかりであった。

デマと憶測で騒然となった中、これに輪をかけるように大量の防寒具が運ばれてきた。それは、八月下旬という季節に全く不似合なものであった。嵩の高い防寒外套や毛布が各自に支給された。

「やっぱりシベリア行きだ」たちまち悲観的な声が上がった。

「いや、これからの満州は急速に寒くなる。そのための用意なのだ」ともっともらしい声。そして私たちは、この後者の弁を何の疑いもなく鵜呑みにしていたのである。

やがて、今夕孫呉^{ソンゴ}の町に下りると伝達があった。

「孫呉から列車で南下帰国する」

話はどうぞん飛躍していく。夕方、大きな荷物を背にアゴ坂を下って町に

入った。

町の中は敵の爆撃によって建物は破壊され、道路には馬の死骸が横たわり、想像以上の惨状となっていた。けれども道路脇で無残に破壊されたソ連戦車の残骸を発見し、わが軍の戦果に違いない、と溜飲が下がる思いでそれを眺めた。

ソ連兵の姿は見えない。ここは町のどのあたりかさっぱり見当もつかない。とにかく心身共に疲れ切っていた



のだろう。私は建物の中に入った途端によろめくように座りこんだ。夕食もそこそこに初年兵の分際さえも忘れて、床の上になぶって倒れて眠ってしまったのである。

アムールを越えて

夢うつつの中、ギシギシと軋むキャタピラ（戦車の車輪を巻いた鉄のベルト）の音と、地響きを立てて唸るエンジン^{エンジン}の音で飛び起きた。すっかり明る

くなつた宿舍の外を、巨大な戦車が動いて行くのが窓越しに見える。

起き上がった兵士たちが、

「スゲー戦車だ！」と驚嘆の声を上げながら見ている。

戦車をもつと真近で見ようと外に出た私たちは、あたりを見渡して「あつー」と声を上げた。ゆうべはまったく気づかなかつた。なんと建物は広範囲に渡って、高い有刺鉄線の柵に囲まれていたのである。しかも、柵の回りには、マンドリンと称する自動小銃を肩にしたソ連兵が警戒に当たっている。

「何だ、何だ、これじゃまるで捕虜じゃないか」

私たちは呆然となつて立ちつくしていた。まるで柵に追い込まれた羊の群れのように、右往左往しながら不安な声を上げる兵士たち。上層部からは何の説明もなく、指揮官たちは何処に居るのかさえわからなかつた。

「いったいどうなっているんだ」気の荒い古兵たちから抗議の声が噴出した。

だが、具体的な説明は無く、ここに数日間滞在する、ということのみが伝えられた。

二日目であつた。ソ連側によって日本軍の閹兵（えんべい）軍隊を整列させて検閲する）が行なわれた。わが大隊は中隊ごととに道路に面して横隊に整列していた。その前をソ連軍将校が十数名、隊列に目を向けながらゆっくり通り過ぎていった。将校の軍服に身を固めた赤ら顔の大男たちに、私たちは少なからず圧倒される思いだつた。

その将校たちが通り過ぎて間もなく、一人のソ連兵士が馬にまたがりひづめの音を鳴らして通りかかつた。そのうす汚れた服装から見て、急遽シベリアから集められた土民兵と思われる。

わが中隊の前にさしかかつたこの兵士、何を思つてか先頭に立つ中隊長の前に馬を寄せひらりと飛び下りた。「何をする？」と一瞬思つた。彼の目は中隊長の皮の長靴にそそがれている。身振りで脱げと催促、相手にされ

ないと見るや、腰のマンドリン（自動小銃）に手を掛け威嚇の仕草、やむなく中隊長は長靴を脱いだ。

彼は履いていた汚いドタ靴を脱ぎ捨て、長靴の中へ足を突込んだものの曲がりの処でつかえてどうしても入らない。うろたえたヒゲ面がなんとも滑稽である。

隊列からクスクス笑い声が上がつた。

「バカの大足だよ」

「ざまあ見ろ、入るはずがない」

あきらめた奴は、ざわめく隊列をジロリといちべつ、長靴をほうり出してとつと消えていった。ロシア兵のぶざまな姿を笑つた私たちではあつたけれど、これはやはり敗者が受けた屈辱の場面であつた。

「ロスケめ馬鹿にしがつて」と声が上がつた。でも、その去り行くソ連兵の姿もまた哀れに見えた。

早くも日本兵の持つ貴重品に目をつけたソ連兵の略奪が、このころからばつぱつ始まりだしたのである。

——つづく——

マイジョブ・ マイホビー

クラシック・バレエ

横浜市磯子区●十文字圭子（32歳）

「プロフェッション」が「ホビー」に変わって、ようやく書けるようになった。

一年ぐらい前の特集で「わたしが燃えているもの」というのがあったが、その時も書いてみたかった。多趣味というのがある

ならば、私の場合は一趣味（弟にいわせれば「他に能がない」）。それは、クラシック・バレエ。

三つのころから習い始め、途中のプランクを除いても、稽古に費やした時間はざっと二十年を優に越える。

「大きくなったらバレリーナになるの」

小さいころは誰にでもそう言った。殊に、団地の集会所での「お遊戯」時代、幼稚園の「モダン・バレエ」時代から脱して、本格的にクラシックの基礎を習いはじめた小学校の低学年のころまでは、かなり本気でそう思っていた。

それが気がつくと、中学受験の渦中に巻き込まれ、いつの間にか稽古に通う代わりに、進学塾に通いだし……。結局、受験はうまくいかず、中学時代は転居、転校で落ちつかず、再開したのは高校に入ってからだった。

受験で揉みくちやにされて落ち込んでいた時、ある人に聞かれた。

「今、何がやりたいの」

「ああ、そうだ。わたし、バレエをもう一度習いたい！」

もう、「プロ」になるのは無理だと分かっていた。

声楽などのように、大人になってから始めたほうがいいものもあるが、これを職業にするつもりなら、女の子の場合、体が急成長を遂げるローティーンのように、きちんと続けて体をそれ用に作っておかなくてはならない。

その上に、体型（頭が小さく、手足が長いこと）。特に足の条件がいいこと。筋肉が強いこと。さらにセンスと素質。

つまり、残念ながら、私はそのどれも満たしてはいなかった。けれど、今度こそ自分の意志で「好きで、やりたくて」始めた事だったから、それでも十分だった。

そして、大学に入ってから一人の先生に巡り会い、ますますバレエの魅力に「取り憑かれ」子どもを生んでからもなお、離れられない「ほとんどビョーキ」状態になってしまったのだ。

それまでは通うといったって、週に一回、一時間半といったところだった。発表会も二年に一度。これは普通のお稽古事の域を出ない。しかし、月謝が安いと友達に

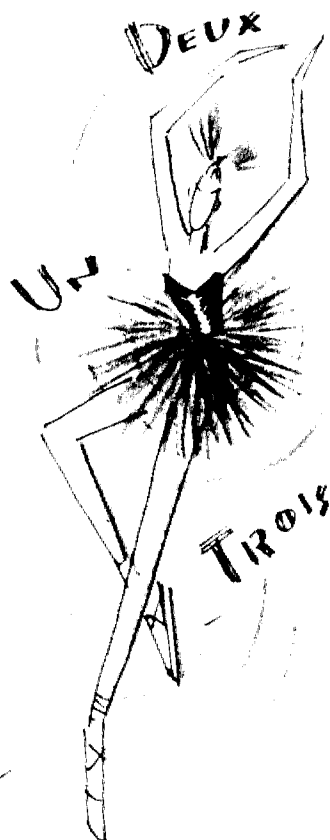
誘われて行きたした所は、今までとは様子が違っていた。

「バレエの先生」というのは、大抵の場合厳しい。背筋が伸びていて細面、というのがそういう印象を強くしているのであらうが、この先生はレッスンに限ったことではなく、服装、言葉遣い、時間厳守にはじまって、稽古中の態度にやる気がみえないと、容赦なく「出ていけ！」コールが掛かる。

週に三回、二時間以上の稽古。発表会は年に一度。そのほかに、他の研究所との合同公演など、舞台上立つ回数も多い。そんな場合は休日も返上で、下手をすると昼前から夜の九時近くまで、リハーサルが続いたりする。

プロを目指している子もいたが、上級クラスにいるメンバーは、大半が学生か社会人。みんなバレエが本業ではない。それなのに、先生の要求は決して、「趣味でやっているのだから」というような、生易しいものではなかった。

会社に勤め始めてからも、バレエ中心の生活から抜けられなかった。採用試験に落



ちたこともあるが、教師にならなかったのは、一般企業のOLならば、稽古を続けられるかもしれない、そんな思いがあったからだ。そこまで、私たちを引きずり込んでしまっパワーを、その先生は持っていた。素人ながら、プロと同じ振付に挑戦させてくれたり、出来なくて、泣きたくなくなったことも度々あったけれど、何十回となく繰り返し返した踊りが、たった一度の舞台でうまくいった時の喜びは、そんな辛さも吹き飛ばしてしまふ。

また、そのころには、少し値の張る海外のバレエ団公演の切符も、たまには手に入ることが出来るようになっていた。自分たちのことを棚に上げて、友達とあーだこーだと言い合いながら、それでも、うっとりと幸せな気分になり、いく度、東京文化会館や簡易保険ホールを後にしたことがあるのか。

バレエといえば「白鳥の湖」。気取っていて、暗くて、そのうち眠くなる。そういう人も多い（うちの夫もそのひとり）。

だが、貴族のお姫様なんて全く出てこない、大笑いしてしまうバレエだってある。

全幕物といわれる物語だけでなく、あまり筋の無い一幕の短いものや、創作、それも前衛に近いものまで、様々ある。

しかし、一貫して言えることは、ダンスは皆、「美しい」。たくさん汗によって鍛え上げられた、生身の体を使い、楽器を奏でるように踊る。「踊る」ことは「歌う」ことと同じように、人間の原点に近いのではないだろうか。

バレエの基本をひとつひとつ、積み重ねていく地道な努力。それ以外にはない。だから、運動音痴の私にも出来る。そして、衣装を着てライトを浴びる快感。それは瞬間に消えてしまうからこそ、素晴らしい。

十八歳からの十年間、その先生の元で、それこそバレエとの蜜月時代を過ごした。

その時に得た、もうひとつの財産は、仲間。年齢も生活環境も違っても、同じ舞台を目指し、気持ちを合わせて頑張った。その仲間のうちの何人かは、たぶん、一生付き合っていくであろう、大切な友人となっていた。

結婚して稽古場を離れる時、「一生バレエを好きでいてね」という先生の言葉を聞くまでもなく、それはもう私の生活の中で、無くてはならない存在となっていた。

レオタードに着替え、髪をまとめる。シューズの裏に松脂を付け、深呼吸をして木の床に立つ。大きな鏡の中に見える私は、今日も一番いい顔をしている。

体の動くかぎりアマチュアとして踊り、愛好家として舞台を見つづけていきたい。

仕事の周辺…ブツブツ…

東京都江戸川区●米山眞梨子（35歳）

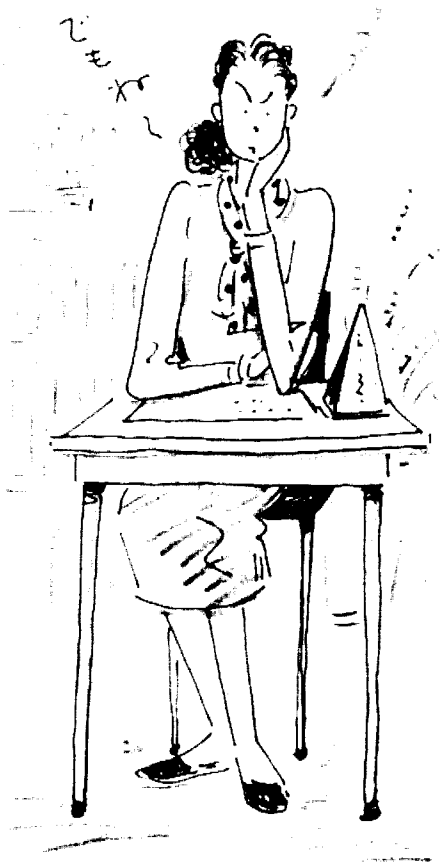
消費生活アドバイザーの資格を取り、運よく某官庁の消費者相談の仕事に就いて、まる三年になろうとしている。この資格取得の勉強を始めたのは、下の子供が一歳のころ、いわば「お砂場」での母親たちの日常会話の世界から逃げ出すため、再就職

に多少なりとも有利になればいいな、という程度の選択だった。

もちろん勉強すべき内容には興味があったから始めたのだが、特に「行政機関の相談員」になりたいと思っていたわけではなかった。それよりも、この資格のキャッチフレーズの「消費者と企業のパイプ役」というのにひかれ、どこかの企業で、フルタイムで働きたいという漠然とした希望があった（今もある）。それでも、資格が取れて今の職場からお声がかかったときは、思ったより順調な再就職ができてうれしかったし、相談を受ける事も決していやではなかった。

今改めて、この仕事はやりがいがあるし自己啓発にもなるが、難しく、その割には報われないことも多いという現実を感じている。

消費者から相談を受けたとき、どんなことにも即対応できるなんて事はあり得ない。少しでも知識を増やすように勉強も大事だが、基本的には、よく関係者の話を聞いたり、法律その他の知識や情報にたたりして、全体像を把握し、何らかの「納



得」に辿りついていこうとすることだ。その時に、相談してくる側が常に正しいとは限らないし、関係者がみんな事実しか語らないということでもない。

また、役所から業者を指導せよ、と要望する消費者もあるが、規制緩和のご時世で行政手続法の縛りもあり、そんなに簡単ではない。裁判所ではない行政の相談機関には強制力はないので自ずと限界があり、物別れに終わることもある。その時はみんなに不満が残る。

さらに厄介なことに、国の機関はいわゆる「縦割り」で、相談内容によっては「所管外」なので他の機関を紹介することしかできないというものもある。是非はともかく現実にはそういうしくみのだから仕方がないのに、相談してくる人によっては、「所管外」というだけでかえって怒りを増すような人もいて、こちらは余計なエネルギーを消耗させられたりもする。相談者の中にはとにかく話を聞いてくれればよい、というタイプの人もいる。そんな

なときは多少時間をかけても話を傾けていけばよいし、相手が話しやすくなるように相槌を打っていればよい。しかし、何かの契約トラブルに巻き込まれ、どうしてもいいかわからない、というようにな人に対しては、まず、私に任せなさい！というような姿勢（ハッターリダ）を見せる事も必要になってくる。たとえば、どう対応していいかわからずこちらも困っているても……。そういうときには、かなり気をはるものだ。

仕事として当然のことをしただけでも、非常に感謝されることもあるが、誠心誠意やっても、自分の思い通りに事が運ばないと「無能」呼ばわりされたり、エライ人宛に苦情の手紙が舞い込んだりもして落ち込む。

私なんかよりずっと長くこの仕事に就き、活躍している素晴らしい方もたくさんある。そういう方も含めて同業者の方がどう思っておられるかわからないが、私にはこの職種はどこか「名譽職」的な受け取り方がされているように思える。

先に書いたようにやりがいはあるし、い

ろいろな人や知識にふれる機会が多く刺激的ではあるけれど、大抵の職場は非常勤扱いで、身分的にも不安定だ。年収百万円(百三十万円)に抑えるつもりの人ならいいかもしれないが(そういう人が多いよう個人的には残念に思うが)、国民年金・国民健康保険もかけている私のような場合はとても中途半端。

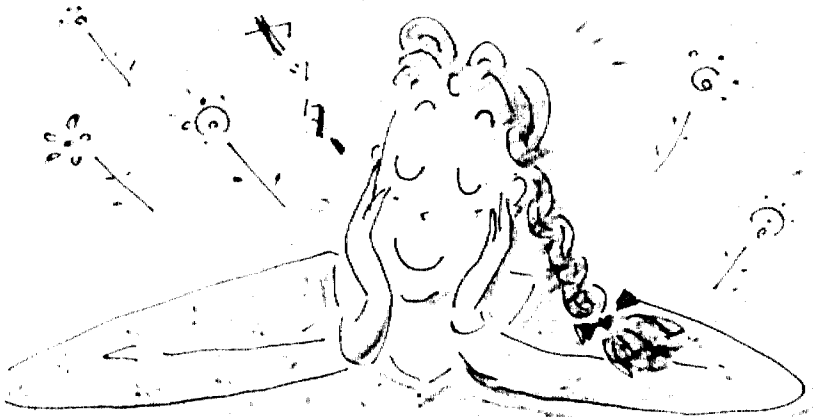
任期が決まっただけで先の不安もある。幼児がいる身としては贅沢も言えないしこれでちょうどいいかもしれないが、役割に忠実に、責任を持って働くには安定もほしいと思ってしまう。

でも簡単に現実はいえられない……。

資格取得に挑んで

東京都品川区●潮田京生子(33歳)

今、私は実に久しぶりに心おだやかな日々を過ごしている。



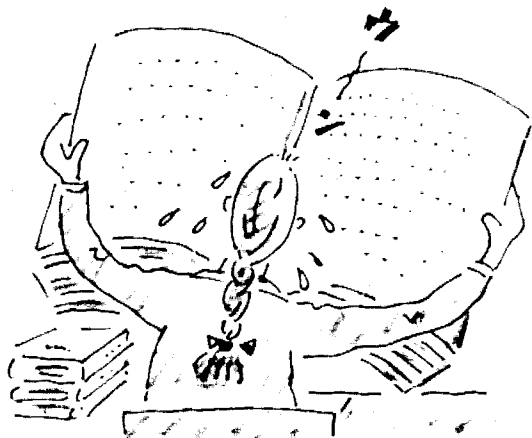
それは、約一年間にわたって努力してきたことが結実したからだ。この二月八日、「消費生活アドバイザー」という資格試験の合格通知を手にした。

妊娠九カ月めの平成五年二月、私は仕事をやめた。それは出張が多く、また契約社員という不安定な身分だったための仕方のない選択だった。

出産後しばらくは初めての育児で忙しく、自分のことなど考える余裕はまるでなかった。

しかし、子どもが生後三カ月を過ぎるころからしだいに仕事への復帰を願うようになる。

私はずっと外へ出る仕事をしてきており、最後の仕事も日本全国を飛びまわり、多くのお客様に会うものだった。それが、家事、育児に専念したとたんに変化してしまふ。極端に人と会う回数が減る。話は子どものことばかりだ。服装もスーツなどまったく着なくなり、化粧も省略してしまう。どんどん自信を喪失していく中で、それをくい止めるにはやはり仕事しかないと思う。固く信じるようになっていった。



しかし、仕事なら何でもいいという訳ではない。これまでの経験を生かし、さらにステップアップできるもの方がいい。そして幼児を抱えていても、できるだけ無理しない働き方をしたい。そう考えているうちに、「そっだ。資格を取ろう」と思いついたのである。

夫にも相談し、賛同を得て通信教育を申し込んだのは、子どもが六カ月のころだった。

まもなく届いたテキストを、その日からむさぼり読んだ。子どもが寝る時間を待って、寝たと同時に机に向かう。それは、家事、育児から解放される貴重で有意義な時間だった。

子どもはそんな私の気持ちを悟ったのか、しだいに毎日同じ時間に規則正しく昼寝をしてくれるようになる。また、休日は夫が子どもの面倒をよくみてくれ、またまった勉強時間を提供してくれた。家族のやさしさに励まされながら、時には弱気になったりもしたが、「必ず合格する」と誓ってコツコツと知識を積み上げていった。

試験は、十月上旬に一次試験（十一科目のペーパーテスト）、それに合格すると、十一月下旬に二次試験（小論文二題と面接）となる。どちらも制限時間いっぱいまでねばり、自分のすべてをぶつけたつもりだったが、その結果を待つ間は不安で落ちつかない日々を過ごした。「もうこんなつらい思いは二度とごめんだ」とつくづく思ったし、「どうしてこんなことをしたんだろっ」と後悔もした。

しかし、合格通知がすべてをバラ色に変えてくれた。

「がんばってきてよかった。ほんとうによかった」久々に味わう感動だ。

大学受験以来の受験勉強だったが、もっとも集中し、本気で取り組んだように思う。やはり本気の努力は報われるのである。受験者総数三七六九名、最終合格者数四五八名という数字を見ながら、「よくやった。えらいぞ」と自分をほめている。

今後は、この資格を生かして仕事に就くつもりだ。そして一生、私らしく働いていきたい。もちろん妻や母の顔も忘れたくない。全面協力してくれた夫や子どもにも感謝しながらますます家族のきずなを深めていきたい。

この資格取得への挑戦は、「一つの目標に向かって努力し達成する」という克己心を養ってくれた。また、家事、育児への専念は、自分自身を真正面から見つめて、ほんとうの自分を知るといふ苦しいけれど大切な時間だったと思う。それぞれの体験は、私を成長させてくれたようだ。

（え・小沢恵子）

船員の妻哀歌



熊本県天草郡

松本とみよ

港々へ通い妻

船乗りの妻は（特に外国船の）夫の長い不在、突然の電報であちこちの港へ呼び出されるなど、普通の妻とはかなり違った生活を強いられる。

私も方々の港へ呼び出されるうち、日本地図と時刻表さえあれば全国どこへでも、指定の場所へ指定の時間に着く自信が持てるようになった。

ある船員は妻がどこへでも間違わずにやってくるさまを、かわい気がないくらいだと評した。夫の船が港の岸壁に着かずには沖に停泊する時は、通船と

いう海上タクシーみたいな船に乗って行かなければならないが、その人の妻はあるとき乗り間違えて違う船へ行ってしまう、「面白かった」とケロリとして帰って来たとか。

でも慣れるまでは、普通男しかいない船や港の中に入りにしていると、なんだか恥ずかしくてならなかった。夫に会いに来る妻なんて、まるでこそこそした愛人みたいじゃないか。うしろめたい気がしたものだ。

夫とは結婚のいきさつからして風変わりであったが、結婚生活もまた、数々のエピソードの連続。

その中でも私が一番忘れられない思い出がある。実はこの話はあまりに複雑すぎてうまく説明できないために、他人に語ったことがない。夫と妹しか知らないことだが、妹にしてもこの出来事のはんの一部にしかかかわらなかったのだから、本当のところは知っているはずがない。しかし、一度は話してみたくてたまらないので、こうして筆をとってみた。

私は、熊本県の天草に住んでいる。島原の乱で有名な所だ。対岸にある島原の加津佐とともに船員が多い。

その日私は、三歳の息子と二人で名

古屋の動物園に来ていた。いい天気であつたが、私には空が青く見えなかつた。全く泣き出したい気分だつたのだ。いつも困つた状況に陥ると口をついて出る「私って何て不幸な女なんだろう」というセリフ。大げさだとは思ふがそう思わずにおれない。『悲』という字が胸いっぱい広がってはり裂

けそうだった。

息子はライオンを見てはしゃいでいる。ライオンは、檻の中でのんびり昼寝をしていた。メスとオスが、お互いに向かい合わせに足を伸ばして、まるで抱き合うように寝ころんで目を細めていた。なんて仲がよさそうなんだろう。ライオンでさえ夫婦でいるのに、私のそばに夫はいないのだ。ライオンにさえ嫉妬を感じて、もの悲しい気分になった。

その次のトラの檻では、オスがメスのお尻に顔を乗せて寝ていた。私も本当なら今ごろは、夫と出会っているはずだったのだ。

三日前、外国船に乗船している夫から、日本の横浜へ入港したと電話があつた。オーストラリアから帰つて来たのである。いつもなら入港前に電報が来て呼び出されるのだが、その日は電話で、

「来るなら来てもいいけど」
とどうでもいいように言うので、私もどうしようかと迷っていた。

会いたさにかられて

それなのに、横浜港を出港して次の大阪港に向かうという当日に急に会いたくなり、息子を連れて熊本行バスに飛び乗った私だった。

天草五橋で陸続きになったので、熊本までバスで二時間半。空港までさらに五十分かかる。夫の会社は、船が内地サイドにいる間、家族が船に乗るのは自由であつた。

夫とは三カ月会っていない。家族が訪船する時はだいたい入港日に港へ行くのが普通である。

その日、予定表によると夫の乗っている和栄丸は横浜港本牧埠頭を五時三十分に出港して大阪港へ向かうことになっていた。天草からバスで三時間半の熊本空港発東京行の飛行機は十二時十五分発。東京に二時着。それからまだ行ったこともない横浜港の本牧埠頭まで三歳の子供連れで、船のタラップが引き上げられてしまう出港一時間前の四時半までにたどり着けるものだら



和栄丸



1991年8月 “日高丸” 甲板にて長男晃と二男の千明

うか。ぎりぎりの時間である。何か一つでも予期しない出来事があれば、それこそ岸壁から出港して行く船を見送るはめになるだろう。

でも思いついたらぜひでもやらないではおれない性質の私だった。おとなしくて人の影に隠れているくせに激しいところもある。一晩しか会えないのに沖縄へ急に行ってしまうような私である。本当にこんなバカなことをしようとしているのだろうかと思分がわからぬ思いではあった。

バスが遅れて、熊本に着くと空港までタクシーを飛ばさなければ、飛行機に間に合いそうもない時間だった。息子をせかしてタクシーに乗り急ぐ。時計を祈るように見ながらなんとか時間までに到着。ところが何てことだろう。東京行の飛行機は満席だというのだ。キャンセル待ちをしたが、私の二番前の客までしか乗れなかった。目の前が真っ暗になる。

全くなんでことだろう。こんなことになるのなら入港日にすぐに会いに行

けばよかったものを。本船が次に入港する港は、あさって大阪港だった。大阪へ行くしかない。飛行機に乗れなかったばかりに今日会えるはずが二日遅れになった。ついでといっはなんだが、次善の策として名古屋の妹の所へ行くことにする。

名古屋までの飛行機の切符を買った。妹は名古屋で、自分の卒業した外語専門学校の理事長の秘書をしている。浮かない気持ちではあったが、名古屋に着いたその時の私にはまだ余裕があった。なんともいってもあさっては夫に会えるのだ。郷里を離れて一人暮らしの九歳違いの妹にも久しぶりに会える。

これは、後からわかったことであつたが、私がもし東京行の飛行機に乗れたとしても、とても出港までに本牧埠頭へたどり着くのは無理だったのである。まだその時横浜へは行ったことのない私だったので、地図上では東京と横浜がいかに近そうに見えたのだが錯覚だったと数年後横浜に行った時に

感じた。

名鉄バスセンターの地下から、妹のいる学校の秘書室へ電話する。急に天草からやって来たと云ったら、妹は無論驚いたが大喜びだった。六時にバスセンター近くの大きな、ななちゃん人形の前で待ち合わせ。三メートルはありそうな人形が舗道の真ん中に立っている。

翌日、妹は出勤である。私は午後から大阪へ発つつもりだったから、朝の駅でお別れになるはずであった。暇つぶしに午前中は、息子を連れて名古屋動物園に行く。動物園の公衆電話から大阪の船会社の代理店へ電話をして、大阪港入港時間を確認する。ところが、船は明日ではなく明後日の朝、大阪へ入港になるというのだ。

ライオンやトラの夫婦を見て、もの悲しい気持ちになるのも無理からぬ話ではないか。飛行機に乗りそこなったために三日もむだにしたのだ。夫と日ごろ会えない妻にとって一時間、いや一分だって惜しい時間なのである。

それなのに、あさっての朝入港なら、夫とゆっくりできるのはたった一晚ということになってしまうのだ。せつかく来るのなら、なんで横浜入港の日に行かなかったのだろうと今さら悔やんでもはじまらない。

もしそうしていたら、今ごろは息子と夫の船に乗って大阪港へ向かう海上の人となっていただろう。

翌日は、日曜日だったから妹も休みでデパートめぐりをして過ごした。

その次の朝早く、私は息子の晁を連れて、大阪行の電車に乗った。二時間ほどで着ける。見送る妹の目に涙が浮かんだ。都会で一人ぐらしの妹、感傷的な気分になる。

ようやく港に辿りつく、が……

いよいよ今日は会える。明日は出港だけだった一晚でも夫と過ごす時間を思うと胸がはずんだ。

大阪港へ着き、税関に船の所在を確かめた。

外国から帰ってきた船は、必ず税関

の検査を受ける。広い港の中で一隻の船を自分の足で探すなんて無理な話。船の停泊している場所がわからなかったら、税関に尋ねるように夫に言われている。

ところが、何ということだ。夫の船は、大阪港へ入港はしているが岸壁へつけていないというのだ。沖のほうで碇をおろしているという。

港が混んでいる時や、会社側の事情（停泊料がばかにならない）でこうなることが、ままある。そういう場合は通船という海上タクシーに乗って船まで行かねばならない。

陸へあがることの少ない船員の慰労のため、または買い出しのために会社に通船の契約をするのである。

聞いてみると和栄丸は通船が出ないというのだ。泳いで行けるものなら行きたいが、行けるわけがない。明日は出港の日である。オーストラリアへ出港する、その日の朝にならないと岸壁へはつけないという。

私は、しばしばうぜんと沖を眺めて

いたが、鳥ならぬ身の自分にはどうしようもない。

せっかく遠い天草からきたのに、明日船へ行ってもゆっくりと話すひまもないだろう。

何といっても悲しいのは、日ごろ会えない夫が、すぐそこにいるのに会えないということである。私が日本への入港の日に横浜へ行っていたらこんなことにはならなかった。今ごろ船の中で楽しい時間を過ごしていただろう。

港の公園で晃を遊ばせ、「お父さんは？」とたずねる彼に「もうすぐ会えるよ」と平静をよそおいながら、あふれそうになる涙をこらえた。いっそ泣けたら気分も楽になったろうが、子供の前で泣くに泣けない。なんだか晃までが哀れに思えてきて思わず抱きしめたら、不思議そうな顔をした。

港を歩けば、中年の男女が、肩を並べておだやかな笑顔で通りすぎて行った。あの女の人は夫に会いに来た船員の妻であろう。だいたい港に女などいないのが普通だ。今ごろは、私もあ



1987年2月 問題の日、名古屋動物園で

やって一緒に過ごしていたはずなのに。夫と何カ月も会えないのも辛いことだが、こんなふうにならざるを得ない所へ会いに来たのに会えないなんて、それも目の前にいるのに。これは家で夫を待っている以上に辛い経験であった。もう二度とこんな思いはしたくないと思う。

仕方がないので、その日は大阪市内のビジネスホテルに泊まった。あまりにみじめなので何か思い出を作ろうと、夜は吉本新喜劇を見に行った。通りすがりに宝くじが目に入ったので買った。自分の運をためしてみたい気持ちであったが、後ではずれていたのがわかった。運のない時は何もかもだめなものなのだ。

私は夫と会っていてもよいはずの四日をもうむだに過ごしてしまった。

今度こそ本当にいよいよ夫に会えるというその翌日の朝。いつもなら船に大きな荷物をかかえて行くのだが、どうせ今日の夕方は出港になるので、一晩も泊まれないのである。荷物を持って行っても仕方ない。出港の日には夫もバタバタしていて忙しいだろう。本当に顔を見るだけということになるだろう。

私は駅のコインロッカーに荷物のほとんどをあずけて、バック一つを持ち晃の手をとった。

夫の船が入るのは桜島岸壁という所である。駅の案内所で桜島まで行きたいと言うと、駅員は、鹿児島島の桜島と勘違いしていた。私が今から行くこととしているのは、一般市民が行ったことも聞いたこともないような場所というわけだ。

日本全国どこへでもたどり着ける私ではあるが、港まで来てからがまた一苦労なのだ。港は本当にわかりづらい。



同じく問題の日、顔は笑っても心は泣いている

何号岸壁とかいわれても岸に数字が書いてあるわけではない。どうかするとだっ広くて倉庫だけ並んで寂しい場所に、誰かに聞こうにも人っ子一人いないということがよくある。

この桜島岸壁は、ある会社の工場の中にあった。

電車を降りてかなり寂しい場所を心細い思いで歩かねばならなかった。

心の底からうれしくて

見なれた船が見えて来て、まちがいでなく和栄丸という文字が目に入ってきた時は心底ホッとした。

顔を見るだけであっても、とうとう会えると思うと辛さが幾分かいやされた思いであった。しかし……。

ドラマはここで幕切れではなかったのだ。運命の女神はどこまでも気まぐれであった。メロドラマならさしずめ、神ならぬ身の知るよしもないことであつた——というナレーションが入るところだ。

タラップを上ってすぐの調理室^{ギャレ}に夫はいるはずだ。夫は船で食事をつくるコックである。私を見たらどんな顔をするだろうか。

ギャレーに入ると、まな板に向かつてキャベツのせんぎりをしていた彼が、もの音にふり返り二人の目が合った。

驚くまいことか。妻が来てうれしいというよりもまさしくギョツとしたようす。「今日、出港するんだぞ」と信じられんようにいうので、

「知ってるけど、顔見に来た」と私はさりげなさをよおって軽く答えた。

そりゃあそうだろう。あと何時間か

で出港という、それも外国へ向けての出港の日である。妻がそんな日に船へ来るなんてことは、おそろく前代未聞。ありえないことなのだから。

夫はたぶん他の乗組員に対して恥ずかしくてならなかったろうと思う。怒ったように、

「とにかく部屋へ行っとくように」と言った。

だいたい船員の妻が夫に会いに船に行つた時に、一晩も泊まらずに帰るなんて、そんなバカげたことが起こったなんて、末代までの語り草になつてもおかしくないような出来事ではないか。何カ月も会わなかった妻が目の前にいるというのに、抱くこともなく帰さねばならないのである。それくらいなら会わないほうがましというものだ。

そういえば船に行つたとたんに生理になつたなんてこともあった。夫からは、「泣かん子を泣かすようなことをして」といわれたが私のせいじゃない。夫はこの数日、私がどんな目にあつてやつとたどり着いたか知るよしもない。

い。だが私だとここで会わぬまま帰るわけにはゆかなかった。

彼もうわべは冷静なようだったけど内心は動揺していたのだろう。部屋に持って来てくれた朝食の大根おろしにはソースがかかっていた。これはプロの Cock とお思えぬ大胆なミス。

晃はお父さんに会えて大喜び。そのようすを見ているとうれしくて、お父さんに会わせてやれただけでよかったじゃないと自分をなぐさめる。

最後の荷物の積みおろしが行なわれていた。そのようすを夫の船室の丸い窓から眺めていると、夫もダンボールに入った食料を持ってタラップを上がったり降りたりする。顔は見えないが、ただでわかった。

私はまたもの悲しい気分になった。少しは部屋に来て話してよ。夫は朝食を持って来てくれたきり部屋に来ることはなかったのである。

あいにくの曇り空、もし雨でも降って来れば傘のない私、帰りは困ったことになる。不幸の追い打ちではないか。

やがて雨が降って来て、よわっていると、ようやく夫が部屋に入って来て、「雨が、一時まで降り続いたら出港が明日になるかもしれない」という。「うっそーっ!!」って感じ。さっきとはうってかわって、もっと降れと思う。荷物が雨に弱い性質の物で、今作業を中止しているとのこと。

夫が出て行き、外の雨を祈る思いで見つめていたのに、またやって来て、「雨は上がった」という。

「またあ、そんなこと言って!!」
夫はよく冗談を言っって人をからかうのが趣味だから、私はてっきりこれも冗談かと受けながしていたのに今回は本当のことらしい。これには私もまいてしまった。

しかし、私の試練は、まだまだこれで終わりではなかった。晃は眠っている。出港までにもう一時間くらいしかなく、タラップがいつあげられてもおかしくないという時間に、夫が私に薬を買いに行ってくれというではないか。洗剤まけしたらしく、みにくいほ

ど手が荒れている。出港したら二週間は海の上である。薬がないと辛かるう。だが、少しでも長くそばにいて話をしたいのに、まさに時を数えるような心境の私に薬を買いに行けという。なんという仕打ち。

もうあと、一時間で出港、子供は眠っている。他にすることがあるんじゃないやませんか？ 私としては、船にきた事情も事情だし、ただただ別れを惜しみたかったのだ。話をするだけでもいい。そばにいたかった。少しでも思い残すことなく納得のいく別れにしたかった。

また降りはじめた雨の中、傘もないのに。この来てみてわかる桜島岸壁のへんびな場所から、どうやって土地勘もないのに薬屋を探せというのか。私は、

「出港までに帰ってこれるかわからぬからいやだ」と言ったが、向こうの岸壁まで、すぐそばから渡し船があるからという。そこまでいうなら仕方がない。

どうにか渡し船にたどり着いたら、見知らぬおばさんが、私に傘をさしかけてくれ、「タクシー代割り勘で行きましょう」といってくれた。

向こう岸に着き、そこにいたタクシーに薬屋まで行ってほしいとたのむと、

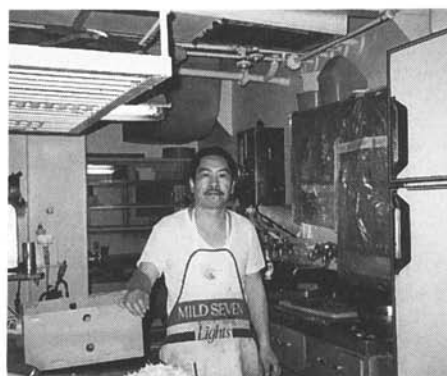
「薬屋なんか知らん。歩いて探せ」と無情なことは。ふんだりけったり。私には時間がないんです。思わず天を仰ぎたい心境だったが、目を上げると運のいいことに、なんと目の前が薬屋であった。

二転、三転、運命のまま

運命の女神は、さっきから何度も私を悲しませたり喜ばせたり、ふみつけにしたりと何回私をふり回せば気がすむのだろう。

雨が降り続けばもしかして、また出港がのびるかもと期待と不安が入り交じる。

渡し船で桜島岸壁に戻ったところで、私はまるで私を待ちぶせしていた



1989年 和栄丸ギャレーにて

かのようなパトカーに呼びとめられた。普通なら女のいない場所に、雨の中傘もささずに行ったり来たり、何をしているのか不審に思ったらしい。

事情を説明し、もう出港まで時間がないというパトカーに乗せてくれた船まで送ってもらった。デカおじさんとのっぼの若者のコンビ。今日は全くなんという日。パトカーに乗るといっておまけまでついた。一般人はパトカーにはそうそう乗れるもんじゃない。スピード違反で捕まった時に、腰かけさ

せられて書類を書いたことはあったが。

全く今回の訪船は、船にたどり着くまでもドラマチックだったが、たどり着いてからもいろいろあったものだ。船に帰って薬を渡し、私はすぐに帰るしたくをした。夫が、キャブテンに出港の正確な時間を聞きに行く。タラップがひきあげられる前に船をおりねばならない。タラップは船の甲板から岸壁までおろされている縄ばしごみたいなやつ。船はビルほどもあり、あまりに高すぎてふるえがきそうだった。

晃はまだ眠っていた。すると帰って来た夫が、

「出港は明日になった」というではないか。

「エッ!! ウツソッ!! つまり、今日は泊まって帰れるってこと?」

しかし、にわかには信じられない。また何かとんでん返しがありそう。

「いや、おれもキャブテンに『本当ですか』と言ったら『何か不服でもあるのか』と言われるんで、いやあ家族が

来てるんです” “よかったじゃないか” “バイおかげ様で” “おれに礼を言われてもなあ、雨にでも感謝せんと”

私達はまさに手と手を取りあい、飛び上がって喜んだ。なんか吉本新喜劇みたいだけど。

そのすぐ後。ふと曆を見た夫が、
「明日は十三日の金曜日なあ」とつぶやいた。西洋には十三日の金曜日に出港した船は、帰って来ないという言い伝えがあるという。

そこで私が、

「エッ!! 明日は出港しないんじゃないの? キャプテンに聞いてみたら」と言うと、
「それがどうかしたのかと言われるぜ」とのこと。

明日も明後日もずーっと雨が降り続けばいい。しかしそううまくゆくわけはない。ただどこまでくるのに二転三転。まるでドラマのよう。真実は小説より奇なりっていうけど本当にこんなことあるんだとしみじみここ何日かの苦勞をしのぶ私だった。だいたい私

が横浜入港の日に船に来てたら一週間是一緒に過ごせたはずなのだ。

夫にはまだ本当のことを話していない。夫はきまぐれな私が、きのう天草を立て、出港日にのほほんとやって来たときと思っているのであらう。私の苦勞もしらないで。

「しかし、一晩も泊まらぬのに家族が来たなんて、おれも恥ずかしくて言えるか。聞かれたら妹が病気で見舞いに来たから、そのついでに顔を出したことにしよう」と夫がいう。

「そんなこといったら、かえって嘘っぽいじゃない」と私。

夫が同じコック仲間の宮崎さんには本当のことを言って、他の人に聞かれただけを合わせてくれとたのむと、

「そうですね。ぼくにできるかなあ。聞かれんのにこっちから言うのもおかしいし」と言われたそうだ。

私達はもうルンルン気分ですっきりまでの悲壯感が嘘のよう。そんなバカみたいな話をして笑い合った。

でも、まだ信じられなくて、突然出

港になるんじゃないかと一応覚悟だけはしとこうと思う。

大月みや子の「女の港」の歌詞に、

「港の宿であなを待てば、

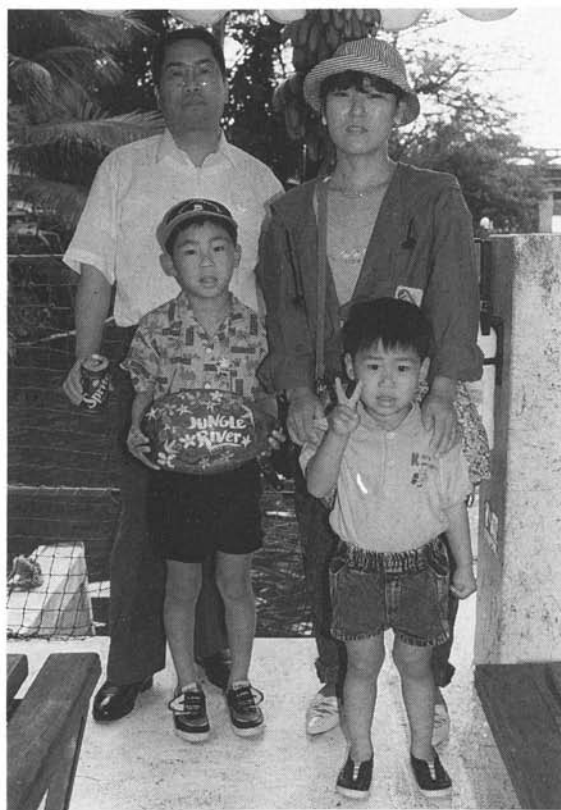
たずねる船は青森にや寄らずに

佐渡へ行くという。

つらい知らせはなれっこだからというのがあるが、まさにそのとおり。いいことがあるても半分しか喜べない女になるのかな。

これは愛なのか?

しかし現代の世の中に、ここまでせっぱつまった状況の中で、お互いを求めあう夫婦っているのだらうか。出かせぎに出る夫はいるが、離れていても陸続きではないか。夫が休暇下船していても、急に電話一本で乗船命令が来て、その日のうちに家を出ること。命をおとすことはないにしても何か月かの別れ。赤紙一つで戦争に行く夫を見送る妻の心理に似たものがある。私達はまだいいほうで、夫がタンカーに乗っている近所の奥さんなん



1991年 グアムの松本一家

か、本当にまるまる一年くらい夫には会わないのである。会う時は人みしりして恥ずかしいそうだ。私が仕事していた時、急に家の夫から職場に電話がかかり、

「今から乗船になった」と言われた時ほど辛かったことはなかった。

愛は困難な状況の中でおさるに燃

えるというけれど、もしかして私は夫を愛しているのではなく、こういう状況のなせるセンチメンタリズムで何かを錯覚しているのかとも思うことがある。

その夜は、私達夫婦がさぞかしドラマチックにお互いを求めあったであろうと思われるかもしれないが、あしか

らず、そこがドラマでないところ。私達はどういうわけかその夜、なぜそんなことになったのかと後から首をひねって考えたのだけれど、何かひどく大まじめな話。人生とは何ぞやみたいな話をおっぱじめてしまい、その夜はなんか愛というムードはどっかにしらけて飛んで行った不思議な夜だった（とはいっても、何もなかったというつもりはありませんが）。

そういえばその夜、近くの店に公衆電話があったと言いつ張る夫。なかったという宮崎さん。やりとりが漫才みたいで私は大笑いだったが、二人は大まじめ。ことの真相は、夜になると電話を家の中に入れるのだとのこと。どこまでもおかしい夜であった。

船を後にする時、私は今回の本当のいきさつ。横浜に行きそこなって以来の私の不幸の数々。大阪港に来てみれば沖待ちで船に行けなかったことなどなどを書きつづった手紙を夫の机の上に残して来た。

駅のコインロッカーで荷物を出す時

には、入れた時の気持ちを思って感慨深いものがあつた。

自宅へ帰って二週間後。オーストラリアのダーウィンに入港したという夫よりエアメールが届いた。それには、あんな形ではあつたけど私に会えてうれしかったこと。出港したとたん、乗組員全員から「愛されているんですね」と言われたことが書いてあつた。

一晩しか会えないのに沖縄まで行ったことのある私である。一晩も泊まらない状況の中で会いに来たとなれば相当情熱的な奥さんと思われたであらう。

夫は決してハンサムではないし、私の好みのタイプでもない。恋愛結婚でもないがすごく気が合つた。愛であるはずがないと思うのに、どうしても夫に会いたいと思いつめている時など、まるで恋してるみたいだと思っておかしくなる。これは一体どういうことなのか。

まあ、それはともかく、手紙の最後に、私の置き手紙をみてかわいそうで泣けて来たと添えてあつた。「一生こ

の手紙を残しようと思う」とあつたが、七年たった今、その手紙はどこにあるのだろう。いっこうに手元にあるような気配もないが……。

和米丸が売船になるという話を聞いた時は淋しい思いだった。

あの色々な思い出のつまった船にもう二度と乗ることもないのだ。

船は私にしてみれば結婚生活を送つた第二の家も同然。

夫とは夫の兄の紹介で結婚、それも出会って一カ月後の形式的な入籍。本当にただの紙切れ一枚を役所に出しただけの関係だった。結婚式は一年後の結婚式前、夫の船をはじめたずねたのも和米丸だった。

船員の妻、私が一番なりたくなかつたもの。十年結婚して、実際の生活が二年なんてばかりだと思つていた。

今は、離れているからこそ、お互いを求めあえる船員の妻も悪くないと思つている。

(写真提供・筆者)

わいふ文章講座のおすすめ

公民館、女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、わいふから巣立ったライター達を講師とし、

五回から十回までのコースがあります。

東京から遠いところ（大阪、新潟など）になると、田中か和田が一人で行って一回だけの講座ですが、初めて書く人にも分かるように、原稿用紙の使い方から自分史、インタビュー記事などのまとめ方までご説明しています。

お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げますので、それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などに開講を頼んでみてください。引き受けてくれるところも多いと思います。

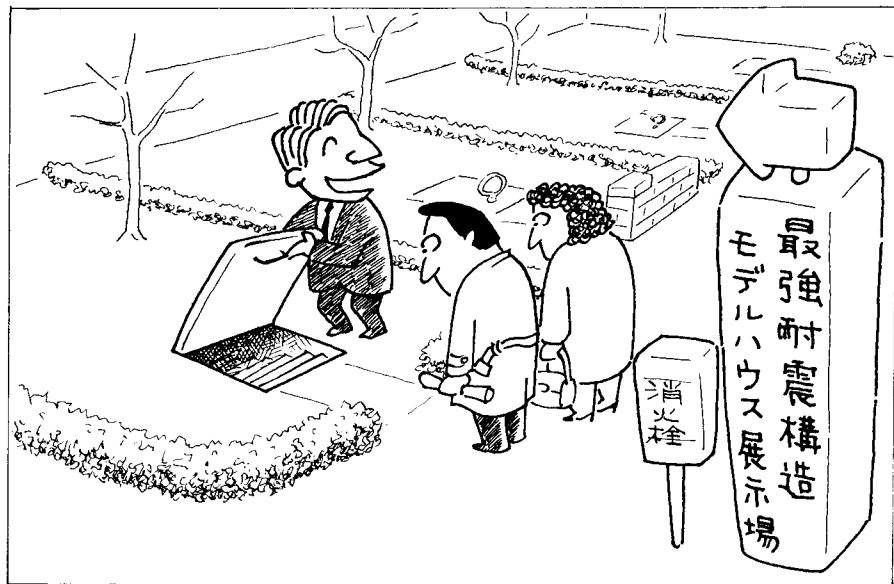


平成
おたまたげ-ジョン

(19)

阪神大震災
その後各地では

西の
東の



異界に 祭り囃子が 聞こえた

埼玉県浦和市

佐藤ゆかり

仕事があれば働き、あぶればひがな一日ぼんやりと過ごす。ある時は一泊二千円ほどの簡易宿舎に泊まり、ある時は路上で朝を迎えながら。

東京の浅草から北に広がる山谷は、世間の常識やごく普通の暮らしからかけ離れた『異界』だ。

借金から、家から、社会から、逃げて流れて流されたまま、日雇いの肉体労働で得た金でその日を暮らす利那の街。ある人は、そこを『吹き溜まり』と呼んだ。

虚栄の舞台の開幕

「人を殴っちゃあいけないよ。俺は、暴力は嫌いだ。だけど、俺がだれかにばかにされたら……ばかにしたそいつを殺す。人をばかにしちゃあいけ

ないよ。道具（拳銃）は持っているんだから、俺をばかにした奴は死ぬよ」

「やくざなんか怖くないよ。ここに来て、もう三十年だもの。やくざと喧嘩してムシヨ（刑務所）に入ったことだってあるんだから。ぜーんぜん、怖くないよ」

異界で暮らす男たちが集まる十二月二十八日の玉姫公園は、さながら虚栄の大舞台だ。

明日も知れない不安な暮らしの中で、それでも、いや、だからこそ彼らは自分の強さと度胸、存在価値を高らかに歌い上げる。

「今日は、食べるお祭りだ」

だれかが叫んだ。

そう、暮れも押し迫った二十八日から年が明け一月四日まで、公園は大きな食堂になる。「ふ

るさとの会」(炊きだしや山谷・路上生活者の現状調査などを行なう、ボランティア団体)や山東労(賃金未払いなどの交渉を行なう、山谷の労働組合)が無料で食事をふるまう「越年炊きだし」は、帰る場所のない労働者や路上生活者にとって、もつなくてはならない存在のよう。食事のあとはそこにテントを張って布団を敷き、だれもが一緒に枕を並べる。「ふるさとの会」はこの日の夕食に、約三百食分のカレーを用意した。

私が会の一人に誘われて、初めて参加した越年炊きだしは好奇心半分、恐ろしさ半分。

もともと、後悔を背負って運の悪さと自分の弱さを嘆きつつ、虚勢を張る生き方は好きじゃない。心の奥底では「家がない気の毒」よりも、「自業自得の結果」が先に立つ。だから、ボランティア精神とはほど遠い、怖いもの見たさの不純な動機。

だが、玉姫公園で見たのは怖さではなく、開き直りとも取れるような明るさと、バラエティ豊かな人間模様。そして意外にも、物騒な言葉とは裏腹な、紳士たる彼らだった。

役者は揃った

一種独特なムードが漂っていた。

公園といっても、そこには砂場で遊ぶ子供たちがいるわけではない。高いフェンスに囲まれた球技場の隣に、I字型に広がる閑散とした小さな空間……。それでも、すぐにわかった。土地勘のない私にも通りかかるだけで、その公園は空気でわかった。

私が着いた午前十一時は炊きだしが始まる六時間も前。だが、小雨模様が続くなか、すでに三、四十人の男たちが集まっていた。だれが始めたのか、公園の片隅には壊れたビニール傘や木屑などを燃やした小さな焚き火。その燦るように立ち込める煙はかりの焚き火の回りで、男たちが酒を飲んだり意味もなく騒いだり。十二月の末だということに、死んだように(本当に死んでいるのかと思った)眠り込んでいる人もいた。

年末年始の行き場として、行政が彼らに大井の宿泊所を用意しているため、公園には高齢者や体



の悪い人は少ないはず、と聞いていた。しかし、みずから希望しない人や、人数制限にあぶれる人が多いのだろう。六十歳はゆうに越えている人が何人もいる。歳の頃のわかりにくい人も多いが、平均年齢は四十歳なかば過ぎくらいか？ そのなかでひとときわづらなく映るのが、やり直すには充分なはずの二、三十代の青年たち。そして、その層は年々確実に増えているらしい。

彼らのいでたちはさまざまだ。袖口が黒光りする汚れたスーツ姿の人、ぼろぼろになったズボンの裾を抱えて座り込んでいる人、真っ黒な顔に真っ黒なリュックサックを背負った人……。反面、こざっぱりした服装の人が多くことに内心で驚く。なかには演歌歌手よろしく、赤いアスコットタイでお洒落に胸元を飾った人もいる。降りだした雨にいきなり、紫の粋な番傘をひろげた人もいた。

ちなみに、番傘の彼は本物のオカマだった。

「今日は、いい男をさがしに来たのよ」

禿頭に迫り出したお腹をユサユサと揺らしながら、甲高い声を上げる。セーターにズボンの姿はまぎれもなく、男。丸い大きな顔には化粧も施していない。そのどこから見ても男性にしか見えない彼が、腰を振りながらシナリシナリと内股で



歩く。女性よりも女性らしい言葉を発し、こぶしを効かせて小唄を歌う。指の先まで神経を張りつめ、実に艶めかしく美しく、日舞を踊る。

「本物だ！」

その様子と芸があまりにも見事と思わずつぶやいた私に、やっぱり一オクターブ高い声で彼が答えた。

「ありがとー」

そして、軽くウインクを返す……。

吹き溜まりの街は、芸達者の多い街でもあった。

一本のハーモニカを奪い合うようにして吹く、男たちの調べは切なく美しく……アスコットタイのお兄さんが張りのある声で披露しているのは、

バタヤン（田端義夫）の歌。隣には、振り付きで一緒に口ずさむ人がいた。

飲まずにはいられないのか、飲んでるがゆえにここまで流されたのか、山谷はアルコール依存症が多いと言われる。酒が原因でやつとつかんだ生活保護を解除された人もあとを絶たないとか。もちろん、この日もだれもが朝から酒を飲んでゐる。そのせいなのか、もたらそうなのか（ここは、本当に何だかよくわからないことが多い）、実にテンションが高い。口から泡を飛ばす勢いで話し続ける人がいる。すぐにいきり立つ人もいる。かと思えば、自分の悔やみきれない過去を思い出しているのか、ポロポロと涙を流している人もいた。

なかで、拳銃を持っているとつぶやいた人が妙に冷めた面持ちで辺りを見回していた。「道具（拳銃）を見せてあげようか？」

彼が薄笑いを浮かべながら、ゆっくりと右手をジャンパーの内ポケットに入れる。そして、静かに取り出したのは……、琥珀色の小さな瓶。「瓶？」覗き込む私の手のひらに、中身を一滴、二滴……。むせかえるほどの香りが一面に広がる。香水だった。いかつい顔で「殺すよ」と声を潜める、薄汚れたジャンパー姿の男が自分の首筋

に、耳元に香水をまく。甘い香り漂わせながら、私に聞く。「身だしなみだよ。お姉ちゃん、何を使っているの？」

ここは、やっぱり特殊な世界だと思った。

揺れる仲間関係

踊る人も甘い香りもまったく意に介せず、炊きだしの準備を手伝う律儀な人たちがいた。にんじんの大きさをじゃがいもの芽を気にする山谷の労働者。慣れた手つきで包丁を扱い、落とした野菜を丁寧に洗う。

テント作りの準備に参加するのは、「俺はここに来て十七年だから」が口癖の、気さくなおじさん。やる気充分なのはいいのだが、勢いあまって必要なものも不必要なものも運んでしまうのが玉に傷。ほかの人に「何にもするな」と怒鳴られ、そのたびに抱えたものを投げ出して怒る。だけど、二分もしないうちにまた機材を持ち上げ、がに股で運ぶ（みんなでもやらないきゃ駄目なんだ）。鉄棒を担ぎながら歩く後ろ姿が、そう言っているかのように見える。だけど、だれかに言葉でそれを伝えようとはしない。

彼らは、いつもそうだった。だれもがそうだった。

しつこくて細かい。言葉尻やどうでもいいようなことまでを持ち出し、相手にとことん詰め寄る。詰め寄りながら手が出て足が出る。そのうち、にっちもさっちもいかなくなり、気がついたボラントエアの男性が止めに入る。すると、まったく見事に、殺しかねないほど勢いのあった喧嘩があっさりと終わる。

すべてが突然だった。会話を楽しむのも、唄を歌うのも、喧嘩をするのも。突然怒りだし、突然仲間になる彼ら。彼らは、おしなべてアンビバレンツ（相反する感情が同時に存在する）な存在だった。

管理社会で生きる

そして、彼らは実によく人を見ていた（と思う）。もちろん、弱きを助ける正義の味方も、男気のある人もいるから一括りにはできないが、強い者には弱く、弱いものには強い哀れな男たち。いくら正しい理論でも、それをぶつけるのは自分と同等か、自分より弱そうな仲間たちだ。

山谷は一匹狼の集まりと言われるが、私の見た限りそれは当てはまらない。形は個人の日雇い労働者の集まりであっても、ここは普通よりも力闘

係のはっきりした、ある意味でひとつの管理社会だ。

社会の歯車を嫌っても、やっぱりまた別の管理社会に取り込まれ、同じ仲間と群れる。それでも、仕事することは彼らにとって生きる術だけではなく、唯一プライドと結びつく重要なことなのだろう。

だが、いくら重要でも、ここにはその約束がない。とくにバブル崩壊後、働きたくても仕事がなく、必然的に山谷という枠からも抜け、多くの労働者が完全な路上生活者（俗に言う浮浪者）に落ちていった現実。ある人が言った。

「アオカン（外で寝ること）をするときは、だれもいないところとする。仲間に見られるのが恥ずかしいから」

好きでアオカンをしているわけではない。どう



にもならなくて、惨めさを抱えながら外で寝る。

そして、それに慣れ、諦めていく。いくらいきがっても、浮浪者と紙一重の生活は不安だらけ。

かといって、他で仕事を見つけることもできず、いまさら家庭や田舎に戻るわけもなく……。だからこそなお、ここにしがみつki、強い者を信じようとし、逆らうのをやめる。

一度は喧嘩の当事者になったハーモニカの君も強い人には弱かった。

「いいから、今はここから出ていけ」

あいつがここにいるのは認めない！と、きつい顔で告げた別の男性にうなずきながら、山谷のまとめ役（と、自分で言っていた）が彼の背中を軽く押す。

「夜にまた、戻ってくればいいんだから」

まとめ役は優しい一言も忘れない。

深々と頭を下げ、ハーモニカの君は素直に公園を後にした。

「あいつは、ちょっとまずいことをやったから。悪いことをやってはいけないんだよ。それが、山谷の掟なんだから」

まとめ役の台詞が、うつむき加減に丸まったハーモニカの君の後ろ姿に重なる。

しかし、二十分もしないうちにハーモニカの君

はオドオドと帰ってきた。まとめ役はちらりと彼に目をやり、だけど何も言わなかった。

ハーモニカの君が雨で濡れたコンクリートの上に座り、私を呼ぶ。「預かっていて」そして、手のひらにジャラリと、何かのお釣りらしい（きつと、酒のだろ）小銭を乗せる。しばらくしてから私はそれを公園内に置かれた、「山谷への寄付金」の箱に入れた。それが彼の、何かに対する言い訳と見栄だとわかったから。

囃子に誘われて

十一時に来てから、すでに四時間が過ぎていた。

喧嘩で殴られ鼻血を流していた人も、出ていけと怒鳴られた人も、けっして公園から離れようとはしない。十二月の寒空の下、風が吹こうとも雨が降ろうとも、だれもそこを動かない。一度は離れた人も、天井のないこの薄汚れた公園にすぐまた戻ってくる。ぎりぎりの暮らしのなかで、見栄とプライドを一番大切にしている男たちが、普通で考えれば「惨めで情ない」炊きだしを待っている。

だれもが、一食のカレーだけを待ち焦がれてい

とは思えない。食事代金、いやそれ以上のお金は持っているであろう男たちも大勢いた。実際、ここにいながら食事を取らない人もいると聞く。彼らは宿泊代になるはずの大事な千円、二千円を酒に変えながら、それでもここを離れようとはしない。

時間がたつことに、人が少しずつ、増えていく。完全な路上生活者の数も増し、静かに公園を取り巻いていた。ここでの路上生活者は、それが落ちたものの処世術なのか、おしなべておとなしく、見ているほうが辛くなるほど腰が低い。そして、寝転がるでも何かをするでもなく、集団のな



かの孤独人になり、ジツと時の流れと炊きだしを待っている。

二十九日から三日までは、一日に三食の食事が用意されるらしい。三十一日には、年越しそばもふるまわれるのだと言う。そして、明けた元旦は全員一緒に餅つきだ。イベントも盛りだくさんに用意されている。カラオケ大会、芝居、コンサート……。

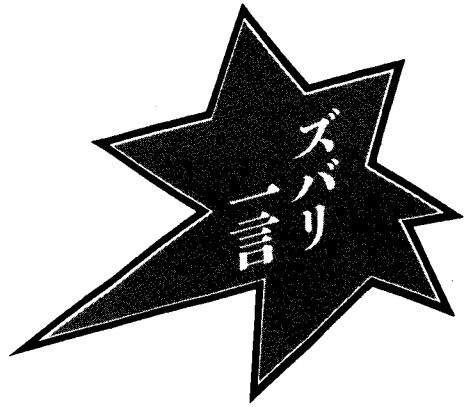
この不思議な世界で、私は思う。

やっぱり、今日から八日間はお祭りなんだと。

仕事で過労気味のお父さんも、都会の暮らしたに疲れたお姉さんも、家族のもとに帰ろうとするお正月。一年のなかで一番、一人ぼっちの淋しさが身に沁みるお正月。

そのお正月を家族からはぐれた男たちが、大事な何かを捨ててしまった男たちが、それでも一人で越すわけではないことを確認する、大切なお祭りなんだ。酒以外に娯楽を見いだせない彼らが、例えそれがどんなにあやふやな絆だとしても、仲間たちと一緒に時を楽しむお祭りなんだ。

大声で虚勢を張っても、人生の失敗を言い繕い開き直っても、どんなに一人の自由を歌い上げてても、そこにはやっぱり、隠しきれない寂しさに泣く普通の人間たちがいた。



いい加減にして くれTV報道

大坂市旭区 ●宮崎貴子

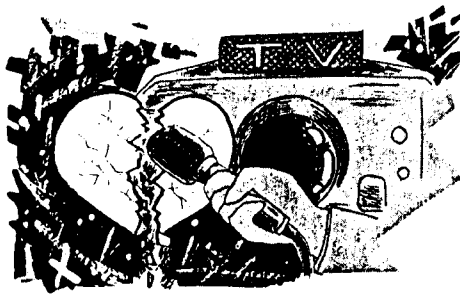
先日、神戸市垂水区に住んでいる知人からはがきが届いた。小学三年生の時の担任だったF先生からだった。

あの阪神大震災の後、心配だったので私が電話をかけた（つながったのは一週間近くたってからだったが）ことに対

するおれのはがきだった。はがきの最後は次のようにしめくられていた。「それにしても肉親や家を失った方々のことを思うとやり切れない気持ちでいっぱい。同情の顔をしたTVの報道はいい加減にしてくれといなくなるのが今の気持ちです」小さな紙面の中で、このようなことを書かれたのは、よほど目に余るものがあつたのだろう。私だってこのところのテレビの報道にはうんざりしていた。F先生や私と同じように感じている人はおそらくたくさんいるのではないだろうか。

確かにしばらくはどの局も予定の番組を変更して、地震に関する報道をするのは仕方ないし、当然のことだと思う。即座に日本国中にその状況を知らせてくれるテレビの役割は大きい。しかし、しかしだ、十日たち二週間もたつと、F先生の言

うようにもういい加減にしてくれと言う気持ちになってきた。水道・電気・ガスや鉄道の復旧状況などを知らせるのは必要だとしても、寒々とした体育館で



毛布にくるまっている人にマイクを向けて、「今どういうお気持ちですか?」などと分かった質問をしてどうなるというのだ。その後必

ず同情めいたコメントが加えられるのだが、それもいい加減うんざりしてくる。本当に気の毒だと思ふなら、必要以上にテレビで映すよりも他にすることがあるのではないだろうか。まさしく「同情するなら金をくれ」だよ、全く。冷たい床にしかれた毛布の間をぬってまで、テレビカメラでうつすなんて（それも一度や二度ならず、幾つもの局が毎日毎日）全く神経を疑ってしまう。

仮設住宅が建ち、入居者の抽選が行なわれると、即駆けつけマイクを向ける。当選した人の喜びの声ならまだしも、時には落選した人に、

「今のお気持ちはいかがでしょうか?」

などと殴ってやりたいような質問をいかにも気の毒そうな顔でする。

少し前になるが、あの青年医

師の殺人事件の時もそうだった。まるで数年前までのゆく年くる年状態で、どこの局もこの事件を扱っていた。「エリート医師には愛人がいた」とか「美人妻の夜のアルバイト」などまるでサスペンス劇場のサブタイトルみたいな見出しをつけて。

ここまでテレビで放映することもなかりうに思われるようなことまで、次々と暴露されていく。人が何人も死んでいるのだ。その辺に転がっている芸能人のスキャンダルと同じような扱いをしている（と私には思えた）のには呆れて物が言えない。このような報道は、次の面白そうな事件が起こるまで続くのだ。

視聴率取りのテレビ番組だから、国民の興味をひきそうなネタはとことんやるのは仕方無いのだろうか（じゃあ皆見るなよ、と制作者に言われそうだ

が、いかんせん個人個人の好みはどうしようもない）。

大震災関係の報道はまだまだ続くだろう。そして、また別の事件が起こるたび、同様の報道が繰り返されるのだ。いい加減にして！ 同情顔のマスコミ報道はもうたくさんだ！

不思議の国の幼稚園

●さいたまゆみ

新しい年度を迎えて、長女と私の幼稚園生活も半年をすぎようとしている。そう、「私の」なのだ。幼稚園という不思議な世界に母親としてかわかりあつて、驚いたことがいくつもあつた。

まず「母の会」という保護者

会の名称。名簿では園児名の隣に母親の名が併記されている。

父親は子供の園生活には関係ないといわんばかり。でも土曜日はおろか平日でさえ園児を送りにくる父親の姿を見かける（自営業の方でしょうか）。各行事にもお父さんは積極的に参加している。いまどきの父親は決して無関心ではないだろうに……。

事あるごとに母親の労力があてにされ、動員される。「どうせあなたたち暇なんですよ。子供預かってやってんだから感謝しなさい」と言われているようにも受け取れる。

また、私立の施設だから「経営」という観点がなければ成り立たない。それは承知のうえだが、運動会の前に「来年就園予定の方をご紹介ください」と五人くらい紹介欄のついたプリントが配られたりするとちょっと興醒めだ。「商売」としての幼

稚園経営。

それとなかみの問題。二カ月に一回の保育参観のほかは子供の話が園生活を知るすべでなので何とも言えないが、昼食後からお帰りの時間までは晴れなら園庭で遊ぶが、雨の日はビデオである。まあ、四十分くらいの間に母親がバラバラと迎えにくるからまとまったことができないのだろうが、保育園ではお絵書きなど自由に室内遊びをさせていた。この子供どうしのやりとりで、ひらがなや数字を長女は覚えてきた。

最後に費用。地域によって差があるようだが、東京近郊のまだ緑が残る住宅地であるこのあたりでは、幼稚園の保育料は月一万四千五百円弱である。だがそれに給食費の実費（週二回給食センター利用、平均千六百八十円）や牛乳代（券を希望者のみ購入）など含めると、一万六



千六百八十円となる。保育園の場合は各世帯の納税額で保育料が決められるが、同じ学年でうちは二万一千二百円。週五日の給食代を含めての数字である（調理は自前、おやつ二回有）。

一時間当たりで計算してみるとかえって保育園の方が六十円強割安になった（一月当たりの保育時間は幼稚園＝平日五・五時間×十五日、半日二・五時間×七日、保育園＝十時間×二十日

で計算）。保育園は市立なのでクレヨンや粘土などの教材は市で賄ってくれる。また、入園金（六万円前後）の必要もない。幼稚園では、年末に就園補助金が国と市の双方から世帯収入に応じて交付されるが、我が家の場合は市の交付金（一万八千円／年）だけだった。

保育園は働く核家族の母親には不可欠の生命線。では幼稚園は？「就学前に集団生活に慣れさせる」のが第一義的な存在意義か。確かに子供同士のかかわりは大切だが、気合と場所と仲間がいれば、質の高い集団保育も可能かとも思う。いったい何のために幼稚園はあるのだろうか。不本意ながら「保育に欠ける子」の児童福祉課管轄の施設とされる、保育園のほうが実に教育的に思える。

もっとも母親も半数以上が職も持たず、子供が登園している

間お茶飲みなどで過ごすのでは、幼稚園は現状の「一時幼児預かり所」でかまわないのかもしれない。運動会の母親参加の競技に出場者を募る際、「普段とは違って、こういう時こそ子供に一生懸命な所を見せましよう」と役員さんが呼び掛けたのには驚いた。ほんの冗談かもしれないが、これが真実なら、子供はこんな母親を見てどう思うだろうか。

以上は私が体験したごく狭い範囲の出来事についての感想。同じようなあるいは反対の事例があれば、ぜひ伺いたく思っている。

最近是不思議に思うことも少なくなってきた。慣れだろうか。それになんだかんだ言っても、春休み真っ最中の今、幼稚園が休みで私はやっぱりうんざりしている。

（元・田村幹代）

おすすめの1冊

ムーミンの冒険日記シリーズ

(ムーミンコミックス)・全十巻

トーベ・ヤンソン 作 野中しぎ 訳

山口県下関市 深田加奈

童話やアニメで有名なムーミンに、コ

ミックスが出ていることをご存知だろうか。虫プロのアニメのムーミンで育った私には、このコミックスとの出会いは感動的だった。

「ムーミンの冒険日記(ムーミン・コミックス)」は、トーベ・ヤンソンと彼女の弟ラルス・ヤンソンの共著で、以前英国の新聞に掲載されていたものだ。原作の童話とはかなり内容が異なるが、原作に劣らず、ムーミンの世界を楽しむことができる。もともとトーベ・ヤンソンは画家なので、ムーミンをコミックで表わすのも得意とするところだったのだらう。一コマ一コマの絵はとても丁寧で、

コマの片隅の小さな生き物までに愛情を感じさせられる。

巷に氾濫する多くのコミックとは一線を画して、格調高く知的でユーモアは第一級だ。コミックとはいえ、大人が読んでも十分読みごたえのある作品だ。

キャラクターは皆個性的で、ミイは私たちが知っているミイよりも、もっといじわるで過激だし、ムーミンはいっそまがぬけていて楽しい。次から次へと登場するヘンテコな人々をムーミンパパとムーミンママは、「変ねえ」と言いつつ受け入れてしまう。この感覚は日本人にはあまりないものかもしれないあと、うらやましく思う。



野中しぎの訳もハイセンスだ。「ワイン、ノムノム」「ゴハン、タブタブ」の名訳のニョロニョロ語は、ただ今我家で流行中だ。

本のがきが、また素敵だ。トーベ・ヤンソンのフィンランドでの生活ぶりなど紹介しているのだが、彼女の優しさ、可愛らしさを深く知ることができる。

ムーミンの世界にひたり込み、登場人物たちとお祭り騒ぎをするたびに、私は一人ぼっちではないことを思い出すことができる。

ベネッセコーポレーション(旧福武書店)

● ——— おすすめの1冊

1冊 1100円

奥園壽子のごはん料理ありったけ

奥園壽子 著

川崎市宮前区 水落時子

この本を読みながら考えました。結婚して二人がともに働いているときは、外食も多く私は料理好きの主婦ではなかったなと。

子供が生まれ、離乳食を食べさせるころから、「離乳食の作り方」「おやつ作り方」など、本を買ってきて読むようになり、手持ちの料理の本が増えはじめました。料理が好きになったわけではないのですが、子供の存在が料理に目をむかせる事になったのです。

とりあえずレパートリーを増やすには、本を読んで作りこなすことが、一番の近道でした。

これらの本はきれいなグラビアの写真に、材料、分量、作り方が羅列してあるものが多く、本を書いた人の息吹など感

じることもなく、ましてや内容が楽しくて読むということはありませんでした。

料理の本は、おいしい料理のできあがるまでのレシピが、わかりやすく書いてあれば、充分に機能を果たします。おもしろい読み物である必要はないのですから。

しかしこの本はちょっと違います。それぞれの料理にまつわる話が、作り方の前に書かれていて、飽きずに読めます。作り方をそっこのけで引き込まれてしまいました。

作者は三十歳代で幼い二人の子供を持っています（もちろん夫もいます）。

この好き嫌いのある二人の幼子たちに食べさせるための工夫、自分の子供時代の話、料理の由来など、紹介した料理に

関しての、もろもろの話が軽快なタッチで書かれています。この小さな文は、紹介された料理がより身近に感じられて、ちょっと作ってみようかな、と思わせてくれます。

もちろんご飯料理の本ですから、米の保存法、米の洗ひ方、炊いたご飯の保存法など、ためになる話もちゃんと載っています。昔ながらの「かしわめし」や「キノコごはん」、おもいがけない取り合わせの「ミカン寿司」や「カボチャもち」など六十種類のご飯料理の作り方が、楽しい文と豊富な挿し絵とともにわかりやすく書いてあります。

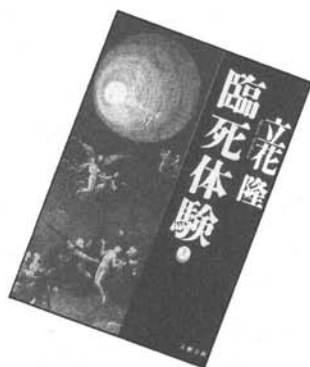
農山漁村文化協会 一三五〇円



臨死体験 上・下

立花 隆 著

新潟県中蒲原郡 小林智枝



人が死んだらどうなるのだろうか、誰もが一度は考えたことがあると思う。私は埋葬されたら「無」だと思ってきたし、魂や霊の存在にも懐疑的だった。しかし数年前、テレビや新聞で見た臨死体験に興味をもっていった。だから分厚い上下二冊をどうしても読みきろうと思った。

その臨死体験とは、人が死の淵をさまよったとき、苦痛から解放されて暗いトンネルを上昇し、光り輝く花園を歩いたり、三途の川を見たりするが、呼び戻されて生き返るという体験がある。また体外離脱といって、肉体から意識だけが抜け出るといふ現象もある。その内容は人

により異なるが、ほとんどの体験者が、そこは気持ちのいいところで、ずっと居たかったし、死ぬことが怖くなくなり、よりよく生きようと思うようになったと言ふ。

論客の著者は、科学的に解明しようとして、世界中の体験者や研究者、学者をインタビューして回る。しかしどうしても証明できない。

基本的には死後の世界を体験したのだとする「現実体験説」と、脳内に生まれたいメージにすぎないとする「脳内現象説」とがあり、著者は脳内現象説が正しいだろうと考えながらも、現実体験説が

正しいかもしれないと、そちらの説にも心を閉ざさずにいる。脳科学が進歩すれば、もっと分かってくるようだが、想像もできないような現象があるようだ。

読みながらわくわくしたり、空想したりして、少なからず私の考えは揺れた。「死後の世界や魂などの、四次元の世界があったら面白そうだな。脳はどうなっているのだろうか……」と。

不思議な世界をたっぷりと楽しむと同時に、著者の知力とエネルギーに驚かされた。

文藝春秋社 各一八〇〇円

戦

後

50

年

記

念

連

載

一

私と英語

横浜市港北区

酒井智恵子

敗戦

昭和二十年（一九四五年）八月十五日、日本は無条件降服！

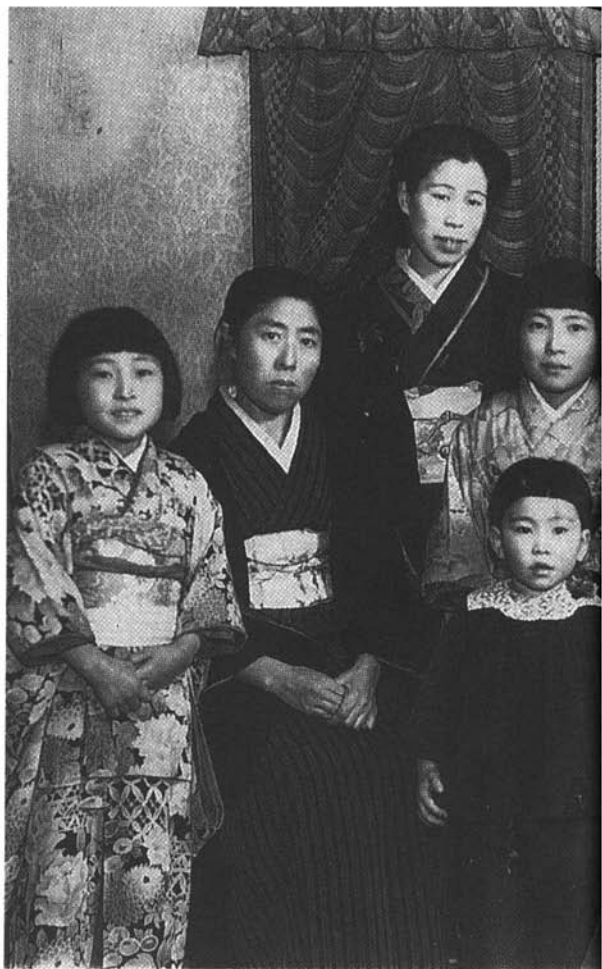
前日、工場から帰ると、父が姉と私に「明日は家にいるように」と言った。

その日、一家四人はラジオの前で直立不動の姿勢を取り首を垂れた。

「朕深く世界の大勢と帝国の現状に鑑み……時局を收拾せむ……堪え難きを堪え、忍び難きを忍び……」

初めて耳にする天皇陛下の声だった。とぎれとぎれに聞こえる。私には何を伝えているのか分からない。放送





昭和14年正月の家族写真。左端が私

が終わった時、父が「戦争は負けたよ」と言った。

「まさか!」

「負けるなんて、第一神風が吹いていない。どうして。どうして」

「そういえば、朝から妙に静かだった。聞こえるのは油蟬の声ばかり。」

この時、何も彼もが音を立てて崩れたのだ。戦いに勝つことを前提にし

て、すべての物事は運ばれていた。敗戦直前の新聞は現在の新聞の半分の大きさのタブロイド判だったのに、小さな紙面は戦争をたたえる文字で一杯だった。国民は指導者の言うことを信じこみ、新聞活字の魔力にとりつかれてしまっていた。

その時、私は十五歳。軍国教育をたっぷりそがれた身。今更「戦争は

負けました」と言われてもキョトンとするばかり。時代の標語「撃ちて止まん」に躍らされ、土壇場には神風が吹いて敵を倒すと本気で思っていた。事態がこれほど深刻になるとは。日本はにっちもさっちも行かなくなっていたのだらう。軍部はそれを隠すのに懸命だったのだ。五年前には日独伊三国同盟が結ばれていたが、同盟国のドイツもイタリアもとくに負けていた。

婦女子への避難勧告

玉音放送のすぐ後、「婦女子は避難するように」の回覧板が回ってきた。

これは神奈川県知事藤原孝夫が、婦女子が進駐してくる外国兵士から辱められることを恐れ通達したのである。空爆のさなか都会で踏ん張っていた人も、どんどん逃げ出した。逃げる先のある人はいいい。どこへも行かぬない姉と私は、岡山県に疎開している上の姉の所へ逃げようと横浜駅に歩いて行った。

横浜駅前広場（現在の駅東口、ルミ

ネあたり）は、切符を買いにきた人たちが、蛇がとぐろを巻くように列を作っていた。そのころの切符は、よほどの手づるがなければ入手出来ないことは分かっていた。「それでも、もしかして」の一縷の望みをかけ集まっていたのである。結局、切符は手に出来ず、姉と私はスゴスゴ家路についた。

進駐軍来たる

アメリカ軍を主力とする連合軍の日本進駐は八月二十八日と決まった。

連合軍最高総司令官マッカーサー元帥は海軍の総司令官ミニッツと共に「いざ来い。ミニッツ。マッカーサー。出てくりや地獄に逆落とし」と軍歌に登場した有名人である。

へ一体これからどうなるのかへ

一抹の不安は隠せない。父は姉と私に蟄居命令を出した。戦後も何年も経って知ったのだが、父はこの時、すでに岡山に疎開している姉に妹二人そちらで預かってもらえないかと手紙を出していた。しかし姉には「どうぞ」

と言えない理由があった。戦争未亡人の姉は三人の子どもと、亡き夫の家で世話になっていただけでもあり、断りの手紙を書くしかなかったという。

母は進駐軍が地元、横浜にくるからと、僅かに蓄えていた小麦粉や味噌、とうもろこしの粉などのなけなしの食糧を座敷の畳を上げて床下に隠した。

それからは、食事の時間がくる度に、姉と私で畳を上げ、母の指令する食べ物をチビチビ取り出した。空腹の身には畳は重い。しかし、床下に首をつっこむと、どこからともなく、ひんやりした空気が流れてきて、汗ばむ顔にありたり気持よかった。

占領軍は市内中心部に来たものの、何の混乱も起きない。まして民家に侵入して食べ物など持って行く訳はないと気付いた母は、床下に隠した物を元に戻した。

年ごろの姉と私にとって、占領軍は依然として不気味な存在だった。

家の中で四六時中過ごす私は、この時とばかり父の書棚から「モンテ・ク

昭和17年冬。この校舎は20年5月29日の空襲で焼失した



リスト伯「レ・ミゼラブル」「ボヴァリー夫人」などの世界文学全集を手当たり次第読んだ。難しかったが、大人の世界に入ったみたいで楽しかった。

アメリカ兵を恐れたのは家だけではない。戦後、四十年も経ってクラス会で会った友の一人、鈴木恵美子さんの家では娘をかくまう木箱を大急ぎで作ったという。「それが今じゃアメリカ人の妻よ」と国際結婚して陸軍大佐夫人となった彼女は、コロコロ笑って屈託がなかった。

もう一人の友人、Tさんは学校再開の時、くりくり坊主頭で登校した。父親が嫌がる彼女の頭を無理矢理刈ったという。胸もまだ膨らんでいない彼女は正に「可愛い男の子」。

はじめ、横浜に進駐してきたマッカーサー元帥は、間もなく総司令部を東京の皇居前に移した。その直後、天皇陛下がマッカーサー元帥を訪ねられるという大ニュースが流れた。

天皇陛下はモーニング姿で「戦争の責任は私にある。この身はどうなってもよいから、どうか国民を助けていただきたい」とマッカーサー元帥に懇願して下さった。この救援の要請のお陰か、それから間もなく米軍の缶詰が隣組を通して配られた。カーキ色の缶詰の中のソーセージやコンビーフのおいしかったこと。目の敵にして戦った相手は鬼でも蛇でもなく豊かな国の人を知って驚くばかり。

ヤミ市

復興のつち音は市内に響き渡った。

私の住む町六角橋は、市の中心から外れていて、大部分が戦災を免れた。そこで人々が押し寄せ町の人口は膨らんだ。

白楽駅前の焼け跡にまず露店のようなヤミ市が出現した。それは次第に坂を下りてきて、強制疎開で出来た空き地に伸びていった。そのほとんどが黒焦げの柱に焼けトタンをはぎ合わせただけの、バラックの店だった。軍隊の階級章をもぎとった復員婦りのおっさんや、ひげ面の予科練崩れの若者たちが「らっしゃい。らっしゃい」と客を呼びこんでいた。ヤミ市には正規のルートでは手に入らない日用雑貨、野菜、そのほか何でも並んだ。値段はとびきり高い。

食糧事情は戦中より悪くなってしまうた。

お米の配給も戦争終結の一カ月前には成人男子一人当たり、一日二合三勺だったのに戦後は二合一勺に減らされた。カロリーでは一日成人千二百カロリー。それさえ予定通りに配給されな

い。運配はやがて欠配に。仕方なくヤミ米を買う。そのころ、副食はほんの少ししか取れなかったから、主食の欠配は生死にかかわる一大事だったのである。

近所に住む子だくさんの家の主婦が栄養失調で倒れた。死に顔が青ぶくれしていたことから餓死したらしいとのうわさが立った。

又力団子

インフレは敗戦と同時にじまった。それはあたかも病人の熱が下がらず、どんどん悪くなって行くのに似ていた。敗戦は国民の一致団結の結束を外し、自分の利益さえ上げればよいの風潮をもたらしした。

このインフレは米の値段を追っていても分かる。戦中に一キロ四十銭くらいの白米は、昭和二十二年（一九四七年）正月にはヤミ値で百倍に。その半年後はその倍となっている。

銀シャリと呼ぶ白米は、農家に親類縁者もない我が家の食卓に、戦後何年

ものつたことがなかった。

母は相変らず食べ物をかき集めるのに余念がなく、時々簞笥から着物を取り出しふるしきに包んで、近郊の農家に物々交換に行こうとしているのを見えていた。せっかく行っても実りはなし、がっかりした表情で帰ってくるが多かった。

ある日、浜から鰯を売りにきた。母が買った鰯は鍋の底に六匹一列に並んでいた。母は七輪コンロでジュウジュウ焼きながら、「鰯が六匹で十円なんて高い」と悲鳴にも近い声を上げていた。このころの女学校の月謝が六円と記憶している。それが戦後二カ月も経たない内に、十円で鰯六匹は異常だった。

細長い外米がチラチラしか浮かない雑炊。水気の多い雑炊は、はしを立てるとすぐ倒れた。小麦粉を水で硬めに溶くすいとん。豆粕、ふすま。ふかすだけのさつまいも。庭の垣根に自生するヤマノイモの葉の付け根にできる小さなムカゴまで目こぼしのない

ように取った。

切羽詰まった時に母が作ったヌカ団子がある。米ヌカに少量の小麦粉を混ぜ水で溶かし、団子に丸めて蒸して出来上がる。この団子はいくら空腹でも、お世辞にもおいしくなかった。「ひもじい時のまづいものなし」とギリシャの哲人ソクラテスは言ったそうだが……。

占領軍がどつと地元に来てからは、基地の調理場から出る残り物を集めて、焼け跡にドラム缶を置き、煮立てて「栄養スープ」と名付けてどんぶり一杯五円で売り出す商売がはじまった。人々はそれに群がった。私も一回食べた。それは名状しがたい味だったが、久し振りの油っこさをおいしく感じた。

同じく基地から出るジャガイモの皮も売り出した。信じられないほど分厚く、皮むき器でむかれていた。それを蒸して、歯で皮にへばりついたジャガイモ（の中身）をこそげて食べた。

このような食糧不足の世に新たな大敵が現われた。大切な体の栄養を吸い

とる回虫である。私たち家族はせっせと虫くだしを飲んだ。

特殊慰安婦急募

秋風が立ちはじめた九月の半ばごろから、私の住む町にも米軍のジープが「さあーっ」と馳けぬけるようになった。

それまでひたすらひきこもっていた私も、ぼつぼつ外に出るようになった。ある日、市電の終点近くで電信柱のうに背の高い一人のアメリカ兵と出くわした。たじろいだ私が見上げると年も余り達わない若者だった。舟型の帽子をかぶり、口をくちやくちやさせ悪気のなさそうな顔をしていた。

それから間もなく、東横線桜木町駅近くにある父の勤め先に用があり、戦後初めて東横線で桜木町駅に降りた。駅近くの辨天橋を渡った時、小さな貼り紙がふっと目に入った。「進駐軍向け特殊慰安婦急募」と書かれていた。へ一体何？ 特殊慰安婦って？

十五歳の少女には、まだ大人の事情



2年5組の記念写真。真ん中の武村先生は出征し、戦死された。前列左端が私

が分からない。それでも、何か薄らば
んやり分かる気もした。

帰ったら母に聞こうと思い、その場
を離れたが、実際には聞けなかった。
年ごろ特有の恥ずかしさが質問をひっ
こめさせた。「慰安婦」は私にとって
長い間の謎だった。

学校再開

学校が授業を再開するとの貼り紙を
見たのは九月の末に乗った市電の中で
あった。その知らせは、自分がまだ学
校に在籍する生徒であったことを思い
起こさせた。

あまりの目まぐるしい環境の変化
に、とんと学校のことなど忘れてい
た。

学校再開の十月一日、生徒は三々
五々学校に集まってきた。

校舎は灰になったとは聞いていた
が、私が登校したのはこの時が初めて
である。若い国語専任の、武村先生が
出征なさるのを励ました講堂も、茶巾
絞りを作った割烹室も、薙刀かみばたを振り回

した雨天体操場も消えていた。残って
いるのは土台だけで、土台に沿ってペ
ンペン草が生えていた。入学した時は
ころびかけていた校庭の桜の木も半分
こげていた。目を南の崖下にやると、
焼け残ったコンクリートのビルの外壁
は火にあぶられた跡を残していた。

「あなたも無事だったのね」

「けがしなかった？」

生徒動員で離ればなれになった友と
抱きあった。

この日、学校に集まったのは八百五
十名だった。学校では本科生だけでも
千二百人いたから、ずい分多くの生徒
がどこかに散ってしまった勘定にな
る。私たち四年は三組に分けられ、学
校近くの松ヶ丘にある佐藤校長宅と、
隣に住む音楽教師小川幸子先生のお宅
で一日置きの授業再開となった。佐藤
校長の家での教室は八畳間だった。私
たちは配られたざらざらの藁半紙わらはんしを膝
に置いて勉強をはじめた。この先、ど
うなるかも予測出来なかった戦時中
に、ところてん式に最上級生になった

私たちには教科書も用意されていなかった。

小川先生宅ではグラランド・ピアノの前に声高らかに歌った。「秋の七草」の歌を。

流るる雲の色にさえ

秋は来にけり。野に山に

桔梗、糸萩、藤ばかり

風にそよぎて咲きそめぬ

軍歌を歌った壕の中、戦いすんで柔らかな秋の陽光を浴びて歌う自然の歌。もう軍歌を歌わなくていいのだと思うと涙がこぼれた。

仮校舎

先生方の自宅での授業は十一月十二日まで続き、次に学校で用意した仮の学びやに移ることになった。東横線菊名駅近くの天野製作所構内にある「青年学校」と呼んでいた建物だった。そこは戦時中、地方から動員された青年たちが昼間は工場で働きながら学ぶ所で、敗戦後は空き家になっていたのがある。

建物の外観は敵機の目をこまかすための黒と黄色の迷彩色にぬられていて、一見、立派な校舎に見えたが、二階へ上がって驚いた。壊れた天井からは青空がのぞいている。機銃掃射の跡か、不発弾が屋根を突き破ったのだろう。窓ガラスも満足なものがない。

雨の降ったあくる朝、日直にあたると先ず床にたまった雨水を雑巾で吸いとらなくてはならなかった。大雨の日には、天井にあいたあちこちの穴から雨が降りこみ、傘をさして勉強。雪の日には、こわれた窓のすき間や天井から粉雪が吹きこみ、机の上に広げる薄っぺらの弁当にうっすらと雪が積った。

小春日和の休み時間は、廊下の日だまりで団子虫のようにかたまり、互いの体温で暖をとった。ものすごい環境にありながらも、不平などという人はいない。ただ命の助かったことを喜び、新生日本を夢見たのである。

私たちのクラスにも地方からUターンする人が日を追って増え、教室内で

は再び会える喜びが渦を巻いていた。その中に長田としこさんもいた。勤労動員先の爆発事故でけがして、片足を失った渡辺節子さんも杖をついて復帰した。

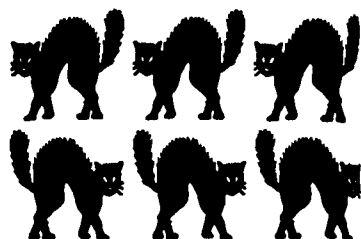
授業再開といっても、これといって何かを勉強したということもなかったが、英語だけは復活し、活気づいた。私は英語組にいたが、大半の人が初めてのようなもので、またABCからのやり直しとなった。

ラジオでも平川唯一先生の英会話番組が「証城寺の狸ばやし」の曲に合わせて「カム・カム・エブリボディ」のテーマソングを流し人気を集めた。これとは逆に軍国主義のシンボルのようになってしまった薙刀は、もはや出る幕もなく、薙刀の馬場先生は「このような時代となったので……」と言って黒いひとみに涙を浮かべながら去っていかれた。

つづく

（写真提供・筆者）

サーブレシーブ



いじめを考える

千葉県船橋市 由美あき子（36歳）

「わいふ」二五二号が届き、いの一審に特別寄稿「いじめ」を読んだ。私にとっていじめは他人事ではなく、まさしく自分の問題そのものだった。

二月十日付朝日新聞に「愛知いじめ自殺、大河内清輝君の遺書に記した四人の中学二年生を恐喝の疑いで書類送検する」とあったが、昨年十一月末に自殺事件が起きて二カ月以上も経て、やっと書類送検だ。加害者四人は恐喝した現金をカラオケやゲームの遊びに使ったと供述したという。

こんな彼等のために大河内君が十三歳で命を終えてしまったことに涙が止まらなかった。

私も中学二年の転校先でいじめに遇い自殺を真剣に考えた経験がある。当時は今みたいに登校拒否の生徒を受け入れてくれる場所もなかった。一方的にいじめられる側に全て原因があると見られていた。私はただただ卒業式までを待ち続け、必死で孤独に堪える日々だった。中学での二年間はまるで悪夢のようだったが、当時死からぬけ出せたのは家族の愛情と「こんな事で人生を終えてたまるか!」という怒りに似た思いがあったからだ。当時の私には保健室が唯一の逃げ場所で駆け込み寺的存在だった。が保健の先生は私の味方ではなかった。

早引けすることもあり何処かに寄り道しているわけでもないのに、見ず知らずの小母さんが「もう学校終わったの?」と声をかける。「うるさいな」と当時は思ったものだが、二十年前には口うるさい小母さんは何処にでも居た。親や先生だけではなく忠告してくれる人が居たことで、道徳観念モラルが身に付いた気がする。

息苦しい中学を卒業し高校進学は出直せるチャンスだ。二度といじめに遇いたくない、友達を作り楽しい三年間を送りたい思いでいっぱいだったが、いじめには遇わなかったものの友達作りはできなかった。心を開いて話しているつもりが心が閉ざすことに慣れてしまっていたからだ。いじめの後遺症なのか? 高校の三年間が終わる。

短大へ進学した時は今度こそ楽しい学生生活を送りたいと思った。さすがに全国から生徒が集まるし、急に大人になったような気分ですべて関わっていった。やっと自分らしさを取り戻し、色々な物事に對しても意欲がでて生きてよかったと痛感した。充実した短大生活、そして人並みに恋愛をし、結婚出産を経ておさない子を育てる毎日を送っている。そしてただ今新しい命が宿り育っている。

いじめを乗り越えた私も、今度は愛児がいじめに遇い死を選択したら!と思うと怖い。でも戦う。我が子の寝顔が死に顔にならないために。

伊藤琴子さん 批判に思う

名古屋市守山区 柳澤幾美 (37歳)

「わいふ」二五〇号の伊藤琴子さんの特別寄稿に對する二五一号の幾つかの反論や意見に続き、二五二号では「天皇と私」とい

うテーマでの「女の時事放談」の内容が掲載された。そこでも、伊藤さんの投稿について、多くの批判や疑問が出て、ある人はかなり厳しいことを寄せている。

この一連の、伊藤琴子さんに對する批判を読んで、同世代の者として、私は敢えて彼女の擁護をしたいと思う。

まず、伊藤さんの投稿は、学会発表ではない。あくまで「わいふ」が一般の人の投稿雑誌という前提で書かれたのだということである。アメリカの大学で社会学を教える教授という立場ではなく、むしろ三十代の普通の女性の立場から、素直な気持ちを真つすぐ表わしたものである。つまりこの文は、「天皇に對する社会学的考察」ではない。強いていえば、「天皇、皇后という超有名人に会った感激」とでもなろうか。

ちょっと思い出してほしい。有名人と呼ばれる人に会ったことはないだろうか。そのとき冷静なふりをしていても、何かが踊るのを感じなかっただろうか。ましてや、自分のお気にいりの人であれば、なおさらであろう。

いわゆる「みいはあ」な気持ちというの

は誰にでもあるものではなからうか。たとえ、どのような学識のある人であっても、また、その人自身が有名人と呼ばれるような人であっても、本当に素直な気持ちを顧みると、「みいはあ」な気持ちというのは、どこかに絶対隠れていると私は思う。

ただ、学識がある人ほど、自分の中の「みいはあ」をひたすら隠そうとするらしい。それは、エリートの中では、受け入れられないものである。

作家の村上春樹氏が自身のエッセイ、「やがて哀しき外国語」の中で述べていたが、彼の通っていたアメリカ東海岸の大学の学者たちとの付き合いの中で、受け入れられることと受け入れられないこと、つまり彼のことを借りれば、「コレクト」と「インコレクト」がはっきりあると書いていた。これは、どこの社会でもある程度あって、エリートとされている集団ほどあると思う。社会的なことはといえば、「集団ナルシズム」というものである。

しかし、大学の教授であっても、その前にひとりの人間である。お気にいりの映画スターや、あるいは小説家などがいても

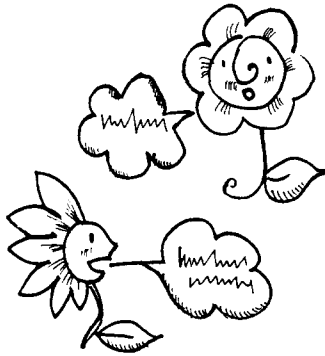
ちっともおかしくない。そして、自分の大好きなそういう人たちは、その人にとって「神様」みたいな存在とも言えないだろうか。

伊藤さんが大学の教授という立場を離れて、スター以上に有名な天皇、皇后に会って非常に興奮したということを、こうやって活字にして発表することは、実は非常に勇気のあることである。私はむしろ彼女の素直さやむじきさを讃えたいと思う。以前の伊藤さんの投稿によれば、伊藤さんと皇后は、同じ誕生日ということで、また格別の気持ちもあったに違いない。

もうひとつは、伊藤さんは天皇、皇后に自分の戦場ともいえるべき、アメリカで会っている。時事放談の中で、荻野さんも触れていたが、欧米にいて日本人が自分のプライドを保つというのは、日本で考えている以上にたいへんなことである。

欧米でくらしただことのある人ならわかると思うが、アジア人というのはどうしてもランクがひとつもふたつも下に見られがちである。たとえ大学の教授であろうと、いつも頭を上げて、肩を張って歩いていなければならぬ。

それはならない。そんな中で、ひとつでも彼らに誇れることがあれば、声高に主張したいものではないか。つまり、国内にいるときと、微妙に天皇、皇后に対する気持ちが違ってくるということである。



彼女が「天皇は神様」と書いたことは、確かに言い過ぎであるかもしれないし、戦争でひどい目に会った人々にとっては、ぎくっとすることはある。しかし、それ

も、彼女自身にとっての憧れの頂点であるという、誠に素直すぎる表現であるのかもしれない。

和田副編集長も時事放談の中で言っていたが、戦争中も田舎では戦争という強い意識がなかったのは事実である。私の育った三重県の山間の村では、空襲があったわけでもなく人口も少ないので戦争に行った人もあまりいなかった。また、ほとんど自給自足であったので食料が不足することもなく、実際戦争といっても遠くのできごとに近かったという。

だから私の両親なども、戦争後もとくに天皇について意識もしなかったようである。そのような環境で育った私自身、天皇、皇后に対する強い反発のようなものは、少ないと言わざるを得ない。

伊藤さんも、もしかしたら、そのような田舎で育ったのかもしれない。日本全国津々浦々まで、戦争で同じ被害を受けたのでもないし、また、天皇、皇后に対する考えも一定ではないのではなからうか。

いずれにしても、伊藤さんの投稿は、天皇についての彼女の意見とはまったく違

う。遭遇した感想を書いたものである。しかもこの文は、遭遇してすぐ興奮のさめやらぬ間に書いたもののようである。そういったことを頭に入れてもう一度読むと、彼女の主題が「天皇は神である」ということではないことがわかるはずである。

天皇制と部落差別

愛知県刈谷市 横山昭子

一二五二号の時事放談で私にとって一番衝撃的だったのは、「天皇に象徴される身分制度の容認が差別につながるんだと、みんな判で押したように言うんですよ。それって、かなりインチキなんじゃないかって気がします。(略) 天皇制を容認する人は必ず部落差別をするだろうかと」という発言である。衝撃を受けたということは、私にとって勉強になった、新しいテーマを与えられたということでもある。私は天皇制は部落差別の根源であると思っている。し

かし、上記発言に対して有効な反論をすることが私にはできないと感じて、ショックだった。

ところで、この発言を読んだとき私が思い浮かべたのは、女性差別についてよく聞く男性のことばである。たとえば、「男と女は明らかに違う。女が男と同じにと望むのは無理だ。だけど僕は女性を差別したりしない」この男の人が女性を差別しないと信じられるだろうか。

「天皇制を容認する人」とはどういう人だろうか。「部落差別をする」とはどういうことだろうか。「天皇に象徴される身分制度の容認」をする人が、部落差別をしないということがあり得るだろうか。天皇を頂点とする身分差があるのに、部落差別だけなくせるだろうか。部落差別を残しておいて、「私は部落差別をしてない」ということはあり得ないと、私は思う。部落差別をなくするための行動をとるか、部落差別をなくする論理を考え出すのでないかがり、「自分は部落差別を容認している、つまり差別している」と自覚すべきだと思う。しかし、このように責めても、和田さん

のおっしゃる通り、天皇制をよしとする考えを論破したことにはならない。「天皇制がなくなったら日本人の道徳観念が根底からくずれてしまうのではないか」と問われたりすれば、私は答えに窮してしまふ。勉強が足りない。

T・イーグルトンが、英国中産階級の意識について、「もし下層の人間たちが、自分の不平不満を忘れ去り全体の利益のために一つにまとまってくれたなら」と皮肉るごとく、支配者は人民が何の不平もなく暮らしてくれることを願っているわけだ。天皇制は有効である。私たちにできることは、自分たちがどのようにして支配されているのかを知ることだ。しかも、天皇制による支配のしくみを知った上で、次にそのしくみを壊すことへの恐怖と闘わねばならない。私たちは天皇制による秩序の抱える問題を知りつつ、その秩序に拠って生活しているから。

ちなみに、天皇制が部落差別の根源にあるという点については、網野善彦・上野千鶴子氏らの鼎談「日本王権論」や網野氏「異形の王権」がおもしろい。「日本王権

論」の末尾で上野氏は、天皇制はなくならず、日本の国際化はないと語る。網野氏は、いずれ天皇制は博物館行き、天皇は消えると語る。

“わいふ”の言論の自由

大阪市旭区 宮崎貴子

二五二号の「女の時事放談」の中で和田副編集長の「とにかく論議を呼びそうなのは全部載せる、(中略)論議を呼んで、その結果いい話が出てくるようならば載せる」という言葉に私はまさに目から鱗状態となった。

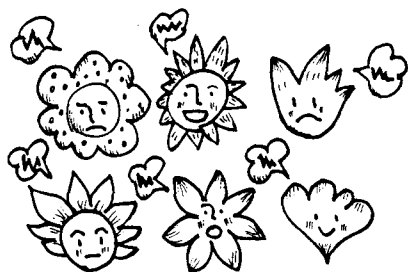
それまで私は“わいふ”は本音を言いあえる言いたい放題の素敵な場だということは分かってはいたが、どうもその本音というのを少し履き違えていたというか、誤解していたようだ。

私が幾度か掲載されたのは、きっと同じように考えている人がたくさんいるに違いない。

なく、そしてそれを私が代弁しただけのこと、皆が怖くって言えなかったことを飾らず述べただけだからだと勝手に解釈していた。今まで水面下に潜んでいたが、実は理に適った正しい意見、きつとたくさんの方が共鳴してくれる意見だと自負していたのだ。しかし“わいふ”はそんなちっぽけな器ではなかった。

はっきりに言っておく二五〇号の伊藤さんの投稿にはびっくりしたし、それを特別寄稿として載せた“わいふ”にも驚いた。そして“わいふ”のスタッフは天皇崇拜派？なのだと決めつけてしまった。いつも素敵な文章を書いていらっしやる伊藤さんによって、天皇の素晴らしさをうまく表現された花マル投稿とスタッフは評価したのでろうと。でなければ伊藤さんの投稿は没になっただけに違いないから(伊藤さんの投稿は考え方の相違などでは片付けられないと私は思っているのだ)。

そして二五一号のサブレシーブにおける葉田野さんの投稿は、サブレシーブとして無視するわけにはいかない中身の濃いものだったから掲載されたのだろうと思



込んでいた。だから葉田野さんの投稿を見てもやっぱり私は、“わいふ”のスタッフに對するがっくりした気持ちをぬぐいさることができなかった。

しかし「女の時事放談」を読んでそんな気持ちはいっぺんにふっとんだ。和田副編集長の「偏ったもの、宗教の宣伝に関わるようなものであっても(中略)載せる」という言葉に、中途半端でない言いたい放題に

徹した姿勢に感銘し、まだまだちっぽけな自分が恥ずかしくなった。今度こそ「わいふ」がどんな雑誌か骨の髄まで分かった気がする。

最後になりましたが、豊城さんの中学時代の先生の言葉、私在家でいつも言っていることなので、すっきりしました。こういう過激な部分でさえカットされない「わいふ」は最高ですね。

特集「うちの子のおばあさん……」を読んで

東京都渋谷区 大塚広子

ほのぼのとした祖父母と孫の関係、物分りのよい両親に恵まれたハッピーなお嫁さん、すんなり読みすこせば問題はないが、まてよ……と思えば、非常に気になる内容だ、というのも、私の回りにも孫持ちの方がかなりいて、これに近い話はよく聞かされる。

日ごろ、女性問題など声高に語り、諸々

の活動リーダーをしている仲間が、突如「来期の役は降ろして欲しい」などと言われることがある。理由を聞くと必ず娘が出産するための「育児休暇」(?)だのたまう。

嫁がせた娘夫婦を自宅近くに引越させ、産前産後の面倒から保育園の送迎まで、約一年間は「昔とったきねづか」で頑張る。時には孫同伴で会合に出席し、孫との甘い関係を仲間に嬉々として披露する。

娘が仕事を続けていくには、これくらいの援助をしなければ「可哀相で見えない」とか、「孫は自分の子供より何倍も可愛い」と孫を持たない私などには到底理解できないことをおっしゃる。どうして自立している娘夫婦の生活に援助という名目で介入するのか。

私達の世代が賢明な両親?を演じることが、逆にお互いの自立を阻み、また社会の仕組みを不変なものにしていることに気付かねばならない。

この一年「国際家族年」ということもあって、家族のあり方について色々考えてみた。中でも一番やっかいなのが親子関

係のようだ。

子供は親に甘え、親は子供に甘え、社会がこの親子関係に甘えている日本社会では、真の自立など望めようもない。欧米社会のように保育や老人介護の問題も社会の責任となれば、お互いに自立した平らかな関係となるのではないだろうか。

親子、夫婦共に自立した関係の中で人間的な絆を大切にしたい生き方をしたいと願っている。

今回の特集を読んで、まだ日本の家族観の中にしっかりと「……ちゃん孝行しいや」の精神が存在しているような気がしてならない。

お下がりバンザイ

千葉県佐倉市 望月千枝 (32歳)

二五二号の稲垣さんの文を読んで、意外な思いでした。愛情〓物を与えることではないという常識はすでに確立していると



思っていたのです。

「近所のおばちゃんには経験に裏付けられた自信がおりななのでしょうが、まだ使える物を捨て、欲しがるままに着飾らせながら、子どもを健全な経済観念を持った人間に育てることは、私にはできません。稲垣さんもきっと、ご自分がまちがっていないということがわかっていらっしやる

と思います。末のお子さん、本当にいじらしくて可愛いですね。お下がりを使うお姉ちゃんを見て、自然に物を大切にする心やありがたみが身に付いたのではないでしょう。二番目のお子さんは、お姉ちゃんばかりが新品を買ってもらったのを見て、自分が差別されていると錯覚を起こしているのでしょうか。私も小さいころそうでした。

小さいうちは、物を与えられることと愛されることとの区別ができませんから、子どもにはその所をしっかり教えなければと思っています。これは、欲しい物が手に入らないことを最大の不幸ととらえる若者や、罪悪感もなく万引きをしてのける子どもたちの増加と決して無縁ではないと思います。ま、「物くれる友はよい友だ」と兼好法師も言っているくらいですから、昔の子どもである私たち大人も気をつけなくてはなりません。

大体、今の日本では物の寿命が短かすぎます。このままでは本当にバチが当たりますよ。我が家では、子どもの服はお下がりはもちろん、親の着古しをリフォームして着せています。思い出の服が生き返って

ちよこちよこ歩いているのを見るのはいい気分です。姑のウケもいいし。

「神話」は心の中に

千葉県柏市 河野道子（32歳）

「三歳児神話の壁」を一読した。この人は自分で自分の首をしめている。三歳までは母親の手でなんて、根拠がないことは多くの文献で紹介済みである。この「神話」に脅かされながら迷いつつ仕事をしている母親など、私の周りには存在しない（だいたいそれなら働き出さない）。三歳までの一年の幅についてのくだりなどは、筆者自ら認めている通り本当につまらない繰り返り言に聞こえる。

確かに幼児を抱えて働くのは楽ではない。仕事が忙しいときに限って熱は出ずし、残業もままならない。はじめに保育園から何から段取りを整えるのもまた大変なのである。

そんな苦勞をするのなら家にいたほうがいい、それもひとつの結論だ。そうしたときの弁解として神話は実に有効に機能する。それは筆者も承知のうえだ。下の子が三歳でいるのもあと一年半、それを過ぎれば神話は機能しなくなる。「長い道のり」と書かれているが、実はそこまで自分の身り振り方について結論をだす自信がないのでは、と穿った見方もしたくなってしまふ。

いずれにしろこの人は働く気はなく、月一回女性学の研究会に出られればいいらしい。ならば、公立の保育園は無理だろう。自分で保育ママを探すか、近所により親しい人を作って頼むか……というのが現実的方策だろう。幼児が都内まで移動するのは大人の想像以上にストレスがたまっている。うちの子などは柏駅前の雑踏だけで緊張している。月一回のこととはいえ、できれば子供の普段の生活環境の中で過ごさせようがよいと思う。

要は、本気でやりたいんだっただけ具体的な方法を考え、動くことだ。筆者は自分と年令も近く隣の市に住んでおり、他人事とは思えないところもある。それにしても解せ

ないのは、なぜ女性学を学んだ人間が神話の呪縛にとらわれるのか、ということだ。そういうものから女を自由にするために、まず女性学は存在しているわけだから。

三歳児神話の根拠

静岡県清水市 鈴木美奈（31歳）

「すりこみ」ってあるでしょ、ヒヨコが生まれて最初に見たものを親だと思ひ込む、あれです。ヒトの場合それが生まれて三年の間なのだそうです。その時期に世話する人がやたらに変わると、母親という存在を正しく認識できない危険があります。また乳幼児期（乳児は満一歳まで、幼児は一〜五歳）に母親との関係がうまくいかない、情緒面に欠陥ができ、結果として社会

に適応できなかったり非行や犯罪に走りやすくなる、これ常識ですよ。脅かすつもりはありませんが（参考は犯罪学関係の本）。

もう一つ。「子供は生まれて三年の間に一生分の親孝行をしてしまふ。あとは苦勞かけるだけ」と聞いたことがあります。これを私なりに解釈して、三歳児神話は十分親孝行してもらったためではないかと考えます。本当に一番かわいい時期、（手も一番かかるけど）何かと言えば「ママ」と抱きついてきますが、何年かしたら「うるせーババア」になるんです、どうせ。

「三歳っていつまで」ってそう固く考えなくていいでしょう。私は単純に「三年保育まで」だと思います。三年という期間が長いかわりに主観によるので、一概にはいえません。しかし、まだ三年経たないかとイライラしながら待っていても、三年経ったら何をしようかと楽しみに待っていても、期間は変わらないのです。損してるとしか言い様がありません。選択し得なかった「もし」を考えるなど愚の骨頂。時間と頭の無駄使いです。

現在できる事とできない事、将来可能になる事、をしっかり見極めて腹をくくるべきです。三歳児神話は「弁解」や「壁」ではありません。三歳児神話の「根拠」なのですから。

「三歳児神話」考

東京都 太田知子（40歳）

二五二号の「おさない子を育てる」に投稿された福田豊子さんの「三歳児神話の壁」を読んで、仕事か子どもかでさんざん悩んだ十年前を思い出した。

長男が十二歳、二男が九歳となった今は自信を持って言える。「三歳児神話なんてウソよ。子どもは保育園でいっぱい育つ」と。

長男が十カ月の時、タウン誌のレポートに応募した私は、仕事の面白さにのめりこみながらも三歳児神話から逃れられなくて子連れ仕事を続けた。保育園に入れたのは長男が二歳四カ月の春。「今年中には三歳になるのだから」を唯一のよりどころにしての入園だった。二男は産休明け四カ月で保育ママさんへ預け、二歳四カ月で保育園に入れた。

まもなく長男は中学生、二男は四年生になる。いまのところ大した問題もなく、二人とも友だちとよく遊び、元氣いっぱい

育っている。おなかがすけば自分たちで何か作って食べるたくましさ、母親が病気のときは布団を敷いたりおかゆを作ってくれる優しさを兼ね備えながら。

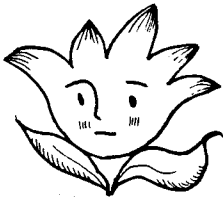
いま、地域新聞社の正社員の記者として働く私は、「あの時、仕事を選んで本当によかった」と思うのだ。

取材でよく議会を傍聴する。最近、非常に腹の立つことがあった。ある女性議員が保育ママ制度の導入や産休明け保育を要望したところ、Y町の町長は「三つ子の魂百まで、というように、小さい時は母親の愛

情が何よりも大事だ。家庭教育の欠如がいじめなどの問題を生むから、三歳くらいまでは母親が育ててほしい。もし生活が苦しいなら、生活費を援助してでも母親には家にいてほしい」と答え、保育制度の改善を否定したのである。

帰りのエレベーターの中で「町長の答弁はりっぱだ。さすが元教育者だ」と褒めたたえるオジサンたちの声を聞いて、私は暗澹たる気持ちになってしまった。国がいくら男女雇用機会均等法を作ろうが育児休業制度を導入しようが、肝心の自治体は「乳幼児は母親が育てるべきだ」という考えの首長のもとでは、子育て支援策など絵に描いたモチなのである。

いま、福祉の権限が都道府県から市町村にどんどん委譲されつつある。「福祉、福祉」とどの首長も声を大にして叫んでいるが、では、福祉の充実のために何をするかといえば、何十億、何百億円もかけて福祉センターを作ったり、さまざまなかモノを作るだけ。ハード面の整備には熱心でも、夜間保育とかホームヘルパーとかソフト面はお粗末だ。「ヘルパーなんて常勤に



することはない。ボランティアで主婦を安く使えばいい」というのが本音なのだから。

三歳児神話は女を家庭に閉じ込めるための葵のご紋ではないか、と私は思う。女たちが三歳児神話から解放されて経済的に自立しない限り、真の社会進出はありえないのではないだろうか。

二五二号伊東様

川崎市宮前区 岡崎時子

『従軍慰安婦問題と私』を読ませていただきました。従軍慰安婦の問題は、同じ女性としても許すことのできない犯罪だと思えます。現在も日本の事業計画が、アジアの人の生活を脅かしていることがあるということも知りました。

しかしアジアの女性が自活するための仕事として、日本の老人介護の仕事が結びつけられたのには少し驚きました。

現在老人介護にたずさわるヘルパーの人材確保はなかなか難しい状況です。ヘルパーが増員できることは大変喜ばしいことです。が、果たして言葉や習慣の違う人がやってきて、日本の高齢者に十分な介護ができるでしょうか。

高齢者の介護は、絶対数が足りないからといって、だれもができる仕事ではありません。

介護を受ける人の立場に立った介護は、かなりの経験が必要です。しかも決して楽で、きれいな仕事ではありません。自分の親でも最後までいい関係で介護することが難しい仕事です。

アジアの女性が自立するための仕事として、日本の高齢者の介護職を選択するのでしょうか。できることなら自国で、自国の特性を生かした職業を得たいと望むのではないのでしょうか。

そのための援助を考えることが必要だと思います。

日本で人材が不足しているから、仕事を供給できる、だからアジアの女性に日本へ来てもらおうという安易な考え方が、根底で

従軍慰安婦問題とつながっているように思われます。

日本の高度成長期をわが身もかえりみずに働いてきた現在の高齢者は、国の高齢者対策の基盤整備もできあがらないままに、自助努力でシルバーステージを生きぬいています。これらの人々の望む国の政策を期待したいものです。

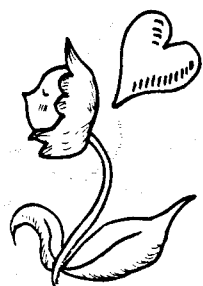
「母の恋」を読んで

兵庫県明石市 伊東容子

心の中にいつまでも漂っている思い出を一気に表に流れさせて下さるエッセイでした。

私も一度だけ「母の恋」を知っています。母は土地売却の詐欺師にだまされたのです。

北海道に別荘地をという触れ込みで家を数度訪れた男に、数百万円、取られてしまいました。



パリッとした男性が来るたびに母は、「ねっ。ダサイ、パパなんかとは違うんだから」とこ機嫌でした。

私は、その男達のためにピアノすら弾かされたものです。でも、母の浮き浮きした表情は忘れられないし、今でも笑える思い出です。

二十年も病気をした私に付き添いきりの人生を送った母。他の恋など、ある訳がありません。私には北海道の現地調査に出かけた時の母の可愛らしい写真とサギ師の風情がなつかしいのです。

また、文中にある「マルメロ」は「暮しの手帖」で紹介されて以来、手に入れたいくだもの」でした。下着類の中に実を置

くと「移り香」が楽しめる「マルメロ香水」は昔の夢でした。

関西地方に生育しないマルメロは、母と信州旅行した折、穂高町の碌山美術館の前庭で実物を見る事ができました。

母が亡くなって十五年めにあたる今年、私の青春のスポットを掘り出して下さった来戸さん、ありがとうございました。

安全な食品はどこ？

三重県鈴鹿市 稲垣信代

二五二号の西尾さんの恐ろしい食品の話。私も添加物について本を読み西尾さんと同じことを考えました。そしてもう絶対添加物の使った食品は買わないぞと決心したのですが、なかなか前途多難。

まず子供の要求。ハムやソーセージは添加物の豊庫なので、まっ先にやめたい食品だが子供はこれらが大好き。買ってエッセがまれしかたなく添加物がないものを、と

探したのですがありません。無添加のものではなく保存料、着色料なし、とうたってあるものが一種類だけ。これとても発色剤は使っている。スーパーの棚には何十種類の品物がならんでいるのに選択の余地はないのです。

夫でさえ、私が添加物の恐ろしさを説明しても「食べたいもんがまんするより、好きなもん食べて早よ死ぬほうがええ」などと言う。あなたはよくても子供はそういうわけにはいかないでしょ！

一体、いつからこんなに多量の添加物が使われるようになったのか。菓子でもパンでも無添加のものを探すのは思ったより大変。

自給自足の時代には添加物は必要なかったはず。それが工業化、都市化が進んで人々が食べ物を自分の手で作らず、買う物商品としてしまった。しかも安価で手に入れようとする。それが今の大量生産システムを招き、添加物の氾濫をもたらしたのでは？

今、食べ物は豊富である。しかもすぐ食べられるものが。この便利さに惑わされて

食べ物の本質を見失ってしまうと、後世の人間に大きなつけが回って行くのではないでしょう。

なんとかしなくてはと、あせりつつ個人の力じゃどうにもならないと限界も感じています。せめてわが家だけでも生き残れるように買物のたびに原材料名を確認しているのですが、給食や外食、およばれなどで知らぬ間に添加物をとっていることもあるでしょう。ほんとうに安心して食べ物が口にできる時代になってほしい。

「レイプ以前」 を読んで

匿名

とうとう「わいふ」にも近親姦の文が出るようになったというある感慨を持って読ませて頂いた。そしてすごくみたくない物を見せつけられて、とにかく顔をそむけなくなった。私自身の心がかきむしられる気持ちになったから。

兄妹でありながら日常的にキスをしたり、裸をみせあっている関係は全く変！ 変だ！ 絶対おかしい！ それを盲点とはいえ「知らなかった」親というのは……。

幼い貴女が訴えてもその兄を追い出すくらの気迫で、貴女を守らない母親に溜息が出た。

よく子供部屋を二階において夫婦は一階にとかい家庭の親は氣をつけたほうがよい。まさしくこういう事も起きるのだから。

この方は多分ご自分で気づかぬ以上のものすごい心の傷を負っていると思う。

ご自分が悪いので無く、その兄という人の責任だと思う。

それなのに兄をかばってご自分の受けた傷をそのままにして放っておいて、カウンセリングに通っていると書かれていたが、私は気がかりでならない。

兄をかばうのはなぜか？ それは血縁だから自分の原点ともいえる人だから。その兄にはむかう事は「自分」をも否定する事になりかねない。

でも自分にも罪がある、嫌といわなかつ

たからとか考えていらっしやるとしたら、それは違うのです。小さいころの貴女には

「その事の意味」「性」の意味がまだわからなかったのです。それは命と同じくらいに大切な事柄なのです。精神的意味でも。しっかりと「ご自分が何をされたのか」を知って欲しい。自分を守って下さい。貴女

によく似た方の書かれた「甦える魂」高文研出版の一読をお勧めします。

私も同じように兄の近親姦のため永く苦しみました。人ごととは思えずにお便りをしました。

おみごと五〇〇〇 キロの旅

東京都新宿区 ホーヴィング幸子(49歳)

旅に関する話、文、映像、どれをとってみても私は好きなので、「わいふ」二五一号から読者になった者として、高松恭子さんの「父と旅した五〇〇〇キロ」は題から興味をそそるものがあった。それでも読み

はじめたのは続編のほうからで、ドロミテアルプスの名をみつけたからである。というのは昨年、夫と初夏のころ、久しぶりに訪れた地が北イタリア（南チロル地方）であつたからだ。

また、お父様との旅ということも共感を覚えた。実はかれこれ二十年前に、私もユーレイルパスを使い父と母（二人共、当時六十六歳、私は独身、ドイツで働いていた）との三人旅をした。文を読み進むうちに、自分の経験がなつかしく思い出され、高松さんの旅と重なって、心温まる気持ちになった。

旅の動機がお父様に対するやさしいお気持ちからであり、「思いたつたが吉日」と、それを実行されたのがすばらしいと思つた。お父様の年齢を六十代後半くらいに見積つていたが、書き出しの文で七十五歳であることが知り、ますます感心。心臓がよくないというお話であつたが、事故も無くヨーロッパを、ご自分らしい旅をし終えたのが何とも嬉しいことである。

パリの地下鉄線、乗換駅を、大阪のそれに置き換えてしまうのは、お父様の知恵と

して思わず笑みが出てしまうと同時に、記憶術の一方法と考えれば、また感心してしまふ。

この旅をきっかけに伴侶を亡くされたお父様が、元気で外の世界に眼を開き、積極的になられたのは喜ばしいことである。これも高松さんご夫妻お二人の、すばらしい結束力があつたからこそ。お見事五〇〇〇キロの三人旅に拍手を送りたいと思う。

掲載の確率

大阪市平野区 西尾ありか

二五二号の「ペンで稼げるかもしれない」という夢をもつ大井二美さんの投稿を読んで自分の思いと重なるようで苦笑した。

確かに「わいふ」に採用されると、お墨付きを頂いた気分になる。隠された才能が開きはしないかと、ゾクゾクする。自分の書いた投稿をポストに投函してから、次

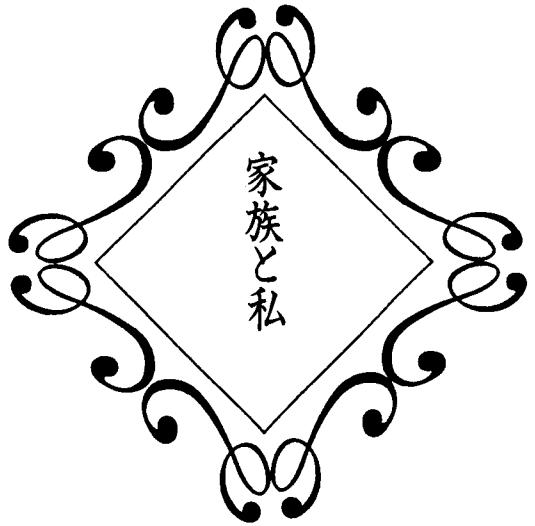
の「わいふ」が届くまでの期間のやたらと長いこと。採用されるか否かは、さながら試験の合否発表だ。

ところで、二五〇号に投稿総数が載っていたが、数えてみると、サツと四分の三ぐらいの確率で採用されることがわかった。思っていたよりも高い確率の中では、採用されても「まあまあね」と言われているように、あつてなく心の中の桜が散る。ポツになった時は確率が高い分、落ち込むが、採用の門が狭いほど難関を突破したように、充実感が湧きはしないだろうか。最近、「わいふ」が面白くないだの、半分ぐらいしか読まないというご意見も多い。もっと狭き門でもいいのではないかとさえ思う。

結局、隠された才能なんてのは、あると思う人にあるのかもしれないが、私も早く雑念を吹っきたいものである。

「私達って凡才よね」なんて、低次元なところで同情し合つて満足する気は毛頭ないが、「これからも書くよ」という気持ちには、「私も」と賛同したい。

（名・山田喜子）



父の入院と切斷された足

東京都足立区 福田幸子

八十三歳になる実家の父が昨年の九月に入院した。

七月ごろ、足の指を深爪してしまい「痛い！痛い！」と言いながら素人治療をしていた。

若い時から糖尿病を患っていた父は、食事制限はもちろん定期検診もおろそかにしていた。インシュリン注射をする一步手前の状態が、ここ数年

続いていた。そのためあって化膿し壊死してしまったのだ。

急きょ川越にある総合病院で手術することになった。

足の薬指は完全に壊死し、菌が上のほうに上っているので一週間はど注射をして、足先のほうへひばって集めるといふ。

十日後、指をえぐり取るようにして手術したと、姉から電話で知らせてきた。

術後二週間して私は片道一時間半かけて、父の様子を見に病院へ行った。

個室のベッドにボットンと座り、イヤホンをしてテレビを見ている後姿は、本物の老人であり、まぎれもなく病人であった。

「傷口の治りが悪くて痛いんだよ」と父は私に訴える。

「早く病院に行きなさいとみんなに言われていたのに行かないから」と今さら言っても仕方のないことを私は言う。

傷口はえぐってあるので縫うことができず肉が盛りあがってくるのを待つのである。足を少しでも下げると血液が下に流れるため、痛むらしい。「でも足首から切り落されないと済んだからよかったじゃないの」と慰めてもみる。

父は、私が子供のころは怖い存在であった。い

たずらをしたと言つては庭のドングリの木に縛りつけられ、嘘をついたといつては上野の地下道に置きに行くど吐られた(当時、上野の地下道には今でいう、ホームレスの子供や大人がたくさんいて、子供の私には恐ろしい場所であつた)。

その父が今、病院食以外、何も食べてはいけないので口淋しく「何か食べるものがほしい。なんでもいいから」と子供のように、私にねだる。「お昼に出たミニトマト、一つ一つ間をおいて食べるんだ」大切そうに私に見せる。

おいしいもの、珍しいものを食べるのが大好きな父なのに、胸がつまり、言葉につまり、早々に病院を後にした。

一カ月後、今度は弁慶の泣きどころといわれる所から切断することになった。菌をすっかり取り除くことができなかったようで、足の甲まで壊死してしまつたという。

切断手術後、二週間ほどして中一の息子とお見舞に行つた。

私の目はベッドの上に投げだされたようになって足に付いた。ネットをかぶせてあるその足は、不謹慎にもロースハムを連想させた。

息子は「アー!」という目をして私を見たが何

も言わなかった。

父は私が思つたより元氣そうにしていた。

「もう前みたいに痛くなくなつた?」

「痛みは前ほどではないけど、親指のほうが痛むんだ。もつないのに」と切り落とされてしまひなくなっているほうに手をやって撫でている。

「よくそんな話を聞くけど本当なのね」空を撫でている手を握つて泣きなくなつたが、そんなテレビドラマのような事は、私にはできなかった。

「でも、今度は縫うことができたから、早く治るわよ」となんでもない事のように言う。

「切つた足三万円で火葬してくれるんだって。『見ますか?』と聞かれたが、断つて、お願いしたよ」

「えー火葬してくれるの。どこで焼くのかしらね、骨はどうするのかしらね」

「分からないけど、捨てはしないだろう。八十三年間一緒にいたものだから、大切にしてほしいけどな」

「そうでしょうね。心配?」

息子はイヤホンをしてジッとテレビを見ている。「傷口がまだ完全についていないから今歩く(動く)ときは、足を首から吊るすんだよ」

個室なのでトイレは付いているが、車椅子が入

らない。その上手すりも付いていない。

自分の部屋で、まづば杖で歩こうとしたところ
んでしまったそうである。

「簡単に足が上がるんだよ。不思議なもんだな
あー、足首がついている時は、ぜんぜん上がらな
かったのに」

ひよいひよいと何度も足を上げて見せる。「年
内に退院できるといいね。駄目でも、お正月は家
で迎えらるるといいのに」

そんな事を言うのが精いっぱいだった。

「じゃ、また来るから」と息子と帰ることにした。
帰りの電車の中で息子が思い出したように言っ
た。

「おじいちゃんの足の骨、おじさんが入っている
(兄は二年前の五月に亡くなっている) お墓に入
れてあげられるといいのに」

「うん、そうだね。でもできないんじゃない」

「じゃどうなるの。かわいそうだよ」

「大丈夫よ、病院のほうできちんとしてくれるか
ら」

私は自分の骨は散骨に思っているが、息子は
お墓に入れるものと思っている。

すでに外はまっくらである。電車のドアのガラ
スに映る自分の顔を見つめながら、病室の父を



思った。これからギプスをつける時もさぞかし痛
かろう。慣れてきて、杖をつきつき、ぎこちなく
歩くしかないだろう父。

入院前から歩くことを余りしなかった父のこと
だからなおさら歩くまい。

退院したら、夫の車で好きな所に連れて行き、
好きなものを食べさせてあげよう。

インシュリン注射しながらも、我慢の生活をし
ているよりもいいだろうから。

(元・小林正子)

老人ホーム情報センター発

初めまして

老人ホーム情報センターです

老人ホーム情報センターが発足して、十月経過しました。まだ赤字経営ですが、相談窓口は忙しい日々を送っています。

今回「わいふ」が新しくなるに伴い、情報センターにページをいただきました。

この欄を通して、私たちが高齢になったとき、どこに住み、どう生きるか、事例などを交えながら、いろいろな角度から考えてみたいと思います。

現在、私たちはまだ経験したことのない、高齢社会を迎えています。これまで私たちは親の生きてきた姿や、地域の人の生き方を見聞し、それらが無意識のうちに学習となり、老後の生き方のお手本としてきました。

人生五十年の織田信長の時代から、平均寿命八十歳代になった現在、定年後の人生は「老後」ではなく、新しい人生のステージの幕開け、と言われています。生き方のお手本のない、新しい人生のステージをどう生きていくか、誰もが真剣に考えなければならぬ時間が来ています。

平均寿命の短かった時代の高齢者の受け皿

は家庭でした。いまでも、体が動かなくなったら家族に看てもらいたい、という気持ちを持つている高齢者を多く見受けれます。しかし、大家族が大きな家で、共に暮らして来た時代は、たとえ介護が必要になっても、介護の手はたくさんありました。しかも介護の間は短く、家族が高齢者を介護することに、大きな負担を感じることはなかったのです。

現在、家庭介護は介護者に心身ともに大きな負担をかけ、介護する側も、介護を受ける高齢者も共に、よい関係を築くことができないで苦しんでいます。

だんだんと衰えていく心身の能力を、どうカバーしながら生きていくか。自分のこととして考えてみたいと思います。

▼情報センターにお便りをください。みなさんと共に作っていくページにしたいと考えています。また高齢者の受け皿としての施設について情報の欲しい方は、ぜひ老人ホーム情報センターまでお電話をください。

担当 水落

わいわいがやがや

“わいふ”と夫

三重県鈴鹿市●稲垣信代

初めて「わいふ」が届いた夜、私はワクワク気分です。封を切った。これが「わいふ」か。何人

ものライターを世に送り出したという有名な投稿誌。期待に胸ふくらませて頁を開く。なんだか活字ばかりだな。日ごろ、愛読している、カラーページたっぷりの主婦雑誌とは勝手が違う。いや、これでこそ世間に認められるライターが生まれるというものよ。無理やり納得しているところへ夫が帰宅。最初は無関心そうにしていたけど「わいふ」が気になる様子。

「変わったものを読めるな。どうしたの」テレビを見ながら聞いてくる。封筒に気づいて本屋で買ったものじゃないと見当つ

けたらしい。私はさりげなく「友だちに教えてもらったの。おもしろそうだから申し込んでみた。見る?」夫、「わいふ」を手にとりパラパラとながめつつ「四百六十円か。けっこう高いな」送料込みで七百円とはとても言えない。

「友だちってどの人? 会員になったの?」すぐやめられるの?「やたらしつこくたずねてくる。そして「うっかりへんな会に入るなよ」ときた。どうやら宗教や思想の会の機関誌だと思つたようだ。「そんなんじゃないって」。笑って否定しても納得しない。「大丈夫か? 新しい会員紹介しろとか言っていないか?」。もっと私を信用してよ。「お得ですよとか言われるとすぐ買っちゃうほうだろ」。否定はできない。「人の言うことすぐまにうけて、だまされやすい性格なんだから」。だから

あなたと結婚してしまったのよ。これも言えない。

夫の心配はピントはずれではあるが「わいふ」の話を聞いて私もライターになれるかも……と思ったことは事実だ。なんとという短絡思考。ライターがどんなものか知りもしないくせに夢だけはやたらでかい。でもいいではないか。夢があったほうが人生楽しいよ。「いいでしょ。本代は自分で稼ぐから」

専業主婦の私の収入は新聞、雑誌への投稿謝礼である。夫はますます顔をしかめた。

むさしこがねえ

東京都武蔵野市●福田由利子

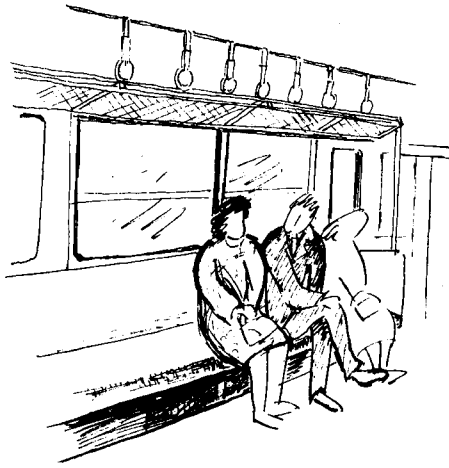
K老人クラブ会長のF氏は、話好き、話上手のユーモアに富んだお人である。

或る日、会の用事で武蔵小金井まで同道した。電車に乗るとF氏は、

「福田さん、岡山に宮本武蔵駅と言うのが出来たそうですね。」

ところで福田さんは武蔵に子供があつたのではないかと思つたことはありませんか」と私に質問した。私が岡山に多少のゆかりのある者と知つての問いである。

F氏からそう言われて私は考



えた。武蔵に関する小説や、逸話を読んでも、彼に子供がいたようなことを書いてあるものは私の知る限りではない。

しかし物知りのF氏がわざわざ尋ねるところを見ると、私が知らないだけで、どこかに、かくし子がいたかも知れない。なにしろ武蔵は日本全国、武者修行とやらで歩いた人である。映画などで見る限り、いい男である。彼に情をよせ、ひそかに子

を産んだ女人も居たかも知れない。それで私は、

「そうですね、一人くらいは居たかも知れませんか」と答えた。

やがて電車は武蔵小金井駅のホームへと入つて行つた。

「福田さん、武蔵にはやっぱり子供はいなかったようですね」とF氏は続けて、

「ほら、駅員さんが言つていますよ。」

むさしこがねえ、むさしこがねえ」

夢のまた夢

埼玉県鴻巣市 ●鈴木洋子（47歳）

新年早々に、今年八十三歳に

なる父が、二度目の脳梗塞で入院したとの電話を受けてから一カ月、山形新幹線で帰郷した。大宮から郷里米沢に着くまで

の二時間弱の車中、「わいふ」二五二号を読んだ。いつも忙しさに、小間切れにしか読む時間のない私だが、この時はかりは久し振りにゆっくり読むことが出来た。

「わいふ」を読んでいつも感じる違和感。特に海外ものは常にこの感じがきまとう。毎日子育てとやりくりに追われている私。最高の私の夢といえば、いつか夫婦で北海道に行くこと。

今は猫も杓子も海外旅行があたりまえの時代だが、経済のことを考えたら、我家では到底無理。私立大学に通う息子を持ち、地方公務員の夫は、娘（小二）が高校入学前に停年となる。その先の事を考えたら海外旅行なんて夢のまた夢。

皆さん、それ相当に努力していらっしやるのでしょうか、リッチな人のなんと多いことかとうらやんでいる私なのです。

（え・奥島十恵子）

わいわいがやがや

地球からの手紙



井本由紀 文 仲條正義 絵

「親愛なる火星の大統領様」「火星査察官として、私は地球を支配することを提案します。そして惑星の美しさを保つ方法を人類に教えるのです」
ドキッとするような内容だ。ともすればむずかしくとらえら

れがちな環境問題が、こんなにわかりやすく、ユニークな発想で語られている本を私は見たことがない。
これは「全英子どもたちの手紙コンクール」で、応募数三十一万六千通の中から一位に選ば

れた日本人中学生の作品を絵本にしたものである。
その感性のすばらしさに、誰もが心を打たれるに違いない。是非、子どもに語って聞かせたい一冊である。
文化出版局 一三〇〇円(冊)

専業主婦が消える



末包房子 著

「夫の位牌に貼り続ける究極のぬれ落葉」二十年間、自治体の消費生活相談員として活動しながら、経済的には夫の被扶養者、「専業主婦」として過ごし、現在はその遺族年金で暮らす自らをこう表現する著者。
女性の自立が言われて久しい

が、夫の経済力に依存する専業主婦は、なお千二百万人を超える。本書は、年金や税制、労働人口問題、福祉行政などあらゆる角度から詳細なデータを交えて分析し、「専業主婦」は崩壊期にあると警告する。
自らの半生を振り返り、強い

自責の念をもってつづったというだけに説得力に満ちている。「消される」前に、こっちから専業主婦にオサラバしようじゃないか、という気にさせてくれる心強い一冊。「究極のぬれ落葉」にならないために。
同友館 一五〇〇円(福)

コンビニエンスストア食べ物安全通信簿

コンビニの食べ物つき合うための安心



渡辺雄二 著

コンビニエンスストアでは、いつでも、しかもすぐに食べられる食品が手に入る。しかし、便利さと引換えに、加工された食品にはさまざまな添加物が使われており、ガンやその他の病気への不安がある。

この本は「より安全な食品はどれか」「避けたい食品は？」という疑問に答えてくれる。八十一の食品ごとに、添加物の種類や安全性、危険性を表を使って分かりやすく解説。安全性は、総合的に五段階評価されていて

一目瞭然。もちろん五が添加物なしの食品である。「よりまともなものを選ぶコツ」のコーナーには要点や添加物を除去する方法も紹介されている。より安全な食品を選ぶための必読書。
光出版 二二〇〇円(生)

拒食症・過食症のQ & A

早期発見・早期治療のために



国立京都病院内科医長 東 淑江 編著

食べたいけど食べたくない。やせ願望の末、この相反する感情が高じて、拒食症や過食症へ。しかも、それを病気と認識せず、治療どころか悪化させてしまう人がほとんどか。長年にわたり、摂食障害（食

行動の異常）を研究している医師と心理療法士によって書かれた本書は、まさに拒食症と過食症の医学辞典。Q & A方式で「過食と嘔吐を繰り返してしまふ」など切実な相談から、その結果起こる心身の異常、治療法

まで、あらゆる悩みと症状にわかりやすく答え、病の早期発見と早期治療を強く訴えている。摂食障害は命に関わる大病なのだ。その恐ろしさを如実に教えてくれる一冊だ。
ミネルヴァ書房 一六〇〇円（佐）

大地のアルバム

ある中国残留日本人家族



法村博人・祐子 法村香音子・矩子 鈴木節子 著

五十年前、中国では日本軍が撤退した後も、内戦が続いた。国土は疲弊し衛生状態も悪かった中で、新しい国づくりをめざす八路軍は医療設備の充実に必要な日本人技術者の帰国を認めなかった。

法村博人氏もその一人で、伝

染病予防のワクチンを培養しながら八年もの長い間、一家ぐるみで中国各地を転々と引き回された。後、ベトナム国境に近い奥地の貴陽に落ちつき、八年がかりで防疫センターを作り多くの技術者を養成してきた。本書は、その貴重な体験記である。

長女の香音子さんも子供の目を通しての流浪の旅の模様を書いた「八路軍とともに」を以前「わいふ」に寄稿されたが、どんな逆境にも笑顔を失わずに生きぬいてきた家族の絆の強さに感動。
社会思想社 二〇〇〇円（辻）

老いて生きる

映画「おてんとさまがほしい」を語る



貞末麻哉子 編者
長谷川 健 編集協力

「おてんとさまがほしい」という映画がある。アルツハイマー型痴呆症になり入院した妻の姿を、照明技師である夫が撮り続けたドキュメンタリーだ。本書はその映画のプロデューサーである女性が映画の副読本

として、また「痴呆症を患う妻を抱えた一人の男がカメラを握ることによって、いかに自分の運命に向き合い、妻と生きようとしたか」をあらわそうとしたものである。

中で夫は淡々と愛する妻とのつながりの深さを語り、そして著者は長いつきあひから察する夫の思いを、映画を媒介にして丁寧につづっている。
「おてんとさまがほしい」をぜひ観てみたいと思わせる一冊。
凱風社 一〇三〇円（久）

母の特別養護老人ホーム入所

奈良県奈良市

田中慶子

ついに特養に

昨年（一九九四年）十月五日は母の特別養護老人ホームへの入所日だった。前の夜は眠れなかった。入所させることがよかったのかどうか。もしこれが母のことではなくて私自身のことだったら、私は私をホームに入れようとする娘に懇願するだろう。

「そんなに迷うくらいなら私を家に置いて」

もし母が私にはっきりそう言うのなら、私もずっと我が家で母を見る決心をするだろう。痴呆の母にはそれは望めない。しかしまた母がまともだったら、母の性格上決して自分の希望は言わない。どちらにしても母の本心は聞けないが、母が

ずっと私の家に居たいことは私にはわかりきっていることなのだ。それでも私は母をホームに入所させることにした。

さまざまな施設を転々と

一昨年（一九九三年）七月に母が脳梗塞で倒れ、三カ月半の入院生活の後、老人保健施設に入所した。入院後三カ月経つと老人は、退院を言われると聞いていたのでいろいろ探し回った結果、九月十五日に市内の老人保健施設申し込みまでこぎつけた。申し込み時、施設の事務長にすぐに特別養護老人ホーム入所の申し込みを勧められた。老人保健施設退所後は私が母を家で見るともりであることを言うと、

「(介護は)一年二年のことではありませんからね。(入所できるのは)申し込みをしても二、三年待つのが普通です。キャンセルはいつでもできるのですから」

という彼の言葉に、とりあえず特養ホーム入所の申し込みをすることにした。

十一月初めに入所した老健施設に半年居て、昨年五月十五日母は退所し在宅介護になった。このころまだ介護生活も始まっていないうちに、私は歯茎の化膿、カンジダ菌の発生、鼓膜の落ち込み、アレルギー性結膜炎、腰痛の悪化などが次々と発症し、母を家に置いての病院通いに四苦八苦した。頻繁な頭痛にも悩まされた。在宅介護になることを自分ではそんなに苦にしているつもりはなかったが、自分では気づかない気持ちの負担に

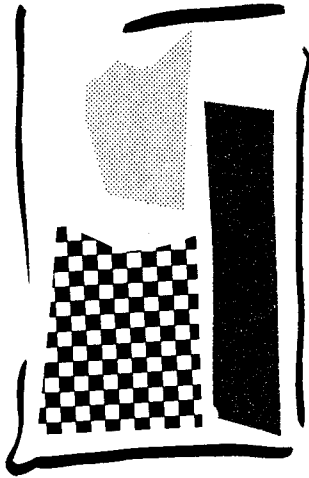
体が正直に反応したのだろうと思う。

母がまだ入院中の一昨年十月、特養ホーム入所申し込み時は入所は二年待ちだと言われた。昨年五月、在宅介護に伴う、ショートステイ、デイサービスの申し込み、一級身障者手帳交付の申請など諸々の手続きに市役所に行った時、申し込み時から半年過ぎているにも拘わらず、その時(昨年五月)からさらに三年待ちだと言われた。いろいろな理由で優先される人が多いということである。いずれにしても二、三年は入所待ちだし、実際に入所するかしないかはその時考えればよいと思っていた。二、三年在宅介護をしてみても自信があればその時キャンセルすればいい。

特養が空いた

ところが昨年七月二十日、市の福祉課から市外で県下に新設される特養ホームに、入所を希望するかどうかの問い合わせが文書であった。

市外だし、もともと入所させることも決めていなかったもので、その封書をしばらくは引き出しに入れたままにしていた。しかし専門家の意見も聞いてみようと思い、ショートステイで預けている母を、以前入所していた老健施設へ迎えに行った



このことを言ってみると、在宅介護支援センターのAさんは是非入所させるべきだと言う。婦長さんや他の人の意見も聞くようにと言われ、婦長さんにも聞いた。彼女も強く入所を勧めた。

彼女たちをはじめ、ここの職員はみんな入所者にやさしく誠実だし、しかもプロの立場からの意見なので、きっと彼女たちの言う通りなのだろうとは思った。彼女たち以外に、私は母の訪問看護をお願いしている診療所の婦長のBさん、市のサビスのショートステイでお世話になっている市内のキリスト教系の特養ホームで、看護婦のCさんにも相談した。みんなの意見は大体次のようであった。

老健施設の人達

一、市内とか、近いホームは入所者、希望者が

いっぱいでないか入所できない。

一、いずれ入所するなら痴呆がひどくならない、元気なうちに入所するほうがいい。ひどくなると入所を認めてもらえない場合がある。

一、市の言っている二、三年で入所できる、ということばはあてにならない。一人暮らしの老人が倒れると優先されるし、こういうことは多い。

一、今は娘さんが時々手伝ってくれるかもしれない

いが、いつまでも当てにできない。

一、これから娘さんの結婚、出産があるだろうし、あなたも外出しなければならぬことが多くなる。

一、市から入所を言ってもらった時に入所を断ると、必要度が低いと見なされ、次回はなかなか言ってもらえない。

診療所のBさん

一、本人(母)にとったら家がいい。

一、介護者(私)の腰痛が一年後大丈夫という保証はない。

一、お母さんを見る人はあなた一人だけなんです
ね……。

キリスト教系特養ホームのCさん

一、入所させても退所させることはできる。

(私が非常に迷っているのだ)

一、いいチャンスかもしれない。

一、介護人の余力を残して預けたほうがいい。とことん疲れてしまうと入所させてから放ったらかしになる。

一、新しい所は職員が理想に燃えている。

一、ホームを見に行きなさい。

一、県内どこでもいいという人に入所案内が送られた。

(私は、特養ホーム入所申し込み時、どこでもいいという言い方ではなく、できるだけ家から近い所、という希望を言った)

一、市内から十人入所できる。

一、入所させることに罪悪感を持つことはない。

一、今は介護は専門家に任せ、家族は要介護者の精神的ケアをする時代になっている。

(現在の日本の特養ホームは、どこもみなそんなに信頼できる所ばかりかしら、と思った)その他の人

一、あなた(私)が倒れると結局お母さんが放っ
たらかしになり、かわいそう。

心は乱れる

私の心には相反する二人の私があった。母の幸せだけを思い、母をずっと我が家で見たいと思う私。もう一人は母の介護から解放されたい私。

母を家で見たいと思う私は、今回の入所は見合
わせるべきだということになってほしいと思っ
ていた。プロの意見を総合した意見に従うのだから、自分でしんどい道を選んでも、規範意識の強い私は「母の介護から解放されたい私」を抑えて
納得させることができる。一方「解放されたい

私」は、入所させるべきだという結論を期待していた。専門家が言うのだから、私は良心の呵責を感じることなく堂々と楽ができる。意識の片隅でそう思っていたのではないだろうか。

結果は殆どが入所を勧める意見だった。何年続くかわからない在宅介護の現実私の想像をはるかに越える厳しいものだということだろう。

七月二十八日、母をショートステイで預かってもらって、次女の運転でそのホームを見に行つた。我が家から車で四十五分のところにあるそのホームは建設中だった。新興住宅地を過ぎると畑があり、向こうに山をすぐ背にしてそのホームはあった。



もし母が入所すればここで死ぬことになるのだろうか。商都大阪の中心地で生まれ育った母がこんなにさびしい山のふもとで、と思うとたまらない気持ちになったが私はその思いをすぐに打ち消した。

仮に母がここに入所しても、私は母を週の半分は我が家へ連れて帰るつもりである。



今現在の私の気持ちはともかく、私は後々後悔しない選択、結果的によかったと思える選択をしたかった。思案に思案を重ねた結果、入所を申し込んだのは期限ぎりぎりの八月一日であった。前日は、入れるか入れないか、一時間毎に答えが変わり、何も手につかず何も頭に入らなかった。開園、入所日は十月初めである。

母にはわからない

自分の運命が大きく変わったのを何も知らない母を見て、私は胸が痛んだ。しかし入所申し込みをした翌日の夕食時、何も知らないはずの母が、「このごろ、うちの人や近所の人にひとつも会われへん。あんたにも会われへんと思うて何や頼りのうて」と言う。

「心配せんでもええよ」

と私は言いながら内心ドキッとしていた。特養ホーム入所のことなど知らないはずなのに、まるでわかっているような母のことばである。そして次の母のことばに私はさらに驚いた。

「あんたにはわかれへんやろけど。情ない。あれ（流しの洗い物の食器）も片づけたいのに。こんなん（立てないから食器が洗えないこと）初めてや。情ないわ」

としきりに嘆く。母がこんなにも、自分の体の状態を認識したことを言ったのは初めてである。私は母を励ますために、夫が母のリハビリのために作ってくれた、立つ練習をするためのつかまり棒を持って来て、母に立つ練習をさせた。母は何回

も何回も私に練習をせがんだ。立つことも歩くこともできなくなった母は、やはり呆けているほうがしあわせなのかもしれない。

しかし翌朝の母は自分の身を嘆くこともなく、つかまり棒を見ても無関心だった。

この日の後も何度も「頼むわな頼むわな」と哀願するように言うのが私には、

「ホームへ入れんといてな」

と言っているように聞こえ、私は心の中で、「ホームへ入っても週の半分はここやからね」と言い訳した。

入所を申し込んだ後、日が経つにつれて私の辛い気持ちも薄らぎ、それどころか母の入所後の私の生活に夢が膨らんだ。母の入院以来休んでいたピアノをまた始めよう。腰痛なので水泳教室にも通おう。五月以来たまっている夫の仕事関係の領収証の整理もしなければ。なぜ入所を迷ったのか自分でも不思議で、今の窮屈な生活から後二カ月で解放されると思うととにかく嬉しかった。そして九月一日市役所から入所決定の通知が届いた。

七月のある日、診療所の人に言われてNHK教育テレビの番組「すこやかシルバー介護」を見た。寝たきりだが頭は非常にしっかりしている九十五歳の実母を、十三年間明るく見ている娘さん

が放映された。それを見て自分でも意外なことに私はなぜか憂鬱になってしまった。

十三年という年月の長さのためか、それとも寝たきりのお母さんと介護する娘さんの二人ともが立派すぎるからだろうか。

進む痴呆

在宅介護になってからでも、母の痴呆が徐々に進行していつているのがわかった。訪問看護の看護婦さんにも、

「この前より痴呆が進んでいますね」

とはっきり言われて少しショックだった。娘と同じ居して痴呆の進み方がうんと遅くなったという話を本で読んだことがあり、私にも淡い期待があったのだ。

母はよく、

「もつ、うち（私）、帰らんとあかんわ」

と暗くなると言い出す。

「どこへ？」

と私がきくと、

「塩町四丁目」

と自分が生まれ育った場所を言う。兄さん義姉さんが待っていると言う。母は末っ子なので跡取り

の長兄の家族と同居だった。私が、母の兄さんも義姉さんも空襲で死に、船場の塩町の家も焼けたと言つと、

「そつ、ちつとも知らなんだわ」

と悲しそうに言つ。この後もしきりに「情ない」を連発したので、私は母に、母には娘や孫娘もいてしあわせであることを言つた。母のまだ残っている脳の健康な部分が、今の母の状態を正確に認識していて母にそう言わせるのだろう。

八月十四日の日曜日、夫の運転で母の恋しがっている「塩町四丁目」へ連れて行つた。御堂筋と長堀通りの交差点から、一つ北寄りの角地にあった母の生家は今はトヨタビルになっている。当時とは全く様変わりしていて、痴呆の母に説明しても何もわからないのは当然だった。

しかしその後、母が子供時代にお母さん（私の祖母）に連れて行つてもらつたという「福寿司」へ入り、

「お母ちゃん、ここ、福寿司やで」

と言つと懐かしそうに喜んだ。そのあと食べる時になると、もう自分がどこに居るかはまるでわかっていないし、意にも介していないのはいつものことである。

痴呆の進んでいる母は今でも百人一首を誦むこ

とができるのかしらと、ある日ふと思い、ためしに、

「寂しさに宿を立出てながむれば」

と私が詠み、下の句を催促すると、

「いずこも同じ秋のゆうぐれ」

とすらすらと言つた。

「うわっ！ 言える！」

とその場にいた長女とふたりで喜んだが、この歌は覚えやすい歌だし、誦めても知能の確かさとは関係ないことかもしれない。

夕食後はいつも母の入れ歯をはずし、口の中を歯ブラシでこする。そうしないと歯茎が炎症を起こし出血するのだ。その後のうがいの時、うがいがすんだと思って、吐き出す水を受けるボールを引き上げるとその後で母は口の中の水をテーブルに吐き出した。思わず私が、

「もつっ」

と言つと母は恐縮して小さくなる。そんな母の姿を見る娘の何とも言えない後味の悪さ……。

夜の八時過ぎから寝る用意をして母が寝るまで三十分ほどかかる。目を閉じた母の顔をじつと見入ると、それは呆けた母ではなく申妻がいくしう家事をこなしていた時の母の顔であった。

母が脳梗塞で倒れて以来、多くの人たちとの出

会いがあった。最初に入院した病院。次に入所した老健施設。在宅介護になってからお世話になった訪問看護の診療所。ショートステイでお世話になったキリスト教の特養ホーム。デイサービスの特養ホーム。市役所の担当の人も親切だった。国の福祉政策はともかく、現場の人たちの暖かさ、優しさは心に染み、励まされた。

眠れぬ夜に

入所日が近づくにつれて私はやはり辛くなっていた。母を入所させても、私としてはあくまでも在宅介護の延長であり、ショートステイの日数と回数が多くなるだけだと自分自身に説明していた。そうは思っても私の気持ちは揺れ動き、当日は一緒に行ってくれる次女も私も暗い面持ちだった。この日はお天気までが陰鬱で私の心をいっそう重くした。

今まで母をショートステイに連れて行く時、「病院に行こう」と言っていたのでこの日もそう言っただけで母を車に乗せた。それまではいつも同じ様子だった母がホームに着いてしばらくすると異変を悟ったようである。痴呆の母には事情を説明してもわからないので何も言っていない。母に

とったらショートステイと同じだろうと私は思っていたのだ。もっとも母はショートステイにしても何もわけがわからず、私の姿の見えないことを不安に思っていたはずだが。

ホームに着いて不安になったのは母だけではない。母が入所していた老健施設や二カ所の特養ホームと雰囲気まるで違う。これら三カ所の施設は寮母さんがたくさん居てにぎやかで活気があった。ここはひっそりしている。開園して間がないためかもしれない。不安を抱きながら母と娘を二階に残して、私は一階へ入所の手続きに降りた。入所の申し込み時、電話でも話し、何回か会ってお世話になった市の福祉課の担当者も立ち会いの上で、手続きは完了した。

「母の住民票が我が家からこのホームに移ったのはショックでした」と言うとは、

「市内のホームに入所しても住民票はホームになるのですよ」

と慰めてくれた。ホームの職員、「お葬式はこちらでしますか」

という質問に私は驚いた。ここに入所する老人のいろいろな事情、境遇を思った。

一時間ほどして母と娘の居る二階の部屋に戻る

と、二人が向かい合わせになって寝ている。私を見て娘が、

「おばあちゃん、おかしいねん」

と言つ。娘の着ているTシャツの襟ぐりからその中へ母が入りたいと言つらしい。母は不安のあまり、誰かに何かに包み込まれて安心したいのだ。私は胸が潰れる思いだった。私がそばに行っても、母はせわしなく座ったり横になったりして明らかに様子がおかしかった。



「お母ちゃん、夕方に迎えに来るからね」

と嘘でこまかして振り切るようにして娘と私はその場を去った。

その夜も眠られず、夜中に階下の台所に降りて行くと長女もそこに居た。母の入所後の様子が少

しでもおかしかったら、すぐに退所させようと話し合った。初めは、母の住民票を大阪から我が家に移すことは勿論、在宅介護にも反対だった夫は、この時には入所させることに反対で、

「できるだけ、うちで見てあげたら」

という意見が変わっていた。夫の気持ちは嬉しかったが、私はそのことばにいらいらした。今現在は何とか母を見ることはできる。しかし数年先、何かの事情でそれができなくなったからと言つてすぐには入所させてもらえないのだ。今回入所を断ると次は言ってもらえないかもしれない。市の担当者はそうは言わないが、こういう事情に詳しいはずの施設の人がそう言っている。だから今現在は何とか母を見られる状態にあるのに、入所を申し込んだのだ。それで私が辛いということを夫は何もわかっていない。そして細かい事情は考えず、漠然と情だけで言っていることが私には腹立たしくさえあった。

翌朝ホームに電話で母の様子を尋ねると、

「普通にしておられますよ」

という答えで、特に安心できることはでもなかった。四日後の九日に外泊許可をもらい、母を迎えに行くつもりをしていたので、それまでの我慢と自分に言い聞かせた。



ピンポイントニュース



暮らしを楽しく する「百円貯金」

新潟県新潟市●和田まゆみ

これを始めた「きっかけ」はワイシャツのアイロンがけでした。簡単なようで結構面倒なものです。同居の姑の手前、クリーニングに出すわけにもいかず、これをするたびに不満タラタラの私でした。

ところが今はこの仕事を楽しし

くてたまりません。なぜかというとクリーニングに出したつもりで一枚につき百円貯金する事にしたからです。もちろんそのお金はクリスマスにでも何か自分の好きな物を買うつもりにしています。

さらにこれはいろいろな応用が効きます。たとえば夫のオナラ。今までは文句を言っていたましたが黙って百円貯金する、といった具合です。

この「百円貯金」で私は精神的にどんなに救われたかしれません。ちょっとした事で人生楽しくなるなあと感じています。

私の買物 マップ作り

東京都新宿区●時尾松子

たまにデパートへ行くと目的の品を買う売場を探すだけで疲れてしまうことが多い。せめて食品売場だけでも能率的に買物

ができないものかと考えた末、自分流マップを作ってみた。まず大きめの紙に行きつけのデパートの地下売場を思い出しながら、階段やエスカレーター、出入口の位置をしっかりと記入し、あとは自分が気に入った食べものを見つける度にその店の大体の場所を書きこんでゆくのである。それだけのことだが、

こうして地図が頭の中に入っていると、どんなに人混みの中にもあまり迷わずに買物が出て来ることはたしかだ。もともと地図大好き人間の私は乗物に乗ってはじめての地へ出かけた折など、帰宅したらまず地図をひろげてその道順や方角を確かめる癖があり、土地勘はできるだけ身につけたいと心がけている。地図を見ることから作る楽しさも知ったので、この次は東京駅地下街の自分流マップ作りに挑戦してみるつもりだ。

自費出版は

“わいふ”へどうぞ！

“わいふ”編集部では自費出版の製作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

費用はモノによりいろいろ違いますが、市販よりは確実に安いのです。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。イラストも用意できますし、文章をお書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

人生の記念にご計画なさってはいかがでしょう。



時事放談

いじめ

木村 木村澄子です。単位制の通信制高校で教員をしています。

早乙女 早乙女です。久しぶりに「わいふ」に伺いました。古い話ですけど「八路軍とともに」のころに、「わいふ」にイラストを少し描いておりました。

友納 友納です。入会してから今号で三冊目という新参者です。この間いじめの問題で投稿して載せていただいたんですけど、皆さんの意見を伺いたくて参加しました。

菊池 菊池裕子と申します。まだ一年足らずですが、「わいふ」で仕事をさせていただいています。今回のテーマはぜひ出たいと思って参加しました。

守るのは親しかいない

司会 じゃ、始めましょう。いじめについて皆さん、いろいろおっしゃりたいことがあると思うので、まず最初に「自分並びに

お子さんの体験からお話してください。

友納 うちは三人男の子がおりまして、二番目の子供が、今は十七歳ですけど、中一のときにいじめられました。

最初はケンカのような形から入っていつて、殴る、蹴るはなかったけれど精神的なイヤガラセをされた。

最初は「がんばんなさいよ、男なんだしね」と、親はケンカのつもりで様子を見ていたんです。それがだんだんひどくなって

出席者	菊池裕子 木村澄子 早乙女光子 友納けい子
編集部	和田好子
司会	田中喜美子

きて、最後には相手の子がうちの子の味方といわれる子を全部潰しに掛かった。

「お前の味方は一人もいなくなっただんだけ謝れ」と攻めてきたらしいんですね。

本人は謝ったことでもものすごい絶望感を味わって、帰ってくるなり、「オレはもう駄目だ、もう終わりだ」とすごい顔をしているんです。

傷だらけでもないし、お金をせびり取られたというわけでもないけど、このままほっておいたら大変なことになる。私はその時に、今しかないと思っ先方に電話をしました。親御さんは夜遅くにしか帰ってこないで、主人と二人でその子呼び出



菊池裕子さん

して、マンシヨンの片隅で話しはじめたんです。

最初主人は殴るつもりで、胸ぐらをつかむところまでいったんですけど、その時に「事情も知らねえのに大きなこと言うんじゃないねえ」と、その子がすごい言葉で返してきたんです。「あ、これはまずい」と。

ここで殴ったら怨みしか残らないなと思っで、あとは私が引き受けて二時間近く話しただんです。

その子のことは小さいころから知っているし、問題の根は小学校のころからずっとあったんですね。体は大きいけど幼顔も残っている。

最初はすごく突っ張っていたのがだんだん子供の顔に戻ってきて、ああ、もういいかなと思っで、最後に「子供のケンカに親が出てくるとあんたは思っかもしれないけど、あんたがうちの子の味方をなくしてしまっただから、守れるのは親しかいないでしょ？ そう思わない？」って言ったら、黙ってうなずいたんです。家に帰った喉がかれちゃって、やっぱり怖かったのかなと思っしました。

それっきり何にもなかった。あとから専門家の本を読むと、直接親が会った話したりしちゃういけないと書いてあるんですが、私は話してよかったと思っっています。

最初は仲良しだった

司会 それは激烈な体験でしたな。

友納 その子の家もやはり事情があっで、どうもお母さんの影が見えてこない。お母さんがいなくて、お父さんは毎日帰りが遅いらしいんですね。

お父さんが後からどなり込んできて、「あなたはお子さんの事情を知っていますか？」と聞くと、ほとんど知らないんですよ。「それは聞いていない」「それは知らなかった」。でも「知っているつもりだ」って言い張る。最終的に「じゃあ学校へ行って話し合いましう」となったので、私は「やりましう」と。

その前に私は、学校を頼りにしようとは最初から思っでなかったんですけど、「知らなかった」とか「聞いてなかった」とは言わせたくなかったので、担任の先生に事

情を話しておいたんです。そのすぐ後に、こんな事態になっちゃった。

先生が当事者二人を呼び出して事情を聞いたなら、私があそこまで言った後ですから、彼も「分った。悪かった」と。うちの子も言いたい放題言って、「お互い言いたいことを言ったね。これからは仲良くしようね」という形で終わっちゃったんです。司会 最初のトラブルの原因は知っていますか？

友納 はい。小学校の三、四年のときに同じクラスで仲良しだったんですが、目つきや遊んでいる様子からして、何となくわがままな子かな、とは思っていたんですね。

でもそれは誰にでもあることだから深刻には考えていなかった。そのうちに、その子に独占欲が出てきて、うちの子が他の子と遊んでいると怒るようになり、束縛しはじめた。うちの子が嫌になって離れたら、それが面白くない。小学校の間もちょくちょく嫌がらせをしていたらしいんです。そのころは対等な関係だったんですが、そのうち相手のほうが体が大きくなって、子分もつきはじめた。

中学校に入ったとき、その子が他の子たちに嫌がらせを始めたんですね。ちょっとムカつく、態度の悪いやつを俺が懲らしめてやる、正義の味方になったつもりで。靴の中に画びょうを入れたり、脅迫状まがいの手紙を出したり、そういう嫌らしいやり方をはじめた。

うちの子はもともとおもしろく思ってたなかったもんだから、「何てことをしやがるんだ」と。そしたら矛先がこっちに向いてきたんですね。特定の出来事じゃなくて、今までの積み重ねだと思っています。

悪びれない子供たち

早乙女 うちの場合は十二年前のことですけど、ある時傷だらけになって帰ってきたんです。三人兄弟の末っ子で、中学一年の三学期のことでした。

二人の男の子が付き添って来て、「プロレスごっこをやりますよ」と。おばさん、ゴメンナサイ」と。洋服も泥だらけで、顔に三力所、背中に数力所、アザがあったんです。翌日は学校を休ませて医者



早乙女光子さん

に連れて行きました。脳波や骨には異常はなかったけれど、全治十日間の打撲症だと言われた。

本人に聞いても、あくまでもプロレスごっこだと言う。ところが一日休んで学校へ行く段になると、やはり様子がおかしいんですね。目の周りのアザがあまりにもひどいので眼帯をして、翌日は卒業生を送る会だったものですから、とにかく学校へ行った。

ところが、いじめに参加した子供たちのリーダー格の子から呼び出されて「本当のことを親にチクるなよ」と、脅されたんです。

それがわかったので、教頭先生に電話をして、休み時間などに注意してみてほしいと頼みました。

司会 担任じゃなかったのは、どうして？
早乙女 その日は休みだったんです。

担任の先生は、一番暴力をふるった子呼んで、作文を書かせたそうなんです。反省文を。そしたら「〇〇君に早乙女君をやっつけてくれと頼まれたので、仲間を集めてやった」と書いた。

司会 その前に、いじめたことは認めたわけね。

早乙女 いや、認めてないんです。

司会 認めてないのに、反省文というのはどうして？

早乙女 そうなんです。でも先生が呼んで職員室で書かせたら、書いたっていうんですよ。

和田 先生の前では認めたのかも知れないよ。

早乙女 兄と親とで本人を問い詰めて、誰にいじめられたのか、名前を全部言わせました。その中には送ってきた二人の子が入っているんですが、まず私はそこへ電話

をしました。

どんなふうにいるの子がケガをしたのかと聞いても、やっぱりプロレスこっこだと言う。Aの子もBの子も口を揃えたように言葉づらが全部同じ。これはおかしい、と。

送ってきた子のお母さんの一人はとても話の分かる方で、「これはいい機会だからお宅に息子を行かせるから叱ってくれ」とおっしゃるのね。でも一人だけ叱ったんじゃ片手落ちだから、全員を叱ることにしたんです。

ところが他の子たちは白状しないわけです。あくまでもシラをきる。道で会って



田中彌集長

も、まったく悪びれないでニコニコと挨拶をする。みんなやったことに対して悪いと思っていないんですよ。

一番暴力をふるった子の家に電話をして聞いても、作文には書いておきながら、あくまでもシラをきるわけです。

子供だけで解決できる問題じゃない

早乙女 そしたら長男が親に内緒で、その家に脅しをかけたんです。『あなたの息子が本当のことを言わなかったら、俺は東京中の暴走族を集めて、あなたの家の周りを夜通し走って眠らせないぞ』って。

親は怖くなってしまっただけで、今度は逆に担任に訴えた。それで担任がスッ飛んで来まして、やっと真相がわかった。いよいよ子供たちも本当のことを言ったわけですよ。

いじめを頼んだという子は、やはり友達さんと同じで、小さいときに仲良しだった子なんです。

司会 エーッ？

早乙女 近所で仲良しで、お互いにクラスで一番チビさんだったものですから、力関

係が同じくらいだったんですね。

ところが中学に入って、運動会でうちの子がちよっといい立場になってしまった。体重が軽いことから選ばれたりして、女の子たちが守る会を結成したらいいんです。

司会 アイドルになったわけね。

早乙女 そうです。仲良しだった子はおもしろくなくて、自分の力を誇示するために強い子になった。うちの息子からも、「あいつ、このごろ強いについて威張りはじめたから、一緒に学校へ行かないんだ」ということはチラッと聞いていました。

いじめを頼んだ子のお母さんが家に飛び込んできて、「こういうことは連帯責任ですよ。お母さんたちを集めて謝りに伺いますから」と、切り口上で言うんですよ。私は「お母さんたちに謝ってほしいんじゃない。子供たちに来てほしいんだ」と言っ

て、日にちを決めて子供たち全員に集まってもらいました。

うちの家族全員と子供たち六人とで向き合って話を聞いてみた。うちの子も運動会で活躍したことから気が大きくなって、クラブ活動で人がエラーをしたときにか

かったらしいんですね。子供たちはそれがおもしろくなかった、と。

「じゃ、君たちはそういう時に何も言わないでいるの?」と聞いたら、「やっぱり言う」って言うんですよ。「自分たちが同じことをしているのに、そんなことを言う資格はない。一人の子をみんなでやつけることはどう思うのか?」って聞いたら、みんな黙ってましたけどしばらくして、「やっぱり卑怯だと思っ」って口々に言う。「わかったら、もういいから帰りなさい」と言っ

て帰りました。私は解決した段階で経過報告を書いて、コピーを親と学校に送りました。あるお父さんから「子供のケンカに親が出て……」と電話がかかってきましたけど、「子供だけで解決できる問題じゃないと思いますから」と言っ

て、突っぱねました。担任の先生は、合気道をやってて力の強い子と、頼んだ張本人の二人だけは、クラス替えがあっても三年まで自分のクラスに連れていきましたね。

張本人の、一番親しかった子のお母さんとは半年くらい気まずかったですけど仲直

りして、子供同士も仲良くなった。おまけにその子は、それ以降非常に真面目になって、成績もどんどん上がって、この間とていい会社へ就職したそうです。お母さんが喜んで、「ああいうことがあって、あの子にとって勉強になってとてもよかった」って電話をかけてきてくださった。

いじめで自殺する事件が起こるたびに、いつも心が痛むんですが、ここにくるまでにどうして親が手を出さなかったのか、歯がゆく思います。

司会 最初子供は隠すんですものね。そのあとで親がどうするか。今の話は大変示唆に富むお話でした。

嫌なら嫌と言える子に

菊池 うちの息子は現在中二ですけど、小三のときに登校拒否になったんです。

私は仕事をしていたので実家の母に留守番を頼んでいたら、家で楽しく遊んでいるっていうわけですよ。でも何かある、おかしい。そしたら、いじめられているということがわかった。

和田 それは本人が言ったの？

菊池 言いました。最初はなにも言わなかったけど、聞き出すまでに一週間ぐらいかかったかな。急いで『親業』の本を読んで勉強して、聞き出すことに成功した。

相手は保育園から一緒の子なの。よく知っている子だった。向こうは遊びたくて、うちの子は嫌だと言えなくてまいたり逃げたりしていた。すると、追いかけてくる。本人にとってはいじめられてることになったわけです。

担任は女性で、子育て真っ最中の三十代の先生だったんですけど、「学校に来ないと指導できないから、学校によこしてください」と言っんですよ。私はカッときて、「こんなに脅えているのに行かせられませんか。子供が行くと言うまでは行かせません」と言ったら、先生はビックリした。初めての体験だったんですけど、登校拒否は。

翌日、お母さんの言う通りだ、と。先生は教育センターに相談に行ったそうです。子供は電話一本でもビクビクしているの、夜の九時か十時過ぎに、子供が寝たこ

ろに先生と電話でやりとりをした。

先生が相手の子に聞いてみたら、いじめたことを認めたんですね。先生と一緒に謝ってあげるから〇〇君の家へ行こうと言って、本人を連れて家へ来てくれた。

その時に、練習してきたらしいんですけど、相手が「ボク、もうやらないから学校へ来てね」と言っただけです。普段はそんなことを言うような子じゃないんですけど、それを聞いた息子さんが安心したんですね。

それまでは、いくら先生が注意してくれるから行こうと言っても、「あいつは絶対先生の言うことを聞くやつじゃない」。保育園時代から知っているから「絶対陰でやるんだ」と言って信用しなかった。ところが本人が来て「やらない」と言ったら、それでOKだったわけです。

和田 それで問題は解決したわけですか。その子が裏切って、いじめるようなことはなかった？

菊池 なかった。

一緒に野球をしても、息子は「あいつはピッチャーばかりで、オレ嫌だ」と言う。たまにピッチャーを交代してもわざと

暴投して、取れない球を投げてきて、お前やっぱ下手だからだめだと言われるなど、少しずついじめの様子が分ってきた。

その子の家は父子家庭で、保育園時代からよく生活状況を知っているんですが、親に言ってもだめなんです。言え「オマエ、何でそんなことするんだ」と、暴力でやられる。六、七歳離れたお兄ちゃんからもやられる。それを学校で発散させていたんですね。

これは息子を強くするしかない。相手に期待しても無理だから、嫌なら嫌と言えるようにするしかないと思いました。

息子は性格的におとなしくて、家の中でもケンカの経験やどなられたことがない。考えてみたら、牛乳を飲みたくても「お母さん、牛乳ちょうだい」ということも言わない子だったの。

私も、いい子におとなしくとか、人の気持ちかわかる子にと思って、あまりたくましく育てなかった。これは私が対応を変えなきゃいけないと思いましたね。言えるまで待つ、と。それ以来、いっさい口を閉じた。

司会 先回りして言わない。
菊池 言わない。

例えば、「今度の日曜日に〇〇へ行こうと思うけど、どうする？」と聞くと、息子はその場で答えないで、「じゃ、考えとく」って言うんですよ。普通なら十分も考えれば返事が出るはずだと私なんか思うところ。が次の朝、「ボク、考えたんだけど、日曜日はナントカカントカで……」という答え方をしてくる。私の何十倍もの時間が必要なんだなとわかりました。それからしばらく待つようにしたんです。

誰かが強ければ
なんとかなる

司会 皆さん、本当にいい親ですね。

木村 うちの息子は小学校のとき、息子がいなかったら「どんなにクラスが静かか」と担任の先生に言われたくらいうるさい子だったんです。

ところが中学校へ入ったら、おとなしくするように言い聞かせていたことと腎臓が悪くなったことと重なって、「君って、シンちゃん（心身障害者の意）なの？」って

言われるくらい、おとなしくしていた。

謎の変身なんです。が、幸か不幸か、小学校時代に同じクラスだった子と一人も一緒にならなかつたんですけれどね。そのうちおとなしいためにいろんなところで、チョッカイを出されるようになってきて、ある日、遠足のバスの中で相手を思いきり叩きのめしてしまつた。

今度は番をはる強い側から目をつけられて呼び出された。息子はそれを先生にチクつた。先生が指導してくれて、番をはる強い子は遠くから眼は飛ばすけど、直接には何もしなかつた。

息子の場合何がよかつたかという点、人前でやり返したこと、先生がすぐ対応してくれたこと。指導力のある学校だったんです。

これからの話は一般論ですが、今までのお話を聞いていると、どなたも親が出ていっていますよね。親にそれだけの力があつた。結局、親か本人か教師か、どこかが強ければなんとかなる。

でも、いじめられている弱い子に強くなれと言っても、無理なんですよ。私も強く

なれと言いたいほうなんですけど、それは自分が強いから言えることであつて、強くない人に言っても無理なの。

いじている側といじめられている側とハッキリしない場合もたくさんあるし、まだるっこしいようだけれど中間的な子を指導するしかない。

大河内君の場合、川に顔をつけられたり恐喝されたり、これはもう刑事事件の範囲です。早乙女さんの場合も全治十日ですから警察に行つてもよかつた。

早乙女 表さたにしくなかつたんですね。

木村 そうですね。やはり教師も表さたにしくくない。何とか自分で指導しようとして、善良な教師ほど泥沼にはまっていくな。かりに教師に指導力があつたとしても、やる子はやるんですよ。悪いと分つてもいじめる。確信犯。そういう子は止められない。

で、強くない子はどうするんだろうか。そういうケースを親としてはどう考えたらいいのか。今日はそれを聞きたくて出席しました。

司会 ひとつ伺いたいの、先生なり親な



和田副編集長

りが、いじめっ子を猛烈に指導するというのは駄目なんですか。

木村 大したことのない場合だったらできると思いますが。現に私も指導したことがある。

使い走りをさせていた連中に「ふざけるんじゃない。買い物ぐらい自分で行け」とか「あいつを使うんじゃない」と、強力に指導したんですよ。

司会 そしたら…。

木村 もちろん言うことを聞きました。

司会 何年生？

木村 高校二年。

司会 よく聞いたわね。

木村 ええ。私は強い教師として君臨してましたから。

でもそれには後日談があって、連中は私が怖いもんだから、「お前、そばに来るんじゃないねえよ」と、その子を外すようになつた。そしたら今度は自分から「何か用はありませんか」っていく。

強力に指導して連中も言うことを聞いたけど、これは失敗のケースなの。本人に、あいつらの言うことを聞かないで対等につきあえ、というのはなかなか難しい。やっぱり自信がつくとか、嫌だと言える力がな

社会全体の合意を

司会 いろんなケースが出て来ました。今日は一般的に言われていることと逆のことがかなり出てきたなという気がします。

一般には親が介入してもいい結果が出ないと言われてますけど、初期の段階で親や教師が歯止めをかけることの必要性が、今まで言われてこなかったんじゃないか。

いじめに関して一つ言いたいのは、日本



今月は火災保険・地震保険Q&A
サービス月間です！

火災保険は意外にスグレモノ
知らないでいると損をするかも



親切・丁寧・シツコクない、わいふ指定代理店杉本保険事務所です ☎03-3260-4771



木村澄子さん

の親は子供にすごく甘いこと。「子供のことですもの」と言って、乱暴なことを平気でやらせておく。いじめられる側にはいじめられるだけの原因がある、とこうくる。物心のつかないころから、善悪の区別をしつかりつけることがまず必要だと思う。それをしていない、日本の親は。

木村 やっぱりね、親が立ち上がった場合は子供はいじめを乗り越えてますよ。親は、いじめられるのはすごく嫌なんだと、毅然と伝えていくことが大事だと思う。覚悟がいりますけど。

大河内君の場合、お母さんにはかわいそうな言い方だけど、ああいう時はパフォー

マンスでもいいから烈火のごとく怒らな
きゃ。

司会 いじめっ子の親のほうは、全然深刻に受けとめていないのよ。

「わいふ」に面白い投稿があったんだけど、自分の子供がいじめられる側になったときは「何よ、それっぽっちのことだ」と思っていた。ところがいじめられる側になったら、胸も張り裂けんばかりでいてもたってもいられないって。

菊池 やっぱり体験しないとわからないんですよ。

司会 一番大事なことは、どんな理由があらうといじめちゃいけない、ということをして社会全体に徹底させることなの。それと、いじめられないノウハウをうんとしこまな
きゃいけない。

ある数学の先生が子供にケンカの方法を教えた。いじめられそうになったら両手をブンブン水車のように回して、相手が近づいてこれないようにする。そういう身の守り方を教える必要があるわね。

和田 いじめの問題に関しては、今子供自身が非常に心が不健全になってきていると

思うのね。

大人だって心の不健全な人は多いですから社会全体の病気なんだけど、やはり子供は小さいときにいろんな経験をしないと自我が育たない。波風立たずに、自我がなくてもやっていけるような環境に置かれた子供は、いじめとかもめことに遭うと弱い。そういう自我形成不全と呼ばれる子供が非常に増えている。

早乙女 今日はあまり話題にならなかったんですけども、他人を笑い物にするテレビ番組が随分あります。中学生くらいの子供はそれをとてもおもしろがって見ているんですよ。当たりまえのこととして、罪悪感もなく見ている。その影響もあるんじゃないかしら。

司会 それはすごくあります。

和田 それに大人がハッキリした善悪観を示さない。大人の側に、子供に示すだけのイデオロギーがないんだよね。

まとめ・宮前 和

(次回の座談会のお知らせは、
一四九ページをごらんください)

父母と子の立場から教育・学校を考える

母と子

四月号

五〇〇円・千七六円

今月の視点

(見本誌(旧号)進呈)

新しい友・新しい担任

母と子 二月臨時増刊

一〇三〇円・千八四円

いじめの迷宮

私の意見

いじめ、いじめられの体験者、その母親や教師などからの手記、意見16通。

「いじめ」という迷宮 佐々木 光明

追いつめられる子どもと必要なこと

いじめの再生産システム 前田 功

娘をいじめで自殺させられたことによって、いじめられていた親からのメッセージ

いじめとわが国の社会文化構造 福田 雅章

いじめ事件への弁護士の間わり 児玉 勇二

いじめ事件裁判の見方 山岸 秀

裁判所の判断と教育の論理

資料

いじめ自殺への社会的対応

新聞報道で読む岡山県総社市での事件とその後

お申し込みは書店か母と子社へ

〒203 東京留米市中央町五四八
〒〇四二四一七四一九一二五

母と子社

女たちの情報紙

ふえみん
f e m i n

婦 人 民 主 新 聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先 婦人民主クラブ 週刊1ヵ月 750円(送料込)。

東京都渋谷区神宮前3-31-18 電話03(3402)3244, 3238

大阪市北区中崎西3-1-5 電話06(371)2429

アジア・おんな・はたらく・がつ・げんぱつ
たべもの・せっけん・がっこう



自分探ししているヒト この指とまれ!

あなたは母として妻として、
そして女性としてどんな生き方
を望みますか? 自分の考えを
言え、他人の意見をきける方、
私達の仲間になりませんか?

毎月発行のミニコミ紙「六分
の一ポケット」(通称ロクポ
ケ)での投稿バトルと、月一回
のトーク会で語り合いましょ
う。埼玉県上尾市を中心に近隣
の方、もちろん遠方で、ミニコ
ミ紙のみ希望の方もOKです。
ロクポケの簡単な経歴(とい

うほどでもないが)と、仲間の
ことをお知らせします。返送用
の封筒に八十円切手を貼り、左
記の住所に送付して下さい。気
軽に連絡下さい。

▼年会費千円

▼〒362埼玉県上尾市今泉八四一
六木村方 中川祐子(29歳)

展示会に作品を

展示できるものなら何でも

(絵・立体・文章・詩・CGそ
の他思いつく限り)という展覧
会をやります。参加してくれる
方、返信用封筒を送って下さ
い。

▼期日 七月二十五日〜三十日

▼場所 八王子市立中央図書館

地下(中央線西八王子
駅徒歩二、三分)

▼参加費 百円(パンフレット

のコピー代の足しに
します)

▼受付担当者募集

中学生以上なら子連れ親連れ
可。仕事は受付に座ること。ボ
ランティアですが。

▼〒193八王子市長房町五八八

一五〇 小宅昌枝

☎〇四二六・六六一・四一七

私のPR

「百姓天国」第九集を

地球百姓ネットワークでは、

元気な百姓達の手づくり本「百
姓天国」第九集を助富民協会よ
り発行しました。定価は千円。

第九集の特集は、「絵でつづ

る百姓の思い」「百姓天国と出
会い」「ミニコミ特集」など盛
りだくさんです。

百姓何十年のベテラン老農か
ら、脱サラ百姓、農協職員、若
者、主婦もメンバーです。個性
の農民大集合の本です。ぜひ日本
の農業を支えている人間の声を
聞いて下さい。



▼〒400山梨県甲府市中小河原一
一四一四三森本方 地球百姓
ネットワーク事務局

☎FAX〇五五二・四二一〇四二二

埼玉のあそび場

情報誌ができました

埼玉県および、近郊にお住ま
いの幼い子どもを育児中のみな
さん、この本さえあれば、あそ
び場に困ることは、もうありま
せん!

天気の日にお弁当持参ででか
けた公園の数々、雨の日の強
い味方の児童館や、お金をかけ
ずにでかけられるとっておきの
穴場情報など、埼玉県の七十八



件のおすすめスポットを紹介。

東京中心で、埼玉県の情報はほんのわずかという不満を抱いていた埼玉県在住の育児中のママ達が取材、編集をしました。

これまでのガイド本とは一味違う仕上がりになったはず。

三月中旬から書店に並んでいます。店頭で申し込みをするか、直接出版社に注文してください。

▼「子どもとでかける埼玉あそび場ガイド」

▼著者 すきっぷ・まむ(代表 杉山千佳)

▼発行 丸善メイツ(株)

▼定価 一五〇〇円

出版しました

「はじめの一步」



「はじめの一步」という本は、

幼い子を抱えて日々悪戦苦闘しているお母さんたちに、ぜひ手に取ってみてほしい本です。

●この人に会いたい(訪問インタビュー)

●子育て向き不向き(子育てに向いていると思いますか)

●自分にこほうび(こほうびありますか)

●夫も人の子・人の親(妻か子どもか、夫はどちらを選ぶと思いますか/男性保育者から見た男親の子育て)

●今これに夢中(子育てから見つけたライフワーク、その体験記) A5判六十四ページ五〇〇円

▼申し込み、問い合わせは「ぐるーぶ・さくら」飯塚真里まで
☎〇七五・六三三・一四七九

「WAC介護教室」に

参加しませんか

草の根ネットワーク型の中高

年団体であるWACが、高齢社会

会に対応する多様な活動の一環としてホームヘルパー養成講座(三級課程)を開きます。

グループで老人食の献立を考えたり、ロールプレイゲームをしたりと、講座の内容も工夫されています。

WACが開発した高齢者疑似体験プログラム「うらしま太郎」も導入されており、これまでの受講生からも大きな反響を呼びました。男性の受講者が年々増加しているのもうれしく

ところです。

修了者には東京都知事認定の修了証書がでます。

▼日時 五月十三日から七月八日までの毎土曜日(午前十時~十六時)

▼場所 同和病院集会室 JR

御茶ノ水駅都営新宿線小川町駅
▼参加費 二万九千円(WAC
会員は二万六千円)

☎〇三・五四六〇・〇五二一

社団法人長寿社会文化協会(WAC) 石井まち子

「政治っておもしろい」

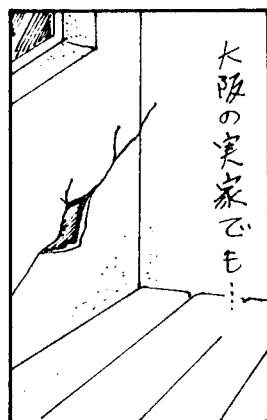
ついでに面白本をばいぞ

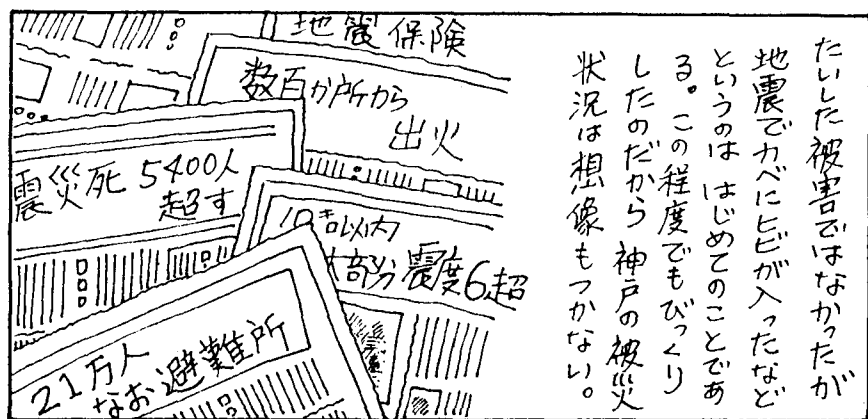
文京区の区議会議員をしている永井よし子さんが、どうしても自分が区議になったか、そもその出発点からを自分史的につづった一〇〇ページのブックレットです。これがホントに面白い!

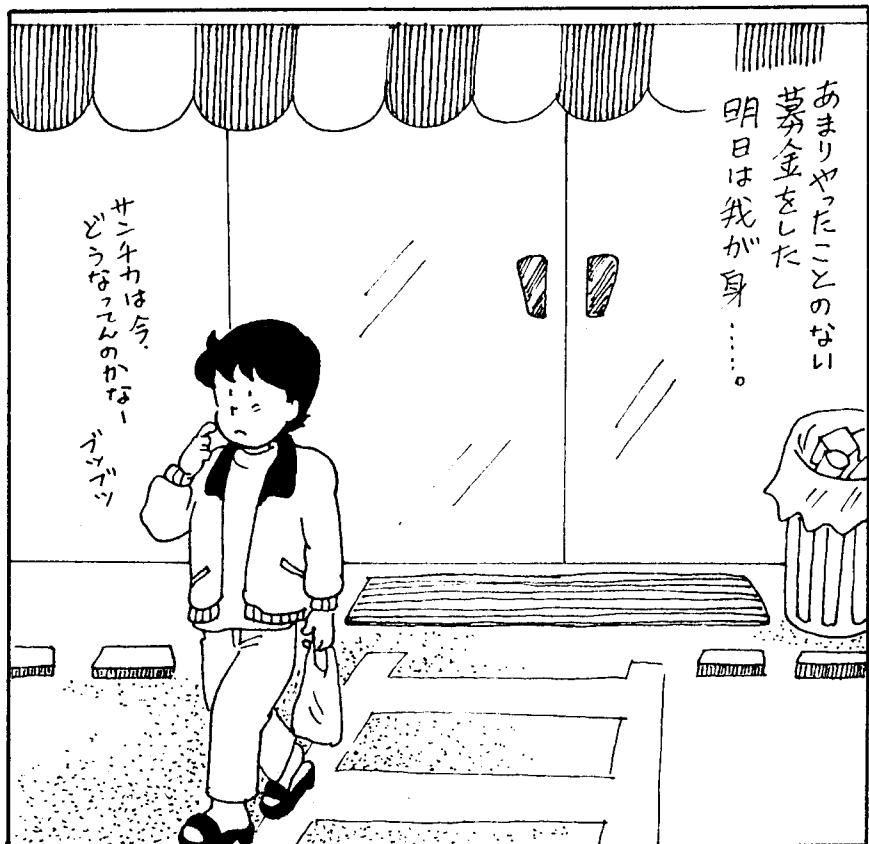
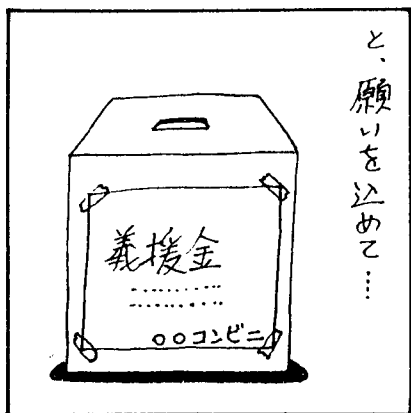
私たちと同じ主婦がここまでやれる、自分も政治をやれる、いややんなきゃ!と思えるすごい本。カタツムリ社から出ています。ご注文はFAXで〇三二・二二一・三六七三九、カタツムリ社へどうぞ。 田中喜美子











Femme

ファミテイク

Politique

編集室より

いまが、政治の時代

田中喜美子

一昨年の八月、細川内閣が誕生したとき、女たちは燃えました。ドラマを見る感覚でテレビニュースにかじりつきました。

そしていま。みんながまた、白けはじめています。「わいふ」に顔を出すマスコミの若い女性記者なども、「白けちゃ

いましたね」なんていっています。でも、違うのです。

私は女たちにとって、いまこそほんものの政治の季節がやってきたように思います。あっちでも、こっちでも、女たちがじわじわ燃えはじめています。

私もその一人。一昨年の九月から、三

カ月に一度ずつ「ファミ・ポリテイク」(政治的女性という意味です)という薄っぺらな政治冊子を発行し始めました。どうしてそんな気持ちになったのか、その理由をお伝えしたいと思います。

★

二十年間「わいふ」を編集しつづけてきて、私は女の生活が、変わったように見えて実は少しも変わっていないのを感じするようになりました。

学校を卒業すると、女も男と同じように働きます。しかし三十歳前後で結婚して、子どもが生まれるとたいいていの人が家に入ってしまう。そして子どもの手が離れた後、また働きはじめます。

でもその収入はたいいてい夫の半分以下。家事育児はあいかわらず引き受けています。家にいる人はもちろんのことです。

この生活を十年以上つづけていると、ほとんどの妻にとって夫は、「元気で留守がよい」という人になってきます。そのほうがのびのび生活できますものね。

男性の生活はまさに働き蟻の世界です。見てみると気の毒です。女の生活も

子どもの小さいときはたいへんですけれど、その時期さえ過ぎてしまえば、「女に生まれてよかった! ラクなもの」とたくさんの方が思っています。

でも四十もなかばをすぎると、ラクとばかりいってはいられません。老親の介護が待っています。二人の親だけでなく、もしかすると四人の親の介護を引き受けることにもなりかねません。これから「介護世代」となる団塊の世代の人々のほとんどが二人きょうだいだからです。

「わいふ」にはここ四、五年、老いた親が倒れた人たちの投稿がひっきりなしに寄せられてきます。読む度に、負担のすべてが女の肩にかかって、誰一人助けてくれない現実の不合理を痛感せずにはいられません。

★

最近私の目には、こうしたこの状況がはっきり政治的に作られていることが見えてきました。女性は安く使われ、最終的には高齢社会の担い手として期待されているのです。世界の先進国のなかで、こんな国は珍しいのです。

産業社会のなかで、男だけが死ぬほど働き、生む性を持っている女がそこから

弾きとばされ、後始末ばかりを背負わされている日本。男女共生の社会がどうして日本にはできないのか。いろいろな原因がありますが、一つには、政治に女の視点がほとんど入っていないからです。

男たちだけが政治を握っているうちには、死ぬほど男性をこき使い、暴進していく企業のあり方に歯止めをかけることはできません。環境破壊と、人間破壊の企業社会を変えることはできません。

いま、政治は大きな転換期に差しかかっています。自然と共生しながら、私たちの一人一人が、弱い人も、強い人も、助けあい、支えあって安心して生きていける社会。それを実現するために

は、私たちのなかから、一人でも多くの女性議員を政治の社会に送りこむ以外に方法はありません。そのためにはまず、私たちの一人一人が、「政治って面白い」と思い、政治に関心をよせることが必要なのだと思います。

★

過去十八カ月、六冊の「ファム」を作ってみて気がついたことを、この号でダイジェストしてお知らせしましょう。

①政治資金規制法案は完全な骨抜きになっています。前よりはすこしましには

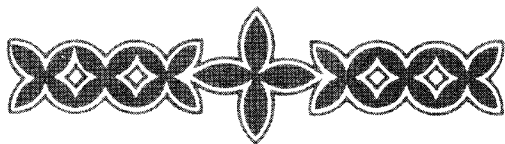
なっていますが、企業献金を許していること、何よりも後援会同士の献金のやりとりを許しているからです。ここを規制しないと、お金の流れがつかめません。

②行政の手になる環境破壊の動きは一向にとまっています。長良川河口堰は猛烈な反対にもかかわらず、やはり強行されそうです。最近目立つのは「林業を振興する」のかけ声のもとに行なわれている大規模林道の開通工事です。これはすさまじい自然破壊を伴います。自然破壊の土建屋政治は、予算の段階から変えていかないととりません。

③地方議会で、イキのいい女たちが少しずつ動きだしています。男の議員のあまりのいい加減さに怒りだした女たちが増えてきました。いいですねえ。

④政党の勉強をしてみても、自民党ばかりがそれほど悪い党、というわけではないことがわかりました。ダメというなら他の政党もダメ、マスコミもダメ、政治に無関心な私たちもダメなのです。

次の号から、もっと具体的に、私たちのアンテナにひっかったトピックニュースをお送りすることにします。みなさまもお声を寄せてください。ではまた。



フリースペース



福井県という異国

埼玉県川口市 杉山 千佳

先日、名古屋の大学で産業心理学の講師をしている女性と話をした時のことである。

私が福井県の出身であることを告げると、「福井の女性はよく働くわよね」と半ばあきれたように言われた。

女性の就業率は全国一位。ダントツすぎて「データにもならない」そうである。

さもあらん！ 私は心の中で深くうなずいた。

福井県は地味な県だ。どこにあるのかピンとこない人も多いだろう。そういう人は地図で探していただくとして、とにかく海が美しく、緑が豊かで、食べ物なんでもおいしい、温泉が至る所に湧き出る、ぜいたくな所である。

コシヒカリの産地でもあるが、せんい、漆器、メガネなど地場産業もさかんで県内

至る所に小さな工場や会社がある。経営者は常に働き手を求め、女たちはそれに応えた。

「で、どちらにお勤め？」
「があいさつがわりである。」

よほどの勇氣と事情と、ポリシーを持たない限り、専業主婦にはなれない。働かないで家にいると、

「あそこ奥さん、昼間なんにもせんと、ぼーっとテレビ見てる」

と、後ろ指をさされる。これはいたたまれない。近所への体面もあって、姑は進んで孫の面倒を買ってでるし、嫁も当然働く。

そうした土地柄、私の母ももちろん、転職を繰り返しながら、常に働いていた。

私が妊娠して、勤めていた会社を不本意ながら辞めたと告げるのが一番嫌だった相手は母だったし、事実母が一番ひどく私をなじった。

「どうして我慢できなかったのか」

「何のため（汗水流して働いて）大学まで出したのか。情けない情けない」

母は（汗水流して）とは言わなかったが、私にはそう聞こえた。

何よ。東京には主婦を仕事にしている人は「ごまん」といふし、それをとがめる人は誰もいないし、「三歳までは母の手で」なんて説を唱える人だっているんだから。

と、必死で自分に言い聞かせたが、「専業主婦」の毎日は、なんと居心地が悪かったことか。

こちらでは「主婦が働きに出ることは是非か非か」みたいなことがどこかのテレビで、どこかの雑誌で必ず取り上げられている。それは私にはとても不思議だし、理解できないことである。

主婦が働くことがそんなに大問題なのか。福井の主婦たちは「私は働く！」なんてがんばる必要も、自己防衛する必要も、周囲を説き伏せる必要もなく、特別のキャリアや資格を持たなくても自然に、あたり前に働いているのに。

「男は仕事。女は家庭」などと非常識なことを言いだす男は福井県にはいない。

「共働きの家庭の子供は不良になる」なんてふざけるな。

東京は遅れてるな、というのが正直な私

の感想である。働きたがっている人が「三歳児神話」なるもので自分を縛り、苦しんでいるのを見ると、気の毒を通り越して、バカみたいにさえる。

主婦が働くことに反対する人たちの、根拠のない言葉をことごとく無視し、鼻の先でふん！と笑う強さを、私は福井県の女性たちからもった。職場での男女差別の悔しさや、雇用条件のあてない会社勤めの不安定さや、不況のおおりを真っ先に受けてしまうやりきれなさを、とうの昔から知っていた。なんとかけがえない財産だろう。

今、私は「母とは違う働き方」を模索中である。勤めに出ないで、フリーでものを書く私を母はなかなか認めない。

「フルでちゃんと働けばもっと収入になるのに」

哀しいことに、私自身にとっても「専業主婦」でいる時と同じくらい、「フリー」は居心地が悪い。福井にいる友人たちに比べたら、自分は甘いことやりに思ってしまう。この、福井県という環境が私にインプットした「後ろめたさ」やら、「申し訳なさ」

やら、それらを必死で無視しようとするしただかさやら、開き直りやら、悔しさが、今の、これからの私のエネルギーになることだけは間違いない。



思いがけない展開

東京都台東区 高梨 陽子（52歳）

昨年の年明け早々、両足に皮膚一枚ごらの感覚で異常を感じ、三月ごろになるとしびれ感が少し出てきた。

友人が更年期障害ではないかというので、五月の連休明けから開業医の内科へ一日置きに通院した。温灸と鍼の効果があるという電気鍼の治療を受けたが、二カ月経っても一向に治らない。かえってしびれ感が強くなり冷感もあるようになってしまった。

整形外科へ変わることにした。X線検査の結果は腰椎変形症で神経が圧迫されてしびれているという。土・日の休診日以外はほとんど毎日通院して、二カ月過ぎても症状が好転しなかった。右足があまり上がらなくなり、道路のちよとした段差でもつまずきそうになり何度も肝を冷やす思いをする。大きな病院で受診したほうがいいと

考えていた。

九月二十四日（土）に、一泊二日で高校のクラス会が出身地で行なわれ出席した。その晩お小水が出なくなり、一時間ごとにトイレにいき二十分ほど頑張るのだが、全然出ないのでお腹が張って苦しくなるばかりだった。

みんなに迷惑をかけたくないと思い、夜明けをじっと待っていたが、時間の経つのが非常にもどかしく感じた。

六時過ぎたら同室の幹事が目を覚ました。身支度の済むのを待って「導尿してもらわないとダメなようなので、タクシーを呼んで欲しい」とお願いする。

幹事が地元の人なので救急センターへ連絡を取り、ご主人の車で送っていただいた。すぐに尿検査の結果が出て異常はなしであった。泌尿器科の医師が「どうして、お小水が出なくなったのだろう」と首を傾げる。お腹から下にしびれ感があることを話すと、「そちらのほうからきているかもしれないから、整形外科でこの状態を話して受診するように」と言う。その後の排尿は順調であった。

翌日、文京区の私大付属病院へ紹介状なしで飛び込んだ。首から腰まで背中全体のX線検査の結果、金曜日の脊椎外来でもう一度専門医師の診断を受けることになった。脊椎外来の医師は「背中におできがあるので入院して詳しく検査しましょう」と事もなげに言い、「検査は月曜日になります。明日の午後一時に入院するように」と続く。急きょ入院となり戸惑うばかりであった。

帰宅して夫に「明日入院」の話をして、すぐに入院に必要なものの買い物で出かけた。家庭内のことは何もする暇がなかったし、精神的にもゆとりがなかった。

十月一日午後一時、七階の整形外科に入院。当日の夕方には歩行が禁止されて車椅子使用を言われる。転倒して骨折する事を懸念してとのことで、すっかり病人人になってしまったような気がした。

月曜日の検査はMRI（超磁気共鳴診断装置）検査と脊髄に造影剤を注入するX線透視検査であった。MRI検査は大学病院では二カ月先まで予約でいっぱいなので、急ぎの場合は外部の病院で検査を受けるこ

となる。

足立区江北の病院で受検するために主治医の紹介状を持参するのだが、前日に病院の地図と共に封筒に入れて渡された。

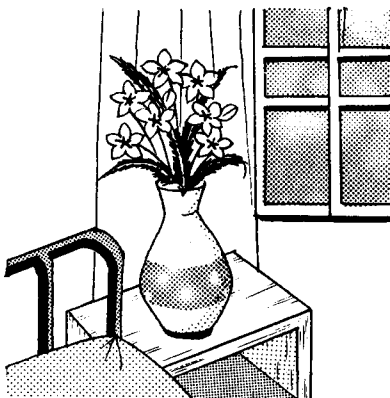
封がしてないので書類を見てしまった。「胸髄腫瘍の疑い？」という文字を目の当たりにして、一瞬のうちにガンを思い、死ぬかも知れないと不安感が募るばかりであった。その夜はほとんど眠れない状態となる。

医師に「おでき」と言われた時は「腫瘍」という言葉は全然頭になかったのである。おできと言えば皮膚の表面にできたものしか頭に浮かんでこなかったが、腫瘍も同じものであった。

月曜日の午前中はMRI検査であったが、ドーム型の機器のなかに全身を入れる。およそ一時間ほどの検査中は少しでも動いてはいけないと言われた。「ガガガ」、ドンドン、カーンカーン」など工事現場のようなものすごい音がした。この検査はもう二度としたくない。午後のX線透視検査後は翌朝の六時まで安静であった。検査結果について医師からの説明は夫一人

が受けた。

やはり「胸髄腫瘍」であった。医師に「奥さんには病名は伝えてないので、そのつもりで」と言われたそうである。「腫瘍の転移は考えられないので七割から八割は良性であろう」と言うことであった。



この病気は家庭医学書によると十万人に一名ないし二名の発生率であり、入院した大学病院でも年間四、五例あるかどうかという。足のしびれの元凶は第七胸椎の周辺にある腫瘍であり、排泄障害が特徴である。

手術日は十一日と決まったが、それ以前

でも排泄障害などの症状が出たら即手術の態勢がとられた。だが、手術日まで容態の急変はなかったのだ、その間は手術に備えて血液、心電図、CTなどのほかに種々の検査が行なわれた。

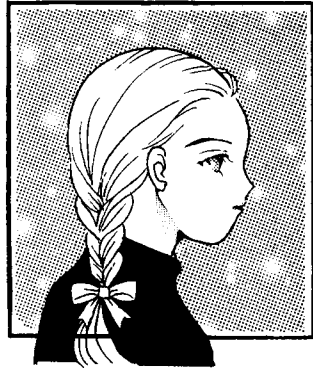
手術までの一週間は「どうして私が腫瘍になるの!」「いつまで生きられるだろうか」「全身麻酔でショック死することもあり、意識が戻らずに植物人間になってしまふこともある」などと次々に怒り、恐怖、不安が渦巻く状態であった。

いよいよ手術日の当日になると、ジタバタしても仕方がないと開き直りの気持ちが強くなり、医師を信頼して全てをお任せする以外に方法がないと覚悟を決める。

九時の手術開始だが、七時半には病室を出ることになった。夫・長男・次男の三人が七時ごろに病室に来て、三階の手術室入口まで付き添う。

まず、手術準備室で氏名と血液型の確認が行なわれた後で腕に太い注射が打たれた。この注射は今まで経験したことのない痛さであり、数日間痛みが残っていた。

注射後に手術室へ向かうときに看護婦さ



んが「十三号室です」と言っているのを聞いて、「いやな番号だ」と思った。

手術室に入ってから新米らしい麻酔医が点滴の針がいらないので四苦八苦していたこと、手術台が頭部、胸の部分、足の部分と三つに分かれているのを見て「こんな物があったの?」と思ったことまでしか覚えていない。

腫瘍を摘出するために背中を十五センチほど切開し、ホッチキスのようなもので二十針止めたそうである。およそ三時間の手術であつたらしい。

麻酔が完全に覚めたと自覚したのは翌朝

の七時ごろであり、入院してから十日ほどの睡眠不足が解消されたような気がした。

術後二週間は安静期間であり、一番辛いと思ったのは排泄の世話を受けることであつた。看護婦さんが一度も嫌な顔もしないで優しく世話をしてくださる姿には頭が下がる。

腫瘍の組織検査の結果が二週間後に出て、良性であつたので安堵の胸をなで下ろす。

術後十日ほどで背中の針を抜き、二週間後の十月二十五日から車椅子でリハビリ室まで行つて歩行訓練が始まつた。

リハビリ室の担当医は「歩ける筋力があるので歩けるはずです。自信を持って歩いてみなさい」と言うが、自力で歩ける自信がなかなか持てなかつた。

三日後には心もとなない足の運びだが自力で歩けるようになり、その時は感激であつた。だが、病棟での生活はしばらく車椅子であり、次の段階では赤ちゃんの歩行器のようなのだが、半円形のキャスターを用いていた。やっと病棟内での自力歩行の許可が主治医から出たのは十一月五日で

あつた。

入院したついでに痔の手術も受けることにした。次男の出産後から二十一年間患っていたが、あまり痛みがなかったので我慢ができたのである。排泄の世話を受けたときに看護婦さんが「痛くないの」と心配してくださるので、思い切つて手術を受ける決心をした。

この手術は一日だけの安静であつたが、二週間ほどは排便のたびに痛いので泣く思いであつた。

自力歩行が全館フリーの許可が出たのは十一月十二日であつた。

退院日は十一月十七日の午前十一時ごろと決まつた。およそ五十日振りに自宅に戻つたが、台所の感じがちょっと違うような気がしたし、部屋に入つても違和感があつた。すっかり病院の生活に馴染んでいづらい。

入院中の家事は夫、長男、次男の三人で分担していたという。家の中がキチンと片づいているのを見て、三人で協力して助け合つて頑張っていたことが分かつた。思わず涙がこぼれた。

一日も早く自宅に戻り思い切りゆっくり眠りたいと思っていたが、その晩は興奮気味であり眠れなかったのである。

退院して二カ月が過ぎた今でも、家事は半人前である。重い物が持てないので買い物のはほとんどは夫に頼み、肉や魚などは自宅から三百メートル以内の店へ出かける。

手術後から上半身はコルセットを二十四時間着用していたが、昨年末には外出時以外は外してもよくなったのでだいぶ楽になった。

医師の話では「手当てがもう少し遅れたら車椅子生活になるところだった」という。足のしびれ感は手術後になくなっていく。走ることはもちろんのこと急ぎ足もできないが、二本の足で歩けることに感謝して焦らずのんびりいこうと肝に銘じた。

背中の痛みは時折襲うが、暖かくなるまでしばらくの辛抱と思っている。

丈夫が取り柄で元氣印の生活から一変して、思いがけない入院、手術という展開に慌てふためいたが、入院中の約五十日間にはいろいろなことを体験し、これからの人生をじっくり考える機会となった。

医師、看護婦、患者、友人、家族など多くの人々の暖かい励ましや優しさに感謝している。

疎開した子どもたち

東京都世田谷区 本庄たよ子

「地震疎開」という言葉を耳にした。阪神大震災後、日常生活が出来るようになるまで両親と離れ、一時的に祖父母や縁者を頼って生活している子どもたちのことである。

苛酷な暮らしの中で、懸命に生きておられる両親と子どもたちの生活をテレビが映し出している。「がんばってね」と電話口で励ましている母親が涙声となるのに、子どものほうは「お母さんにはわるいけど、スキーやったりとても楽しいよ。もっと長くいても大丈夫だよ」などと、けなげに答えている。幸い、子どもたちは町や小学校の新しい友人たちに暖かく迎え入れていただいている様子である。

私は、この親と子に五十年前の父母と妹をだぶらせて見ていた。それは戦争に依る学童疎開だった。疎開には、縁故疎開といって地方の親類を頼ってゆくものと、小学校の児童と教師が集団でゆく学童疎開があった。我家には地方に頼る親類がなく、末の妹は学童疎開に参加することとなった。

出発は夜だった。小学校の庭には防空頭巾を肩に下げ、背負えるだけの衣類と学用品をリュックに背負った子どもたちが整列していた。ちょうど月夜の晩だったので、不安の中にもちょっぴり遠足気分の子どもたちを親たちは必死の面持ちで見つめていた。

近くの駅でいよいよ別れるとき、父が突然子どもたちの列をかき分けて妹に近づくと、その手をとって握りしめた。父は娘に優しくしたが、手を握るなどということをしたのは初めてであった。

幼ない子を空襲から救うために、親は子どもを見知らぬ土地に送るのである。二度と逢えないかもしれない。そのとき、この子はどのようにして生きてゆくのだろうか

……と。今、父の気持ちを思いやると私も胸がつまる。

半年ほど過ぎて、母が面会に行った。面会は交替制で勝手に行くことは許されなかったから、待ちかねて待ちかねてようやくの思いで母は出かけて行ったのだった。そこで見たものは、手足は霜焼けでくずれ、しらみにたかられ、飢えに苦しむ子どもたちだった。

疎開した翌日、朝日新聞に妹たちの写真が載っていた。皆にこにこ顔で大きな口もろこしを一本ずつハーモニカのように口に当てていた。めがねをかけた妹も真中に白い歯を見せて笑っていた。その写真に親たちはどんなに慰められただろう。毎日眺めていたのではなからうか。

しかし妹は「あのあと、とうもろこしはまた集められ小さく切られて配られた」と言ったそうだ。「欲しがりません、勝つまでは」を斉唱させられて、軍国の少女は手紙にはいつも「お国のために私たちもがんばります」と書いてきた。

母は、面会のあと、ひとりごとを言うようになった。お風呂を焚きながら、靴下の

継ぎ当てをしながら「マリ子！ がんばろうねマリ子！」とつぶやくのである。それは、娘に呼びかける優しさの溢れる声でもあったが、ときには母が母自身を励ましているともとれる、激しくほとばしるようなつぶやきにもなった。

妹が帰ってきて戦争が終っても母は「マリ子！」をくりかえし言った。口癖になっってしまったのである。私と二人でいるときにも、ふっと「マリ子」が出て私が「たまにはタヨ子も言ったら」などとからかうと、「ドッコイショの代りかもね」と笑っていた。

両親にとって妹の疎開は辛いことだったと思う。

そして今、地震疎開をしている子どもたちがいる。想像もつかないほどの怖ろしい体験をして親と離れているのだ。一日も早く神戸に戻り、家族といっしょに暮せる日がきますように。この大災害をのりこえて新しい神戸の町が復興してゆくのを、この子どもたちがしっかりと見届けてゆくよう心から願わずにはいられない。

（え・梅村 蒔）

事務の窓口から

たとえばあなたの誌代が二五三号までで終わるとき、こちらでは二五三号に継続依頼の振込用紙を挟んでお送りします。その後ご連絡がない場合、次号にもう一度振込用紙を挟みますが、それでもご連絡がないと以後うち切りとさせていただきます。

なお郵便局にお振込みくださっても、こちらに届いて事務処理が済むまで、少なくとも十日くらいかかるので、すでに振込んだのにまた用紙がきたということもあるかと思いますが、どうかご了承ください。

この場合、二度払いをされる方が時々ありますので、何号まで誌代を払込んだかの確認をどうぞお忘れなく。

振込受領書も一年間は保存してください。二五三号から誌代値上げとなりましたが、二五二号以前に一年分振込まれた方は、その誌代が切れるまで旧料金です。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

次号投稿募集

●特集テーマ原稿

次号の特集テーマは「きょうだいは他人のはじまり」です。

旧約聖書のカインとアベルの話にもあるように、きょうだいの一方が他の一人を敵視するということは、古今東西どんな社会にもあることのようにです。

そんなドラマティックな骨肉の争いでなくとも、子どものときから仲が悪く、最終的には冠婚葬祭のとき顔を合わせるだけのきょうだい仲になってしまった、などということはよく見聞します。

あるいはあんなに仲がよかったのに結婚した相手によって、昔のきょうだいとは思えないヒトになってしまったという嘆きもあるでしょう。

たいていの場合、きょうだい仲の悪いのは、親の不公平な扱いに原因があるのですが、そんなことも含めてあなたの「きょうだいは他人のはじまり」の実体験を語ってください。

分量四百字詰原稿用紙で十枚〜十五枚。
締め切り四月二十五日。

●時事放談

今回は「社会党——この奇妙な政党」です。

政権を取って以来、社会党は逆に、消滅の危機に瀕している、ともいわれていきます。悪しざまな批評ばかりがひびいてくる昨今ですが、終戦後から約半世紀、この党に思いを寄せる人たちがかなりいたことはまぎれもない事実です。

政権を取ってからの変質ぶりは、目をおおわばかりですが、あの変質は、そもそももともと潜在していたものなのか、それとも政権亡者になると、すべての党があなってしまうのか。

そんなことも含めて、これまで私たちが社会党に何を期待していたのか、いま何を感しているのか、縦横に語っていただきたいと思っています。

日時 四月十九日(水)午後二時

場所 わいふ分室 地下鉄東西線神楽坂

駅より徒歩十二分

ご出席の方は四月十七日までに編集部へ電話でお申し込みください。

ご要望がしばしばあるので、原稿の添削をすることにしました。添削して欲しい方は、左記の要領でお送りください。

●添削のみ希望の方は、原稿の最初に「添削のみ希望」と赤字で書くこと。

●「わいふ」に投稿して、さらに添削希望の方は「投稿、添削も希望」と原稿の最初に赤字で書くこと。

●投稿して、ボツになった場合のみ添削して欲しい方は、「ボツのときは添削希望」と、原稿の最初に赤字で書くこと。

添削料は四百字詰原稿用紙一枚につき(ワープロ原稿は20字×20行で打つこと)二千円いただきます。返送の際振替用紙を入れて、返送料共にご請求します。

誤字、仮名違い、文法、文脈などの誤りを正したうえ、編集長か副編集長が講評をいたします。

編集長の著書「書きたい女たちへ」も、基礎を勉強したい方にはおすすめです。ご注文ください。

わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所(郵便番号、都道府県名から)、氏名、会員番号を明記のこ
と。誌上匿名・ペンネーム可。

次のコラムを設けています。

●エッセイスト・クラブ
(二六〇〇字まで)

びたりとキマった文章、豊かな内容を持
った随筆をお寄せください。

●ズバリ一言(二六〇〇字まで)

オピニオン、評論、改善策の提案などの
欄。政治、事件、芸術から身辺の商品、
サービス、その他細かいことまで何でも遠

慮なく言うてください。ただしなるべくあ
なた独自の考えを。

●マイジョブ・マイホビー
(二六〇〇字まで)

本格的な職業生活から、パート、アルバ
イト、内職までの仕事について、また楽し
み、生きがいとしての趣味について、いず
れにせよあなたの活動報告をお待ちしま
す。

●家族と私(二六〇〇字まで)

一つ屋根の下にいる夫や子供はもとよ
り、別居している親(舅・姑も含み)、成
人して離れた子供、他人の始まりといわれ
る兄弟姉妹など、とにかく「身内」とあな
たの関係レポートをどうぞ。

●おさない子を育てる
(二六〇〇字まで)

子育てはやはり、女性にとつての最大の
関心事です。おさない子はいかいいい、だ
けど子育てはホントにしんどい!

現実のなかから、あなたと子供のありの
ままの関係を浮きぼりにしてください。

●大人になりかかった子供たち
(二六〇〇字まで)

反抗期、思春期、青年期の子供と親の関
係についてお書きください。大きくなった
子供の問題は、これまであまり言い立てら
れなかったと思いますが、若いお母さん
にも将来の参考になるはず。体験談をお待
ちします。

●忘れ得ぬ人々(二六〇〇字まで)

印象の深かった人の姿を描写してくださ
い。想い出の中にある人、現在関わってい
る人どちらでもけっこうです。いやな奴、
すばらしい人、奇人変人、あなたの詳しい
観察を。

●フリースペース(二六〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条
にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自
由のある「わいふ」ならではのコラム。

●わいわいがやがや(八〇〇字まで)

誰でも気軽に書けるコラム。

●サーブレシーブ(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載
せします。感想、反論、何でもどうぞ。

●ピンポイントニュース

(四〇〇字まで)

ねえみなさん聞いて聞いて!と言いたいほんのちょっとした話のページ。こうやって簡単に天井の掃除ができた、でもよし、安い旅館をうまく見付けた、でもよし。安い買い物、すてきな商品、何でもみなさんの役に立つごくごく小さいニュースを集めたいのです。

●おすすめの一冊(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

●情報コーナー(四〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまとめてください。

コラム以外の投稿募集

●特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

●特別寄稿

ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も

自由。本誌に適當と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

●カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

注意

●投稿は一人一篇に限ります。

●ただし次のコラムへのご投稿とは違ってかまいません。サブレシープ・ピンポイントニュース・情報コーナー。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みですので、ヨコ書きはご遠慮ください(書き直すことになるので)。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字、二十行を一枚に、行間をあまり詰めないよう、また禁則処理をしないで打ってください。

●ファックスでの投稿は受け付けません。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●締め切りは原則として偶数月の二十五日

(当日必着)。それ以後に着いたものは次号まわしとなります。規定枚数はきっちりではなくともよく、長くても内容がよければお載せします。

●他誌との二重投稿はお断わりします。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に。住所、本名は、そのすぐあとに併記してください。

また整理の都合上、住所には郵便番号を付記し、本名には会員番号(本誌送付封筒の宛名の下と、振替用紙にあります)を付記してください。

●ペンネームをいくつも使い分けるのは、ご遠慮ください。居住地もとくに理由がなければ記載したいのでよろしく。ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価します。濫用は困る、ということです。

●年齢を書きそえになりたい方は、名前の下に算用数字で。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

編集だより

●今回予定していた特集は、投稿が少ない上、採用できるものがありませんでした。

その代わり、といっているんですが、阪神大震災に関するご投稿がたくさん寄せられましたので、緊急特集の扱いにして掲載させていただきました。もしあれば写真をお送りくださるよう、皆さんにお願いしたところ、五名の方からご提供がありました。誌面でごらんのように生々しいものばかりです。

なお、神戸市東灘区北青木の小武海順子様にお送りした二五二号が、「避難先不明」として戻って来ました。消息をお知らせください。

●西宮市で学習塾をいとなんでいる石井布紀子さんが、塾を開放して拠点にし、被災者への幅広い支援活動をしています。息の長い支援活動を行なっていく予定とのことですので、近くにお住まいで手伝ってくださるお気持ちのある方、電話で連絡を取ってみてください。☎〇七九八―六四―五

八二九(早朝、夜中は遠慮ください)。

●グラビアが新しくなりました。女性だけでなく、男性でもユニークな活動をしている方を紹介していく予定です。適当な方がありましたら、みなさまからぜひご推薦くださいますように。

●二五二号の「いじめから子供の命を守るために」の冒頭に、「福島県の中学生」とあったのは筆者の書き間違いで、「愛知県」です、と訂正のはがきがきました。編集部も校閲の段階でうっかりしていました。お詫びして訂正させていただきます。

●今号へのご投稿は全部で九九通でした。

●「わいふ」を母体にして始めた「最高裁ウォッチングの会」はまだ続いていて、資料を集めています。総選挙が近づいてきましたので、最高裁の下した主な判決、関わった裁判官の名前など、「最高裁国民審査」のデータとして興味のおりになる方は、今のうちに編集部まで、「資料を送ってほしい」とお電話をください。資料代と送料とも実費七〇〇円でお送りいたします。

ではみなさまお元気で。

□購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。
すぐ本に振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様です。

WIFE・253

(隔月刊)

1995年5月1日発行

編集・わいふ編集部

定価550円(本体533円)

(年間購読送料共4500円)

印刷・平河工業社

発行所・㈱グループわいふ

東京都新宿区矢来町115

東海神楽坂マンション406

〒162 TEL (03)3260-4771・4773

郵便振替00150-3-110430

加入者名 わいふ編集部

□購読中止は……

必ずお申し出ください。
送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

戦うカレン民族 ビルマ辺境訪問記

岩永友宏 著

四六版152頁 税込価格1339円

2月28日発売



独立を求め、四五五年間にわたってビルマ(ミャンマー)の軍事政権と戦うカレン民族を取材した写真家の旅のルポルタージュ。依然としてスー・チーさんを軟禁状態に置くビルマ政権にあって、辺境の民は何を考えて、どう戦っているのか。写真多数掲載。

【目次】
 待望の入国許可証
 解放区へ潜入
 前線へ行く
 恐怖のキング・ドラゴン作戦
 砲撃に向かい合う日々
 川沿いの野戦病院
 点在する国境の避難民村

老いて生きる 映画『おてんとうさまがほしい』を語る

貞末麻哉子 編著

長谷川 健 編集協力

四六版128頁 税込価格1030円

3月10日発売

夫はキヤメラを
 向けた
 患う妻に
 アルツハイマー
 症を

アルツハイマー症を患った妻と、その夫との二人三脚の闘病生活を描いたシネエッセイ。『おてんとうさまがほしい』をめぐって、老夫婦の愛の在り方、生きがい、映画を製作した若き女性プロデューサーとスタッフたちの思いがほととほる。

【目次】

ベートーベンの肖像画
 生さんとの対話

はじまり／一人で生きる
 梅ヶ丘病院 ある生きざま
 フィルムとフラインダーの間
 夫婦の肖像

5月刊

P-3Cを
 ぶっとばせ

● 豊原区民と連帯する会
 ● 税入価格1030円

4月刊

もう待てない
 今こそ戦後補償を

● 戦後補償国際フォーラム'94 編
 ● 税込価格1030円

戦後補償を棚上げのまま金もつけに奔走しアジアへの視点を忘れて去った「戦後の日本」。被害者の生の声は、私たちが直視してこなかった日本の無責任体質を鋭くつく。南太平洋からアリユーシヤンまでアジア各国の人々が貧困なる日本を糾弾。

凱風社

上記価格はすべて税込価格です。

(送料/1冊300円)

〒112 東京都文京区後楽2丁目22番12号

☎03-3815-7633 FAX.3815-9510 〆00150-0-88715

農文協

〒107 東京都港区赤坂7-6-1

☎03(3585)1141 [各税込定価]

●内容見本呈

●私らしいお産、赤ちゃんにやさしいお産のために／

シーラおばさんの妊娠と出産の本



●シーラ・キットンガー著 「お産は、もともと女たちが経緯を分かち合いながら手伝ったもの」と語る英国助産婦教育の第一人者
●戸田達子・きくちさかえ監訳 岡本千草・佐藤由美子・大谷直美・菅沼ひろ子他訳 ●助産婦・保健師他主眼女性スタッフによる邦訳

世界30ヶ国でベストセラー／
百万読者に愛された女性の立場からの妊娠・出産完全ガイド・待望の邦訳！
妊娠初期から出産・産後までを豊富な写真・図解・イラストでわかりやすく解説。
医療関係者や保健所等の出産準備クラスにも妊産婦の気持ちかわかり役立ちます。



●A/B判上製図入付
●定価5,800円
●結婚祝いなどの贈り物にも最適はれます。

好評発売中／

■農文協のお産の本

お産がゆく ●少産時代のこたわりマタニティ

お産って楽しいね ●現代お産事情を産む側の目で追う。 *12500円

お産って自然でなくっちゃね ●吉村正・山田桂子著 手づくりお産の吉村病院では。 *12000円

うれしく水中出産 ●片桐助産院の現場から 吉村正著・清原なつ子監訳 ある産科医の提言。 *13000円

山内孝道著 経験者が皆「よかった」という水中出産。 *12500円

タイミング妊娠法 ●性交のタイミングで元気な子を。 *12500円

市川茂孝著 私らしきで産む産まない 産む、産めない、産まない。人生を豊かに。 *12500円

●大人も満足、小さい子のいる家のごはん料理

奥園壽子の「ごはん料理ありったけ」



主食といわれながらも主役になり切れない米にスポットをあて、生の米からはもちろん、残りごはんまで、すべておいしく料理しました。 ●イラスト満載A5判・160頁・カラー口紙付 *13500円

●奥園壽子の本 大好評／

子育てごはんわたし流 子育てごはんわたし流 子育てごはんわたし流

子育ておやつわたし流 子育ておやつわたし流 子育ておやつわたし流

風味 バツグン 和風ケーキ＆クッキー 風味 バツグン 和風ケーキ＆クッキー

タワラする二段階料理 *13500円

バターはフツ煮貝は60 *13500円

気持につくって中身は軽くなる *13000円

★からだを通して地球環境問題を考える視点を提起する、画期的な本！

きみのからだは地球環境 全5巻

最新刊



小原秀雄編／下谷二助監

1 きみは、どこからやってきた？

2 きみは、死んだらどこへいく？

3 きみには、きみの環境がある

4 人間のくらしが、ヒトを変える

5 地球はちいき、地域はちきゅう

●A/B判各160頁 ●主文帯標準1000円(分売可) 生物としてのヒトをとりまく環境は未知の新しい段階に入っている。内在する「環境」と外の環境を考える本。

■姉妹図書

きみのからだは進化論 ●全5巻

黒田弘行著 下谷二助監 環境・性・身体教育の感性と知性を育む絵本／からだに刻まれた36億年の進化史を、やさしく解説。 *各2060円